

で、埃及王の判断は偏頗に陥り易いであらう。兎角いぢめる者は、いぢめられる者にいぢめられたからいぢめる事になるのが多い。

髪の白い Mummy を見て、何千年たつても年寄りは大張年寄りだと思ふ。

犬や猿、魚の木伊乃も、面白いものだ。木伊乃のパンも。

蛇の畫にずらりと百足の様な足をつけたり、又さまざまの形の甲虫を摸したのも面白い。

牛の腹の下に庇はれて居る埃及の昔の王様の畫がある。牛を崇ぶ埃及や印度が、牛を食ふ John Bull の保護を受けるも、面白い因縁、と思ふ。

王者の葬送に用ゐた、と云ふ船形など見ると、“おふねいり”と云ふ語などに残つて居る日本の故郷は埃及をかけて居た、と云ふ説者を嗤ふ事は出来ぬ。

大張昔の埃及は偉かつた。埃及の日は曾て天に沖する時代があつたのである。

その日は久しく砂に沈んだ。

埃及の日は、上らぬであらう乎？

博物館にて

あ い

三千とせの桃のよはひを二かさね

なほうらわかきおんふたりかな

椅子に倚り ならびて 在す 埃及の

王と 王妃の おんむつみかな

幾丈の 石の立像 眼 うごき

三分の女に 愛の脉 うつ

神の手の いみじさ を 戀ひ 人の子の

あはれ とどむる 木伊乃の姿

三月十九日。カイロに来て一週目。R少佐からは、私共の Pass port を返へして来て、エルサレム行にハイファ経由の必要の有無は、問合はせ中、とあつたばかりなので、今日は午後容子を聞くべく Savoy Hotel に往つて見る。カイロは、銀行でも、官衙でも、三時まで午休みをする。時刻が少し早過ぎた爲に、私共は、副官の案内で、待合室に待たされる。Bath room を待合室にしたらしく、Sofa の Cushion は脇が出て、そこらぢう ばさばさと塵だらけで、すべてのものが年來の軍勞を語つて居る。

Rさん今日は次室で立ちながらの應接だ。ハイファを経ず直接エルサレムに往つてよい、とはありがたい。それから、私信はよいが、公信は原稿を Censorship に附する爲、一度此處へ送つてくれ、とは此も其意を得た。但“小ベルリンが隨處に出来て、”汽車なんか不定だし、Port Said まで三四日もかかる位だから、當分出發は駄目、とは困つた。Dinner にお招きしたいが忙しくて、と云つて、少佐は直ぐ引込んで了ふた。

三月二十日。朝、汽車の實狀をただすべく、徒歩停車場に行く。途中不圖 Hotel des Voyageurs を見つけた。十三年前の私の宿である。備後丸で日本から坡西土まで特別三等に同室した埃地利人で、あの上海まで同船したチェックのお醫者同様不品行の嫌で退去を命ぜられたと云ふ Rippel と云ふ男が、カイロに住つたら泊れ、と教へてくれた其宿である。私の室は二階の隅の一室で、疲れ切つた一人旅の午後、年寄りの埃及人が物賣り聲の物悲しく聞きなされた事を忘れはせぬ。私は妻にその室を指して、仰ぎ見た。今も營業して居るか分からぬが、子供を抱いた西洋婦人の姿が下から眺められた。

停車場に行く。出札口が皆しまつて居る。午前十一時に特別軍用列車が出るさうだ。便乗は出来ないだらうか。Savoy hotel に住つて見やう。

馬車が居ない。たまたま居るのは皆自用馬車で、呼びかけると、頭を掉つて往つて了ふ。後で馬車屋の Strike と知つた。兎も角も急いで Savoy hotel に行く。大汗になる。Savoy hotel の前まで来ると、急にまた氣がかわり、何分の通知がある迄、おとなしく待つことにする。

午後になつて、Wolsely 大尉の名で、今日以後、四日間、軍人以外、一切旅客の往來を禁ずるから、出發は其後にしてくれ、との通知が来た。

* * * * *

三月廿一日。街を歩くと、香港で見たあの淡紅色の木の花、香港ざくらが美しく咲いて居る。此處では、カイロざくら、と云はずばなるまい。今日も、馬車屋の Strike で、夫妻歩いて Musky Bazar を見る。汚ない裏巷路など通つて、いやな氣もちになる埃。及床屋で髯を剃つたら、少し唇下に傷をつけてくれた。Market で柑橘を一籠買つて、それからレモン水を一盃立飲みして歸る。

午後、書き物をしながら不圖見ると、一塊の毛が椅子卓子の下をころげて行く。猫か、と思ふたら、小さな Poodle だつた。毛深で、一寸顔が見えなかつた。毛の中から黒いものが一つ出てるは、よく見れば鼻であつた。呼ぶと、後足で立つて見せたり、私共の手を舐めたり、それから腹這ひになつて、寄つては、追かけて下さい、と云ふた様に、びらりと飛びのく。可愛いものだ。頸輪を見たら、“Captain B.C.—Sapper” とある。Cake の一片を與へて歸へす。

* * * * *

三月廿二日。Strike も一先づ收まつたので、馬車で博物館に行き、三時間ばかり昔の埃及に遊ぶ。番人の埃及人が、金屬の肩章をもつて来て、如何につけるか、上下を教へてくれ、といふ風をする。それがただの亞刺比亞數字でなく例の速記文字のやうな亞刺比亞文字であつたには、少し驚いた。獨習本で知つて居たので、妻が正しいつけ方を教へてやつた。

歸つて午餐後、少し午睡をして居ると、扉を敲く音がする。それは熊大主計であつた。昨日要事で亞歷山から来て、明日は坡西土

に歸るさうだ。海軍人だけに、往來が自由なのだ。共に茶菓を喫しつつ、エルサレム旅行談や、カイロ附近の名所談を聞く。

今日は隣の Poodle 君の來訪はなかつたが、朝は妻が投げてやつたパン屑を拾ひに、五六羽の雀がやつて來た。

此頃は夫大抵食堂に出る。黒人の給仕が、私共の顔を見覚えて、特にパンを澤山つけてくれる。Ceylon の Hotel はお話にならぬ程まづかつた。Borneo 丸の方が、餘程好かつた。Shepherd's hotel は、流石に好い。私共は空氣が乾燥するので、殊に Icedwater を喜んで飲む。乾燥と云へば、熊さんの話に、坡西土で烏賊のしほからをつくつたが、倒置復原しなかつたさうだ。

Dinner が済む後、一方の Hall が奇麗に取りかたづけられ、九時半から Small dance がある。私共も Restaurant の椅子から眺める。赤い、青い、白い、緑や、紫の舞踏服を着て、纏子の半靴をはいた女の大部分は、十代の處女。男は大抵カアキイ服の若い士官。燕尾服なども居るが、幅の利かぬ事夥しい。數番の Valse。私共の眼にも上手なのは面白い。然し女達の服裝の大部分は、お氣の毒ながら、好い趣味とばかりは、稱へられない。それから、踊りながら話すのは、傍觀者には嬉しくない。それでも、踊る人達には溜らなく面白いと見え、何度も何度も同じ振りをくり返へし、明ける迄もと踊りぬく。私は、踊る若人たちを見つつ、乾いた砂に若い肉體を埋めて、永久に踊れなくなつた、多くの Robert, John を思ふを禁じ得なかつた。

命全く いくさ を へて Charlie が

踊るよ 夜一夜 紅衣の Kate と
とぞ

* * *

母の腹から生るる者が、さう樂に血をぬけ得られやう乎?“智識を増す者は憂を増す”と云ふが、“苦を減す者は、生命を減す”とも云へやう。苦が無くなるのは、樂がなくなるのだ。母の死で、私は、やはり弱つた。

たらちねの ゆきまししより わがせこが

涼しの 風も 肌寒覺ふ

あ い

全くである。印度洋の Depression は過ぎた。然し、地に住む私である。容を變へ、品を變へ、憂愁はなほ襲ふて來る。“世の中は、うき身に添へる影なれや、思ひ捨つれど、はなれざりけり”と云ふ歌のやうに、過去は中々私共をはなれぬ。

私は妻に曰ふ。人は、過去の重荷に苦しむ。はなれやうとしても、離れぬ。わるくすると、過去に責め殺される。唯一つ、過去から這るる道がある。それは、氣をかへて、現在を楽しむのだ。

私は、Arabian Night にある 船乗り Sindbad の話の中に出て來る“老人”の話に妻にした。Sindbad が難船して、ある島に上つた。

不圖出て来た老人に、肩を貸してくれと云はれ、老人を肩にのつけた
が最後、老人は中々下りやうとせぬ。晝も夜も乗りつづけて居る。
時々兩足で頸をしめては、馬を駈けさすやうに、Sindbad を走らせ
る。Sindbad は途方にくれた。其内、ある日、不圖野葡萄を見つけた。
其實をとつて、葡萄汁をしぼつた。日ならず酒になつた。Sindbad
は飲んで酔がまはると、心嬉しくなり、老人を肩車にのせたまま、飛
んだり、跳ねたりする。老人も欲しくなつて、飲むと、酔ふて、肩車
の上でふらふら跳り出した。今だ。Sindbad は、やつと一聲老人をふ
り落して、一撃の下に往生させた。

つまり、老人……過去……は、もがいても、あがいても、はなれぬ。
ふりはなすには、唯一つ、現在に躍るのだ。

而して、私は、Fitzgerald の英譯になる波斯の詩人 Omar
Khayyam の絶句一首を誦して、妻に聞かせた。

“Ah my beloved! Fill the cup
That clears of past regrets and future fears!
Tomorrow?—Why, tomorrow I may be myself
With the yesterday's ten thousand years!”

私共は、過去を感謝し、未來を祝するから、必しもこれに共鳴はせ
ぬ。然し、現在の Cup に歡喜を満たすに、何の無理があらう？

妻は頷いた。私は、此夕、Chief waiter を呼んで、葡萄酒の一
瓶を取寄せ、妻と紅の杯を合はせて、“現在”の爲に祝杯を擧げた。

其 六 日 の 都

(一)

三月廿三日。日曜で、寺寺の鐘が鳴る。服を着更へて、
子供が街に遊んで居る。

午後は、昨日熊さんから聞いた Heliopolis に往つて見やうと、
馬車で出かける。

停車場から、當分鐵道線路に傍ひ、北東に市をはなれて大路を走
る。上流埃及人のハイカラな住宅などが斷續して居る。一時間ばかり
して、競馬場や遊園などある新開らしい町に來た。これは近來の
經營にかかる新ヘリオポリスで、私共の行くのは、古跡のヘリオポ
リスなのである。

十二三の男の子と、其妹を連れた商人風の佛蘭西人が、通りか
かつたのを、呼びとめて、私共の老馭者は、通辯を頼むのであつた。ヘ
リオポリスの古跡なら、それはマタアリヤと云ふ處で、自動車や馬
車は金がかかる、カイロへ引かへして、汽車でお出なさい、とすすめ
てくれたが、馭者が行くと云ふので、私共は件の佛蘭西人に禮言ふ
て、馬車をすすめる。

新ヘリオポリスから、少し左に折れて、北に走る。緑の蔓這ひ、紫

の花垂るる瀟洒とした新しい別荘などがつづく。紫がかつた甘蔗を積んだ車が来る。馭者は二三度路を問ふて、二十分ばかり駛せてマタアリヤの村に来た。アカシヤの木蔭の小さな村である。馭者が手招すると、十五六の土人の子が案内するとて、ひらり馭者臺に飛び乗った。少し往くと、此處だ、と子供は飛び下り、馬車は止まつた。青い筒袖着流しの土人が出て来て、私共を別荘の門見たやうな構内に案内する。冷たい佳香が、さつと一陣鼻を襲ふ。若木の蜜柑の花盛りである。佳香とほめると、案内者が一房妻の爲に摘んでくれた。行き止まりに、棚の隔てがあつて、内に半枯れした Sycamore の老樹が一株、その側には芽生か、植ゑたのか、若い新樹が元氣よく出て居る。“Virgin tree”である。赤ン坊の耶穌が父母に連れられ、ヘロデの虐殺を逃げる爲に埃及に落ちて來た時、Virgin 達が其蔭に休んだと俗に云ひ傳へて居る。其“Virgin tree”である。耶穌の埃及落ちなどは、眞偽の詮索も野暮な話だが、傳説は可なりふるいものらしい。今のは老樹の方ですら樹齡二三百年には過ぎないと云はれて居るから、“Virgin tree”も何代目かのであらう。佛蘭西と埃及と近い仲であつた時、ハイカラ王の Ismail、回教信者には要もないもの、ナポレオン三世の妻ユウゼニイ后（先頃死んだ）に此 Virgin tree を贈つたが、もらつたユウゼニイ后も、埃及に置いてこそ、と思ふたか、ぬいて佛蘭西に持つて往く事は止めにしたので、斯く今日まで残つて居る。

Virgin tree から少し往くと、大きな井がある。Virgin's well

と呼ばれて居る。水面は近く 水深は三十呎あるさうな。直角に置かれた大きな木製の齒車で、車が廻れば、かはるかはる水の満ちたバケツが上つて来るやうになつて居る。車を廻はして案内者が汲んでくれた水は、冷たくこそないが、和らかな、わるくない水であつた。水量が多いから、灌溉用に重寶であらう。

(二)

案内者も馭者臺にのつて、馬車はまた少し往つて畑の中の Obelisk 前に止まつた。此處は即ち往古のヘリオポリスの跡で、立つて居る此オベリスクは、現に埃及に立つて居るオベリスクの中で、一番古いとせられて居るものである。古昔の埃及人は、大陽即ち Ra を拜した。而して日の宮を建て、日の都を建てた。ヘリオポリスは、日の都の義である。代々の埃及王は、自ら日の裔と稱して、何處に都しても、此處の神都は尊崇された。此處は即ち埃及の伊勢大神宮である。舊約聖書に、ヤコブの子ヨセフが、埃及王の勅令で、オンの祭司の娘を妻に娶つた、とある、其オンの古跡が、即此處である。此處には、古代に有名な大學があつて、亞刺比亞人の傳説では、モオゼは其大學教授の一人であつた、と言ふて居る。希臘時代までは、大學の評判は高く、プラトオなども來て、其處の僧と討論した、と傳へられる。然し、耶穌紀元の頃は、神殿はまだ無事であつたが、最早其大學も都もなくなつて居たさうな。それから千九百年、日を祭つた其殿も

失せて、Obeliskのみ立てられたままに立つて居る。

オベリスクは、赤花崗岩の一本立、四面に象形文字が一ぱい刻せられて居る。高さ六十六呎。下部は埋れて居たのを掘り下げて、四角なタタキに水が満ちて居る。案内者は、七千年になると云ふ。然し案内書によれば、オベリスクの面にある建立者 Usertsen Iは第十二朝の王で、紀元前二千七百五十八年頃と推定さるるから、先づ五千年近いものなのだ。頭に近く黒い筋の見えるのは、破損を繕ふたのであらう。

私共は、オベリスクの邊に立つて、あたりを見廻はす。古昔の日の宮は、唯一のオベリスクを形見に残して、周囲は畑になり、大麥小麥が一面穂に出て居る。首蓆や黄いろい花の咲く牧草の畑には、牛が悠悠と草を喰ふて居る。私共は好い氣もちになつて、日光と空氣を吸ふ。平生日光と空氣を澤山吸ふて村住居をして居る私共に、唯十日でもカイロの町の生活は、最早苦痛であつた。此處にも井があつて、目隠しされた一頭の牛が草を廻はして居ると、井の水が滾々と流れて来る。此方には、休番になつた他の一頭の牛が、土に臥して、悠々と草を食むて居る。北の方には、古都の名残と云ふ、土壁の残りが、小高く見えて居る。昔、日を拜し、日を崇め、其爲に神殿を立て、町を建てた王や僧や學者や人民、其僧の娘を娶つて二人の男子をさせたヨセフや、私共は見なかつたが、附近の花崗石塊に Ramses 二世の名を残して居る其ヨセフの子孫をいぢめた Pharaoh も、ある者は少しの形見を残したばかり、或は何ものも残さずに、消えてしま

つたが、日は五千年の昔さながらに、平氣な顔して、今新紀元の第一年三月廿三日の畑と人と牛羊を照らして居る。親はなくても子は育つ、と云ふが、子が生きかわり死にかわりしても、親はまだ何時までも若若しい親である。私共は、其日の下に立つて、昔の埃及から、今の埃及を思ふた。而して、日を旗じるしとし、日を國號とする日本から、其子其女が此處に来る事の、偶然ならぬを、思ふのであつた。

日子日女は 日をおろがみし いにしへの

日の都 をば 見に 來つるかな

大日 を 昔 拜みし 日の都

ヘリオポリス に 今日 來つる かも

一もとの オベリスク をば しろし にて

都は 麥の 畑に なりぬる

亞刺比亞人は、此處を "Ayin esh shems" と云ふさうな。即ち "日の泉" の義でめる。

(三)

オベリスクから、半里あまり、馬車を東南に駛らし、入場料四

P 拂つて、佛蘭西人經營の駝鳥園を見る。先には八百羽から居たさうな。今は百に足りない。一家族づつ、幾區にも割つて、飼ふてある。卵を温めて居る牝。それを立番する牡。駝鳥は、一夫一婦の嚴重な鳥さうな。卵は、四十五日で孵化する。雛は、成鳥した家鴨の様な。駝鳥は三十年近く生きる。食物の中で、柑橘が一番好きとは、私共も同様だ。休憩室には、駝鳥の羽を賣つて居る。美しい白い羽四本一束で 150P、即ち十五圓と札がついて居る。私共は、買ふ事を見合せ、園内の高い展望臺に上つた。

好い見晴らしだ。遙南に小さな小さなピラミッドが見えて居る。カイロは、西南に唯六哩。當面に小高い茶色の一堆、Mokkatam 丘の麓には、城砦と回教の尖塔が見えて居る。新ヘリオポリスは、つい近く、それから、其附近の砂原には、千を以て數ふる兵隊の天幕が、夕日に點點して居る。

ここで案内者を歸へし、また馬車に乗つて、五時前にホテルに歸つた。

其 七 Helwan

三月廿四日。街上に哀音を聞く。バルコニイから見ると、葬儀馬車が通る。先日の騒ぎに死んだ埃及人でないか、と思ふ。

午後 Savoy ホテルに行く。時間が早いので、馬車を驅つて、昨日ヘリオポリスの駝鳥園から眺めた城砦に行く。途中に、史丹の宮を過ぎる。何の圍壁もない平宮である。

城の門にかかる。英吉利の士官が“日本人ですか?”と云ひつつ難なく馬車を通してくれる。城内にある Mahomed Ali の蠟石造りの回教寺は、此前一寒見たし、生僧小錢を持ち合はせないの、見ぬ事にする。城内を馬車は廻つて、一番奥の方に行く。英吉利の兵士が一名、一群の埃及人を押送して行く。送るも、送らるるも、悪くない顔をして居る。此處には、革命騒ぎで、大勢の學生や、良不良さまさまの連中が、監禁されて居るのだ。

Savoy Hotel に往つて見る。四日間は旅行禁止、と云ふ其四日目の今日だが、R 少佐はまだ明白に私共の出埃及の日を言はぬ。其懐に入つた以上、待つ外はないのだ。私共の間に、斯様な問答が交はされた。私“カイロは面白い所で、埃及學の研究には持つて來いですが、私共は少しあきあきです。それに、あなた達英吉利人の様に、我々は金持ちではありません。Shepard's Hotel のやうな Expensive

なホテルに長逗留は、困ります。” “Palestine だつて、随分 Expensive です。” “それは然です。然し、彼方では、要が澤山あります。埃及は、もう澤山です。” “それはお察しします。が、何分時節が時節ですから。” “兎に角、私共は Exodus の日を待ちかねて居ます。申す事は、それだけです。”

“印度”で御機嫌損じて以來、Rさんは、何時も自室でなく副官室で會ふ。而して大抵立話だ。今日も“甚 Rude ですが”と、挨拶つきで歸へされた。全く、忙しい處に、押かけ客は、迷惑は知れて居る。“Rude はお互です。全體、戦争と云ふやつが、そんなに Polite なものではありませんからね”と云ひたかつたが、云はなかつた。三月廿五日。今日は、カイロの南十五哩、Helwan の鑛泉に往つて見やうと、馬車で市の南 Bab el Luk 停車場に往つた。妻はカイロで新調の、白茶服の着初めをする。が、汽車の出るに時間もあるので、妻に Gizeh の動物園を見せる。ピラミッド行きに渡つたあのナイル鐵橋を渡つて、間もなく動物園に來た。半 P 拂つて入場。當り前の鴉が、名前つきで、金網の中に納まつて居る。羽白の鴉ばかり居る埃及には、純黒の鴉が珍客である。猿の中には、銀の着物に黒縞の Shawl をはをつた様な美しい蘇丹産のがあつた。日を浴びて、水邊に眼を瞑つて居る鱒も、場所柄で、自然に眺められた。

上流の橋が閉ぢられて居るので、元の道を停車場に引返へす。

十一時十五分發車。

先刻往つて見た城砦を左手に見つ、汽車は美しくない市の南

部、それから背のカイロの跡を通り、南に奔る。右には、ナイルの流れ、其處に三角の帆を張つた舟が浮いて居る。黒緑の柳樹林の彼方には、ギゼのピラミッドが小さい。

白帆浮ぶ ナイル川沿ひ 柳樹林

黒き あなたの 小きき 三尖塔
びらみつと

maadi 停車場附近は、英吉利人の住居が多い。樹々の緑の中に別荘風の家點點し、莢竹桃の紅、扶桑花の緋、金雀花の黄、藤は薄紫に、ブベンゲリアは牡丹色に、アカシアの花は白く、サルギア、松葉菊、薔薇、朝顔などが、さまざま緑を點綴して、烈日熱砂の中に一區の清涼世界を造して居る。何處に往つても、其處で一番好い住み方をする英吉利人が、羨ましい。

緑を過ぎて、荒寥とした砂丘の景になる。ナイル向ふ、西南遙に、一番古いと云はるる、Sakkara の段段造の三尖塔が見えて來る。ナイル河邊七十のピラミッドの中に就て、私共が先日見たギゼエの一番大きく、而して今日迫に望むのが一番古い。EL Masars の停車場から、少し東南に往くと、石灰岩の石坑があつて、ピラミッドの石も此處から切り出したと云はれて居る。更に其向ふには、すっかり化石した林も、大小二ヶ處あるさうな。

正午、汽車はヘルワンに果てた。

鑛泉の故に、ヘルワンは可なり立派な町をなして居る。大きな

ホテルや遊樂の建物もあるが、戦争の爲にすべて休業の姿で、ホテルなど大抵は閉ぢて居る。かんかん日の照る眞晝中、四階五階の大きな石造や煉瓦の建物が、窓も戸もすつかりしめ切つて、ひっそり閉と死んだやうに立つて居るのが、物凄。其一番大きな一つをさして、あの中に捕虜が入れてある、と馭者はいふ。

私共は、馬車で、一番立派な Royal Bath に往つた。而して二人ご27P. 拂つて、各自借切風呂に入つた。湯は無色透明、少しの硫黄氣と多分の鹽氣がある。船中では始修鹽場に入り、ホテルでは時々淡水の風呂に入るが、鑛泉の心地は、また自づから別である。

湯上りの體をまた馬車にのせて、私共は Antonie と云ふ小さな下宿ホテルに往つた。肉無しのライスカレー、隠元と mutton の午餐をする。逗留客の大部分は、湯治に来て居る婦人で、殊に猶太人らしいのが多かつた。

食後、園の葡萄棚の蔭で少し涼む。

“ダンナ!”と誰やらが呼ぶ。こんな處で、誰が“旦那!”など呼ぶの乎。びつくりして見ると、先刻の若い馬車屋が、最早汽車の時間と呼びに来たのだ。誰が教へたのか。己が國語を聞くことも、嬉しくない場合がある。

三時 Helwan を出て、四時前十五分には、最早カイロに歸つて居た。

馬車が、エズベキヤ公園の前まで来ると、往來止めがある。皆何かしら待つて居る。やがて、停車場の方から、自動車が数臺走つて來

來た、顯官らしい埃及人が、乗つて居るのもある。紫に銀光のきらびやかな儀仗兵を前座に、カアキイ服の可なりふけた英吉利人もある。婦人同乗のもつづく。史丹の御通行か? いや、英吉利の將軍、と馭者は云ふ。カイロの馬車は、驢込の前に、料金制の札を掛け、馭者臺には、苜蓿などの青草を馬の爲に積んで居る。先日來の馬車ストライキは、止んだが、私共の今日の馭者なども、忿とした顔をして居る。

夕方バルコニーに出る。黄昏である。毎夕毎夜の事ながら、埃及の夕空夜空の美しさ。透明で、光る空。黄昏が夜になると、空は紺……青、殆んど黒青に深くなつて、星が喫驚する程爛爛と光り出す。北斗七星が直ぐ眼の前に光る。Shepherd's Hotel は北面し、私共の室は表二階にあるので、バルコニーが涼しく、時々は涼し過ぎる事があるのも、道理だ。北斗七星は、粕谷で眺める程高くなく、印度洋で眺めたやうに、海に浸りさうに低くもない。それから、頭上に晃晃と光る一星は、ぼるねお丸でお馴染になつた Sirius である。ぼるねお丸と云へば、船を下りて約二週間、最早何の邊まで往つたらう? と私共は瞭する。

此夜は、疲れて Bed に上つたが、ホテルの内外何となく物騒がしく、おちおち眠られないのであつた。

* * * * *

三月廿六日。埃及メエルを見れば、昨日エズベキヤ公園前で、人拂ひして、自動車が數臺來たのは、新任の埃及統監 Allenby 將軍であつた。埃及の形勢頗る險惡で、パレスチナの常勝將軍として威望あ

るA將軍が新に鑿臺となつてやつて來たのだ。

午後、ナイル中島公園に往つて見やう、と馬車に乗る所に、ホテルのボーイが一の大封を持つて來た。急ぎ披けば、パレスチナ行きの許可であつた。廿八日坡西士行、廿九日エルサレムに向け出發、と云ふ命令である。

Exodus の日が、やつときまつた。

私共は氣も軽くなつて馬車をナイルの中島公園に走らせた。彼の鐵橋を渡つて、島の三角頭が公園になつて居る。色色の花が咲いて居る。子供が Catch ball をして居る。散歩の若い兵士が、私に時間を問ひに來る。木蔭に午眠して居る男もある。私共は、唯有る木蔭に、草を藉いて、足投げ出した。而して、あらためて、ポケットから、先刻の大封を取り出した。三月廿八日に、カイロから坡西士への通行許可、三月廿九日に、坡西士からカンタラ迄、カンタラからエルサレム迄の通行許可、外にR少佐からエルサレムの軍務知事 Storrs 少將に宛てた紹介狀が入つて居る。Storrs 少將と云へば、つい此の程カイロに來たさうな。A將軍に會見の爲だらう。

私共は、あらためて感謝に充された。

* * * * *

三月廿七日。午後 Savoy に往つて、R少佐に頃日來の禮を述べる。Rさんの細君は、英吉利に居るさうな。私信はよろしい、新聞に送るやうなものでも書いたら、一應此處へ送つてくれ、東京英大使館に送つて檢閲をさすから、譯文を添へて送るには及ばぬ、と云ふ

Rさんの言であつた。それは、かさねかさね面倒が省けてありがたい。私共は再會を約して、Rさんと握手し、好好爺の副官W大尉にも懇に握手して、Savoy を出る。

半月の逗留は、無意味ではない。それは、英吉利の手を假りて、埃及が私共を引きとめたのである。英吉利もまた、見てほしく、聞いて欲しかつたに違ひない。

私共は、半月滞留して、見た、聞いた、双方の立場も、申分も、腹に入つた。

それで、私共を引とめた手が、私共をゆるしたのだ。

夕方、バルコニーに出て、眺める。半月の逗留、拘留とも云へる逗留、随分もどかしくもあつたが、いざ立つとなれば、流石に名残が惜しい。日光の國、砂漠の國、埃及の夕空は、今日も不相變美しい。Cobalt. Cobalt の夕であつた。

其 八 埃及の女

埃及女の黒い覆面も、マホメット信仰以來の風習とすれば、千四百年近く過して居る。生活の必要から、眼のみは出して、小鼻の上を、黄や赤の横縞に塗つた止木で、覆面の上下をつないで、辻などに蹲りながらトマトなど賣つたり、舊劇に出る襦袢姿のやうに、素足で黒被の裾を地にひきずりながら、小走りに走りよつて、道ゆく人に、煙草やマツチをすすむる所謂下層の婦人達から、型は同じでも、艶艶した黒絹の被をきりりと着流し、顔は黒い紗や、ハイカラは雪白のレエスで掩ふて、踵の高いゴム靴をはいて、歐羅巴人そこのけに馬車など乗りまわす所謂上流物持の婦人達、歐米の教育を受け、外國に出て洋装凛々しく文筆などつて居る新婦人すらあるといふことだが、一般に見る外からの埃及女は、脊がすらりと高く、特に眼が大きい。

黒布につつまれながらも、出ずには止まぬ生命が、千餘年を過す間に、次第次第に眼に集注したのではあるまいか？わたくしは、全くさう思ふ。其大きな眼を、黒紗に掩ふて、何も見ないかのやうな此風俗は、一方からは、嫉妬の隠れ家として、男子に對する女の強味かも、知れない。又熱帯の強烈な日光から、女の容色を保護する、又女

性といふもののこわもてになるかもしれない。何れにせよ、保護ではある。

けれども、日蔭の花は、生命が萎む。偏狭な保護は埃及女を弱くし、弱い埃及の女は、埃及の男を弱くした。面のみを日光にむき出して働く下層の婦人には、現にわたくしが、大示威運動の日に見たやうに、空籃振り廻はして、愛國の運動に烈しい共鳴をして居たあんな婦人が居る。

私は思ふ、埃及の男が、其女の面から全然黒い被を取り去る程に埃及女を信愛し、埃及の女達が、あの黒い被をはねのけて、瑞瑞しい太陽の下に、自由に新しい空気を吸ふて、生生とした生命を全身に漲らす時に、はじめて埃及の目がまた瑞瑞しくのぼるであらうと。

あ い

其九 坡西士

(一)

三月廿八日の朝、私共は、送迎馬車で Sheppard's Hotel を立つ。迎へに來た彼緑服が、見送りに來て、色と面倒を見てくれる。日に唯一回の汽車なので、軍人平人打混じ、停車場は非常の混雑である。

午前八時發車。

Australia と腕章のある若い士官が同車する。佛蘭西で脇腹に負傷したさうな。封筒を持たぬかと云ふので、手提から出してやつたら、巻莖を彼はすすめるのであつた。一番簡便な愛想は、莖の一本だが、私共が喫まぬので、間がぬける場合が多い。時には喫煙せぬ日本人を、不思議な顔して眺める者がある。先頃來の暴動で、カイロ坡西士間も、電線が切斷されたり、線路が破壊されたりした。それは復舊して居るが、やはり何角と故障があると見えて、汽車はしばしば立往生して、中々遅い。とまる毎に、私共も外を覗く。

士官は、此頃の汽車はいつも“Lait”で、と言ふ。倫敦の新聞賣子は、Paiper と云ふと聞いたが、士官の訛りも其筆法であらう。

線路下の水溜りに、白や碧色の睡蓮の花が咲いて、銃を負ふた英吉利の若い兵士が、釣をしたりして居る。

銃負へる Jack 釣する 埃及の
つつ

野川に 白き 睡蓮の花

坡西士近くなる頃、東の窓から妙なものが見える。赭黄いろい、横長いものが、頗る低くぶら下つて居る。空中のやうでもあり、水中の様にも見える。飛行船、と最初私は思ふた。然し少しも動く容子が無いので、小島だらうと思ふ。兎に角變だ。士官に聞くと、“Mirage です”と云ふ。やつぱり Mirage であつたか。成程、さう云へば、西の窓から、鹹湖のあなたに、妙な岩が見えたり、帆船があつたりするが、はつきりして居て、やはり如何も少し變だ。まざまざと見えるそれ等は、此前此處を通つた時、一向見かけなかつたものだ。矢張それも mirage であつた。似たと云つて、あまりこれは眞物らしい。成程、これなれば、欺される。

汽車は、一時間半もおくれて、日ざかりの二時に、坡西士に着いた。

(二)

非常な混雑の中を、兎も角も自動車に乗つて、Fioravanti に行

く。南さん兄弟は、私共のカイロ逗留があまり長びくので、心配して、手紙を出さうとして居る處であつた。

兎に角、明日の出立迄に時間がないので、もてなしのアイスクリーム珈琲に元氣をつけ、南さんの事務所、雑誌類や素麩、干饅頭、そんなものの山と積まれた物置きに入つて、夫妻大汗になつて、パレスチナに持つて行く物、残り物を擇り分ける。慶君が扇風機をかけたなり、ラムネを持つて来てくれたりする。

南夫人の Leah さんが、挨拶に来る。今年十九のおとなしい伊太利婦人。

十時過ぎに、やつと荷物の整理が終へる。大部分は、南さんに預けて置く。而して八時頃、慶君の案内で、埠頭近くの Marina Palace hotel に行く。南さんから電話が往つて居たので、私共は表二階の一室に導かれる。

それから、南さんの懇招黙止し難く、顔を洗ふと直ぐ慶君に導かれて、私共は南さんの住居に往つた。公園に面した四階。客間には、南さん兄弟の阿父阿母の寫眞が掛かつて居る。阿父は、私と同年の五十二さうな。南さんは三番目である。Lさんとの結婚は一昨年、未だ子供がない。Lさんは少し日本語を話す。南さん兄弟が、ぞんざいな言葉を使ふと、“おい、往かんか”などとLさんが直ぐ其ままを真似るので、兄弟同士の話も、自然丁寧な言葉を使ふやうになりました、と南さんは笑つて居た。

小さな食堂で、私共は單純な、うまい夕食の馳走になつた。米箱

で冷やされた食後の Orange は、殊に私共を喜ばした。カイロあたりで食ふた 埃及産の、薄皮でやや小形のそれと違ふて、これはネエヴルでない正銘の亞米利加 Orange にひとしい、大ぶり、厚皮の、したたかものであつた。私共がこれから往かうとする Syria の産さうな。

客間に歸つて、Lさんが稽古中の Piano を聞く。妻は南さん夫妻と Domino の遊びをした。慶君が Banana 水を馳走する。しい風が海から吹いて来る。

私共がカイロ逼塞の間に、坡西土も大分騒いださうな。暴民が停車場破壊に押しかける。それを追拂ふとて、英人が機關銃で掃射したので、不良民のみか、良民も大分死傷した。坡西土の停車場に私共がカイロから歸つて来て、二週目の間に、埃及人の相貌が著しく險惡になつて居るに驚いたも無理はない。南さんの話によれば、四年餘の戦争中、坡西土には一二回敵飛行機の襲來を見たきりで、一發の敵弾も飛んでは來なかつた。而して坡西土は静かであつた。それは、英吉利が、三人以上埃及人の集合をゆるさなかつた程強壓を加へたからである。

私共は、色々内輪話を聞いた。さまざま南さん達に厄介をかける日本人の中には、鴉片の密輸入者などもあるさうな。

夜も十時をとく過ぎたので、私共は南さん夫妻に謝し、慶君に送られて、Marina Hotel に歸る。騒動以來、八時には、一切店をしめさすさうで、私共が通つて歸る坡西土の町は、氣味悪く暗かつた。唯有る通りにかかると、黒い人影が、突と寄つて来て、星あかりに

私共をすかし見る。慶君が一言二言いふと、影は意を得たらしく、バツとマッチをすつて、其のみのみ立去つた。密行などいふものであらう。

然し、カイロの夜天が美しかつたやうに、坡西土の夜の空も、美しかつた。山蔭の深い淵などのやうに、青黒い、黒青い、其空には、星が降るやうに光つて居た。

其 十

カンタラの十二時

(一)

三月廿九日。扉を開いて、バルコニーに出ると、地中海から丁度日が出る處だ。港の朝は静かに、海の風がそよそよ面を吹く。土人の Waiter を呼んで、バルコニーで軽い朝食をとる。間もなく、私共を停車場へ送る可く、南さんが馬車で来た。

例によつて、私共は、一對の木偶のやうに納まり、何もかも、南さんがしてくれるままにしてもらふ。一切の世話を終へて歸り行く南さんに、汽車の窓から挨拶すると、やがて汽車は出た。

一時間の後、カンタラ西停車場で、私共は汽車を下りる。

停車場の背、薄い板葺の小屋、砂の上に、てえぶる、椅子を据ゑて、英軍人と埃及人と事務をとつて居る旅券検閲所で、旅券のしらべは済むだが、私共をカンタラ東停車場に運ぶ可き自動車の中へ来ない。板葺、葭壁、砂上に木の腰掛を据ゑた待合所で、長いこと待たされる。窓の下は、堤の路から直ぐ運河。三十間幅位の青い水が満満と溢へて、それに舟橋が架つて居る。軍用自動車や馬匹が、時々

けたたましい響を立てて、往つたり、來たりする。橋の彼方には、英吉利の若い兵士が三四十人も、日やけした顔とは似もつかぬ白い膚を跳らせて、嘻嘻ほちやほちや泳いで居る。

橋の中央部が、向ふからはなれて、臺の船ぐるみ、折れ曲がるやうにして、ずうと此方の岸に寄つて來る。果ては、びつたりとついた。向ふの半分も、同じく折れて、向ふの岸についた。橋は尖せて、青い水路が、さほるものなく開かれて居る。唯見ると、坡西土の方から英國旗を立てた商船が一艘、徐々と過ぎてゆく。波がびたりびたり兩岸に揺れる。泳いで居た連中が、きやつきやつと向ふ岸に上る。船が過ぎて了ふと、橋頭の土人が、三人がかりで Winch を捲く。此岸で捲けば、向ふ岸でも捲く。それにつれて、分れた橋は、また徐々一つに合ふ。待ちかねた自動車などが、直ぐがたがたと渡り出す。向ふ岸の小舎に、黒丸の旗が立つてゐる。何の旗か分からぬ。それは、長崎の史料展覽會で見た、諸藩の長崎衛戍の畫圖に立つて居た黒丸の旗を、私に思ひ出させた。

運河の眺めも變つたので、そこらを歩いて見る。構外の店には、安ものの英文小説を澤山列べて、賣なども賣つて居る。Orange でもあつたら、と思ふたが、無かつた。きらきら日を照りかへす砂、外を歩く者も、蔭に居る者も、そのほてりて、皆酔つたやうに赤い顔をして居る。忽ち鼠が一疋何處からか飛び出した。蔭も、日なたも、總立ちになつて、わあ、わあ、囀す。ちよろ、ちよろと、日なたを走ると、鼠は皆を騒がして置いて、彼方の箱積みの蔭に、隠れて了ふ。

一時間半もたつて、やつと私共の自動車に乗る順番が來た。先の數番は、客満載で往つたが、今度は私共二人きり。つまり、特に心をつけられたわけだ。Civilian と mark した無蓋の大形軍用自動車。橋板をかけてくれたので、私は妻を扶けて、攀ち上つた。人足が私共の荷物を運び込む。Portmanteau, Suitcase, 小形の鞆が三つ、バスケットが二つ、傘袋、四季袋、それに手提の小形の Case、南さんが心入れの Cigar の瓶が三本。トランクをはじめ、大部分は坡西土に預けたが、まだ荷物が多過ぎた。兎角移住気分が支配するからだ。容赦なく頭上から日が照りつける。妻は傘を擴げる。自動車が走り出す。恐ろしい上下動。腰かけた板に居たたまらなくなつて、荷物に腰を下ろしたが、刎ね上り、刎ね上がり、今にも落ちさうでならぬ 繩目にとけた Cigar の瓶が、ごろごろと、それもつぶれさうで、氣が氣でない。

がたがた、と運河の舟橋を、東に渡る。少し往つて、一つの天幕の前で、人も荷物も、下ろされる。再度の旅券檢閲がある。竹の柱を二本立てた小さな天幕。頂から、石油ランプが一つ、吊るしてある。日やけした士官三四人、砂上のでえぶるで事務をとつて居る。戦後間もない今日此頃、わざわざエルサレム入りをする日本人、殊に日本婦人を珍らしがつて、色々懇に氣をつけてくれる。エルサレム知事の S 少將は、つい昨日此處を通つて歸任した事や、Haifa 以北に漫遊の都合は如何でもつく、と云ふやうな話が出る。これは、カイロで、R 少佐が、エルサレム行きは兎に角、ハイファ以北へ行く事は困難かも知

れぬ、と云ふた噂をしたからである。木胴の大形水筒を持つて来た、頭の禿げた士官は、水は如何、とすすめる。他の乗客の皆去つた後で、私共と荷物は、ゆつくり自動車に乗せられた。

砂漠の原の天幕村。道路は相應に固められて、白いペンキに黒と、道しるべや、病院附近の徐行注意、などがしるされて居る。しばらく走つて、東カンタラの停車場に来た。パレスチナ行きの汽車は、午後の五時半と、十一時と、二度出るが、五時半のは三等で、こむと云ふので、私共は夜の十一時に乗るときめる。今は午前の十一時。まる十二時間待たねばならぬ。基督教青年會の休憩所に往つてお待ちなさい、と驛の係が教へてくれる。大部分の荷物を驛に預け、二三の手荷物をのせて、また自動車で少し引かへす。自動車賃16Pを拂ふて下りると、運轉手の埃及人が、手荷物を持つて、私共を y. m. c. a. の天幕に案内してくれた。

(二)

それは將校休憩所であつた。長方形の可なり大きな假舎。扉や窓がいくつも開いて、下は白煉瓦を鋪いてある。正面には“*For God, for king, and for country.*”の額がかかつて居る。ピアノ一臺、デスク、數臺の Sofa、樂椅子などが、兩方の壁つきと、中央とに、程よく並べてある。建物的一半は Refreshment room で、簡易な椅子でえぶるが澤山ならび、突當りが帳場になつて居る。米人である、若いやうな

老けたやうな、小柄なカアキイ服の事務員が居る。食事の相談をする。午餐は出来ぬ。茶も珈琲もない。菓子と Orange、レモン水だけである。私共は其處のてえぶるで、南さんが用意してくれたサンドキツチを食ふて、生温い砂糖なしのレモン水を飲み、更に菓子を食ひ、而して Orange を食ふた。

私共は、兎に角此處に十二時間を過すべく、北側の窓下の樂椅子に身を落ちつけた。屋根下に居ても、屋根越しの砂漠の日の威が、ぐいぐい私共の頭を壓しつける。正午だ。影は無くなる。風はばつたり止む。入口から見やる砂原は、きらきらほつほと、日に喘いで居る。

W. C. に往くとて、向ふの口から出て見る。休憩所の隣室には、寢臺など見え、尙其隣には、床屋さんが髪を刈つて居る。何方も白い人である。W. C. はトタンの塀の背に建てはなされ、タアルで塗つた石油罐のからを尿に宛て、便所は木造で、粗造ながら葭簀の戸がついて居る。少しはなれて、蒸汽機關など備へつけた假舎がある。附近には、夥しい洗濯ものが乾してある。

恐ろしい日の熱に、匆匆 Lounge に歸る。

熱さと、昨日來の疲勞で、私共はぐつたり、何をする氣にもなれぬ。樂椅子に身を投げて、何度も、何度も、時計ばかり出して見る。時計の鍼が蝸牛より遅い。

一時……二時……三時。三時になると、Kbaki の將校連が、續々お茶に来る。皆茹つたやうに眞赤になつて、ほつほと熱い息をついて居る。Cap をぬいて、肩からかけた黒のつるし革をはづし、黒革の帶

をはづして、入口近くの臺にのせると、手巾を出して額から顔を拭き、どつかと椅子に身を投げる。タヲルや石鹼入れを持参したのは、帳場に貼られた“三日間 Bath は休み”の告示を、長い顔して見るのもある。白いボンネットの看護婦や、頭に縋帯した五十左右の將校同伴の、英國旗色の鉢巻した麥稈帽の女なども来る。亞米利加風の縞のスカートを軽快な女連れも来る。而して、あのでえぶるも、此てえぶるも、先刻の若年寄りの事務員がすすむる茶に乳を入れて、さも甘さうに飲むで居る。南さんがくれたシトロン三本もとくに平げて物欲しい私共は、見まいとしても、眼が其方ばかり眺める。然し此等は病院などの特別連中で、入口に貼り出された“今日珈琲、茶、きれいしました”と云ふ張り紙を見た人々は、私共同様生ぬるのレモン水を飲んで、歸つて行く。レモン水がよく出る。レモン液の瓶の栓をぬく音が、ぼんぼんと響く。

士官の一人が、突と立つて、戸口を出た。と見て、一人立ち、二人立ち、忽ち假舎が空になる。何事か。私も出て見る。妻も来る。直ぐ近くの天幕が焼けて居る。眞晝中、朱色の焔をあげて、ぼうぼう燃えて居る。走つて行く者は奔つて行き、立つ者は黙つて見て居る。見る見る火は燃え盡して了ふ。小さな天幕の一軒火事、直ぐ灰になつて、走せ集ふた兵達を勞する迄もなかつた。火が消えると、去る者は去り、餘はてえぶるに歸つて、飲みさしものを飲んで居る。

最初の連中は、多く歸つて往つた。然し、後から後からと、渴いた連中がやつて来る。直ぐ歸るもあり、残つてピアノを弾いたり、持参

の雑誌を読むだり、手紙を書いたり、小聲で話したりする。誰一人、私共に憐ふ者もない。此 Lounge に、何處からか舞ひ込んで、入口近くの樂椅子に、日がな一日くたびれた容をして居る日本人の夫妻を、何と思ふのであらう？来る者も、来る者も、ちらと一日は私共を見る。然し、ちらちら見る眼は一つもない。Officer で皆 Polite なのだ。然し男も女も、英吉利人だけに、氣輕の一言かける者がない。此方も劣らぬ氣重者、如才なく、話しかける氣にもならぬ。四時——五時——永劫のやうに永い時間が、ぢりぢり曳ずられて過ぎる。焦焦した氣分が、次第に私を支配する。

六時頃になると、日も傾き、やがて日は入つたらしく、假舎内も少しは涼しくなつた。靴をぬいで、樂椅子に胡踞かいて居た私は、突と立つて靴をはくと、妻を残して、戸口を出る。

日はもう入つて居る。然し西の空はまだ明るい。入り日のあとが、黄とも朱とも判ち難い美しい色を呈して居て、それが透明な水色から上つて Prussian blue の空になり、天心に上る程其 blue が段々深くなり濃くなつて居る。影は消え、すべてがおつとりと夕の色を被た。涼しい風がそよぐ。賑やかな兵士の休憩所を覗いたりして、今度は道路を横ぎつて、少し向ふの部落をみる。私は天幕の綱に氣をつけつつ静かに歩く。沸つた頭は冷え、焦焦した氣分は静まつて來た。西の空に明星が光つて、天幕の村にも電燈がついた。好。雀色時を、三人、五人、相撃へて兵隊さんが、ぶらぶら歩いて來る。

私は歩をかへして、人足の多く向ふ方へ往つた。其處は私共の Lounge に近く建てられた天幕張りの (Concert Hall) だ。先刻来て見た時、林の景の書割を背にした Stage に、四十近い將校が、唯一人、狂人の如くピアノに腕を揮ふて居た。其壇上には、今黒い背廊の紳士が、演説をして居る。砂上に椅子を列べた Hall は、Khaki の聴衆で一ぱいである。入口に立寄つて、耳を傾ける。“Great men: How and Why did they become great?” と云ふ演題が戸外に貼られてあつたから、多分其講演であらうが、私の耳には、演者の言ふ事がよく聞きとれぬ。

私は Lounge に歸つた、而して私共は、また夕食がはりに、帳場の菓子と、生ぬるのレモン水を取つた。きやらめるの二箱と、マツチなども求めた。若年寄は引込むで、ばつちりした若いのが帳場に出て居る。手荷物持ちの世話を頼むと、直ぐ引受けてくれた。九時に此處を出ればよい、と云ふ。

時計は七時。まだ二時間ある。

私共は軽い椅子を持つて、戸外に出た。美しい星の夜である。あの北斗七星も、あの Sirius も、皆びつくりする程近く、大きく、爛爛と光り晃めいて居る。印度洋で見たより更に鮮やかなのは、砂漠の空氣が乾いて透明なのだ。頭上の大空を中斷して、銀河が流れる。外に今一道、低く殆んど私共の頭上を流るる銀河と見たのは、それは勝つて兜の緒をしむる英吉利軍が休戦の今も怠らず非常を警むる。探照燈の蒼白い光であつた。此夥しい夜天の星の下に、何千或は何

萬の天幕が砂漠の村をなして、幾萬の猓族はそれを家として、まだ遠征のままで居る。私は椅子を起つて、北を望む。坡西土から地中海をかけて、茫とした光の烟が地平線をぼかして居る。其處にも、數知れぬ天幕と人とが夜を警めて居るのだ。私は茫となつた。此は果して歴史の二十世紀、曠古の大戦を終へたばかりの英吉利軍勢の天幕であらうか？ 埃及を脱け出したイスラエル民族が張つて居る天幕ではあるまいか？ あの探照燈の光が、執念く私に火の柱を想はせ思はせしてならぬ。

私共は疲れ果てた。殊に私は、立つても、かけても、居られぬ程に疲れた。身の置き所がなくなつた私は、いきなり砂の上に仰向きになつた。

冷やり、軟らかな砂が私を接取る。

妻は驚いて立ち上つたが、私が安心さす言葉に心落ち居て、蹲むだり、起つたり、椅子にかけたりして、黙つて居る。

黒い影が二つ三つ寄つて來た。それは英吉利兵士の輩であつた。私が倒れて居るを懸念げに寄つて來たが、妻が椅子にかけて看護るのを見て、安堵したらしく、足音靜かに過ぎて往つた。

倒れた砂の上は、全く好い氣もちである。

“こうして死ぬのだ!”と思ふ。

日は私の父である。母は即ち大地である。砂の上に倒れた私は、母の膝に枕したのだ。妻は黙つて椅子に居る。私は黙つて砂に仰臥す。星の天蓋が上にある。砂の床が下にある。砂原の何處かで、小

きな虫の音がする。遠くから人の子の hum が傳はる。

私はひとりごつ。

“天には星、地には人の星。”

(三)

夜の涼しさと、大地の慰ひで、やや元氣を復した私共は、永い一日を熱い日から庇ふてくれた y. m. c. a. に禮言ふて、九時に Lounge を出た。事務員の世話で、土人が二人私共の手荷物を持つて來る。亞米利加から新來と云ふ青年會の人と共に、私共は停車場に往つた。

最初來た時顔を見せた鐵道係の埃及人が、私共を一等車内に導いた。色々日本の事を問ひ、軍艦も日本で出來ると聞いて、驚いて居た。十時になると、彼は私を出札所に連れて往つた。出札所の外には、英吉利士官が三人立つて居る。一人が切符を受取つて去ると、私は突と札口に寄つた。すると、四十餘と覺しい士官の、“Complain” と云ふ語の實例と云つたやうな鼻聲が私を制した。他の士官を指し、次に自ら指し、“一人——二人——まだ二人居るではありませんか？”
ひとり ふたり
言下に私は引き下つた。“然です。失禮。順番を待つのでした。”
たふん
“さうです、さうです、あなたの順番を”と士官は心解けた調子で言つた。やがて順番が來たので、私は窓に寄つて、私共二人のエルサレムまでの一等賃金及び荷物運賃として、595P 拂つた。六十圓未滿である。而して切符にある R 號の車室に往つた。

それは寢臺車の二人詰であつた。寢臺車には相違ないが、軍用に相違ない程堅固な Bullet Proof と云ふてもよい汽車で、電燈のかわりに瓦斯が一つ青くともつて居る。此處の線路は、戰爭中獨逸人がかけた狭軌なのを、英軍が廣軌にあらためて使つて居るのであつた。

先刻の埃及下士が、人足を指揮して、預けて置いた私共の手荷物を運ばせた。Portmanteau も積まれたさうだ。何かの世話に對して、彼にも人足にも心ばかりの謝禮をする。しばらくすると、彼は一瓶の飲料水を私共に持つて來てくれた。瓶をとれば、冷やり、つめたい水。こんな所で、こんな水は、うれしい贈り物である。喜び、喜ばれて、手と分つ。程なく、今度は、人足が水筒に一ばい又水を持つて來てくれた。多々ますます好い。

私共は、二人になつた。

忽ち一陣の風窓から吹き入つて、ふつと瓦斯の灯を吹消した。私共は直ぐ小田原提灯を出して、つけた。戦後のパレスチナ、此様なものの入用があるかも知れぬと、出發前特に注文して、銅蓋銅底の小形の小田原提灯を造らして來たのである。懐中電燈が便利だが、電池が直ぐ利かなくなつたり、補充が困難な場合もある。舊式だが、提灯は却て便利だ。得意になつて、羽目の釘にかけると、傾く拍子に、ぱつと提灯小火が出た。遠てて吹き消す。またつけて見れば、肩の所が大分燒けて、ぶらりとなつて居るが、全く用をなさぬ程でもなかつた。

提灯消して瓦斯をつけ、埃及人等の贈物の水を飲み、少しの水で手拭を濡して、私は裸になつて汗みづくになつた體を拭い。

寝仕度をして、瓦斯を消す。あとが、わるく臭ふ。ゾラ夫妻の二の舞をしては、ならぬ。また瓦斯をつけた。而して空氣枕を頭にかひ絨の膝かけに足を掩ひ、私は下、妻は上の寢臺に、足踏み伸ばして横せるになる。

午後十一時、汽車はカンタラを出た。

いよいよ Exodus だ。

星の空。白い砂漠。

汽車は、パレスチナへ。私共は、直ぐ夢の國に。

不圖耳近い人聲に眼をさます。それは妻が上の床から呼んで居るのであつた。“寒いから、窓をしめて頂戴。かたくて、わたくしにしまらないわ。”

私は起きて窓をしめた。時計を見ると、二時。外は星が降るやう。汽車は、白い黒い何處かを轟轟と奔つて居る。

私共は、また深い眠に落ちた。

第四篇

昔昔のふるさと Palestina

第四篇 昔昔のふるさと

第一 エルサレムへ

(一)

大正八年三月三十日。眼が開くと、夜が明けて居る。私はやをら起きて、車室を出て、通路の窓をあけた。今しも日が丘の上のあたりに出た處。昨夜十一時に、埃及の運河地帯の沙漠のカタラ東を出た汽車は、今低い丘陵の起伏する緑の野を駛つて居る。何處だか知らぬが、多分昔のユダヤの西南、海近い邊であらう、と思はれる。

私共は、昨夜の残りの水で嗽き、顔を洗ひ、上の Bed をつるし上げ、身のまわりを片づけて、外を眺める。

大小麥の穂に出た畑がある。小さな村がある。線路に傍ふて英官利兵や埃及兵、印度兵などの天幕がある。燃ゆるやうな虞美人草や、さまざまの野花が、所縁はず朝露にそぼつて咲き亂れて居る。羊や牛が、それを顧着なく踏みしだいて、のんきに草を食ふて居る。それを

妻は可惜顔に眺める。

やがて菓樹園が現はれる。深緑の柑橘に大きな黄金果のまだ累累と生つて居るのが、私共を驚喜せしめる。無花果や橄欖、桃や杏の木も多い。果實季が思はれる。

六時半過ぐる頃汽車は濁した處に停まつた。乗換驛の Ludd である。私共の乗つた汽車は、海に沿ふて北へ Haifa に直行するので、東の山地のエルサレムに行くには此處で乗り換へねばならぬ。

(二)

土人の Porter を呼んで荷物をとらせ、私共は汽車を下り、歩廊もない彼方の線路に待つて居るエルサレム行きの汽車に乗る。恐ろしく高い踏段を、やつと車室に攀ぢ上つた。大分乗つて居る。此汽車は終點驛の Jaffa 港から來て、埃及ハイファ間の汽車を待ち合はせ、而してエルサレムに行くのである。Ludd は即ち Lydda で、十三年前、私もヤツファから、其頃は佛蘭西人の經營であつた狭軌の汽車で、此處を通つたのだが、あまり容子が變つたので、全く見忘れて了ふた。

高加索カフカスから來た樂師と名のる中年の紳士と、其連れが二人、ヤツファの官吏と云ふ土人が一人、それから腕に赤十字章をつけたカアキイの丈高い青年が紐育者で、伴つれのより矮くより若いカアキイが Smyrna 生れの希臘人。席がないので、件の Smyrna は、樂器でも入

つて居るらしい樂師の柳かばんに、無遠慮に腰をかけては、樂師の眉を擧めさす。

不圖窓から見ると、カアキイの兵隊さんたちが、Orange を兩手に抱へて彼方からやつて来る。先刻見た菜樹園と云ひ、近くに Orange の店があるに違ひない。私は汽車を下りた。人立ちの方へ往つて見た。構外の廣場の木蔭に、土人の男や女がさまざまの Orange を小山と積んで賣つて居る。寶の山に入る心地で、私はしばらく其處に立ちすくんだが、到頭黒いゼエルをかけた土人の女から大きなオレンジ八個を買ふ。坡西土で南さんの馳走になつたあの亞米利加式オレンジである。八個を 2P は、一個二錢五厘に値る。それを手巾に包み、残りを兩のポケットに入れ、勇んで歸る。樂師も買ひに下りて来る。

十三年前、私がパレスチナに来た時は、ヤツファ附近に蜜柑の若木を多少見た位であつたが、十餘年の間に、柑橘栽培も盛になつて、今は埃及邊にまで賣り込んで居るのだ。早速むいて、味はう。中々好い。California のそれに劣らない。東京なれば、一個四五十錢はする。産地で戦後の運輸不便故とは云へ、一個二錢五厘は全く勿體ないやうである。ヤツファの官吏に、一つすすめたが、辭して取らなかつた。青年は、紐育も Smyrna も喜んで早速食べて居た。其お禮かの如く、紐育は、私共に支那人か日本人かと問ふた。支那人かと問はれて、私は少しも腹は立たなかつた。私の好きなは、支那料理ばかりでない。私は支那人が好きだ。鏡で見る私の顔それ自身が、可

なり間かのびて、鼻負目に云ふて大陸的な趣が、氣の利いた日本人より、支那人に近い事を知つて居るだけ、腹は立たなかつた。然し、私は、事實によつて、日本人と答へた。紐育は、もう可なり久しく此方に來て居るさうで、エルサレムのホテルなど、私の間に應じて、細かに教へてくれた。

汽車は、八時に Ludd を出る。

大麥は悉皆、小麥も幾分穂に出でて、それらを以て掩はれた大小の丘が、うねうねとゆるやかに浪うち、野芥子や、さまざまの野花は草を彩どり、冷やり朝風そよぐたびに、何とも云はれぬ佳い香が、窓から訪づれて来る。妻は細い眼をいよいよ細くして、それにうつとりとなつて居る。Palestina の朝の野の香については、西洋人の書いたものを讀んだ事があつたが、全く此様な野の香は、十三年來武蔵野に住む私共も、絶えて知らぬ處である。

此前の行に、一籃の桑實を私が買ふた Ramleh の停車場に來た。時季が早いので、今はそれを賣る子供もない。

ラムレエから、汽車は追々岩石の谷に分け入り、少しづつ上つて行く。骨あらはな岩の山を、灰緑の橄欖樹と、色美しいくさぐさの花が彩どる。鈴葵の花なども見えた。

谷間の小驛に一度とまつただけで、羊腸の谷をめぐり、上り上つて、パノラマの展望臺の様に汽車が開窓の處に出ると、其處は最早エルサレム城外の停車場であつた。午前十一時。

(三)

此前の順義行に、私はエルサレム逗留の十日餘を、英吉利人 Hensman さん夫妻の經營する Olivet House と云ふ下宿の世話になつた。今度も世話にならうつもりで、カイロから手紙を出したが、返事が到頭來なかつた。電報は、當分不通であつた。

エルサレム停車場の税關で、土耳其帽の官吏に聞けば、Olivet House は閉ぢたさうな。私は失望した。Olivet House がなければ、ホテルに行く外はない。カイロのR少佐は Fast's Hotel をすすめた。坡西土の熊大主計は、Jerusalem Hotel に泊つたさうだ。然し、Fast's Hotel は軍人向きさうで、熊さんのホテルは、位置がよくないやうだ。先刻汽車で紐育の青年が教へてくれた Grand New Hotel に行くことにする。

私共と荷物を満載した馬車は、停車場を後に、午の日に白光りする大道を下り、エルサレム城壁について上る。これが西の城壁だ、シオンだ、行手に高いのがダビデの塔だ、と私は珍らしさうに見廻はす妻に教へつつ行く。此あたりは、十三年前とまして異らぬ。やがて馬車は、坂を上り、ヤツファ門を入つて、直ぐ北手の一Blockの店と店との間に入り、左に轉じて、通りぬけになつて居る二階下の、薄暗い鋪石の上に駐まつた。

階段を上ると、Grand New Hotel の帳場がある。

赤帽の爺さんが、私共の先に立つて案内する。帳場前から階段を

上つて、長方形の大廣間がある。紅の絨氈敷きつめ、Sofa や椅子チエブルなど、あの隈、此隅と、程よく置きならべ、壁に油繪、天井から飾りの Chandelier が下がって居る。廣間を殆んど突當りから左に折れて、東側の二番目の室に導かれる。小さな悪くない室だが、隣の一番目 No 83 がより潤いので、後で帳場に云ふて、其處に移る。扉を入れれば、左右の隅に白蚊帳垂れた寢臺が各一つ。南の壁つきに箆筒。それから洗面臺。文卓が一つ。軽い椅子が二つ。北の隅には、火の氣のない暖爐が一つ置いてある。カイロのホテルのそれよりずつと狭いが、ぼるねお丸の船房より大分廣い。東に向ふ兩開きの扉が二つ。小さなバルコニーがついて居る。地上からは三階。ホテルでは二階。直ぐ下は、狭いぬけ巷路。飛び渡れさうな向ふは、人家の平屋根。それから向ふは、次第低の屋根になる。北手に、眼八分に見る大小二つの Dome が、所謂耶蘇の十字架跡墓跡に建てられた Church of Holy Sepulchre。すぐ下方に、四角な尖塔の白く秀でて居るのが、獨逸會堂。東正面に、低く燻んで敵下ろされるのが、昔のソロモンの神殿跡に建てられた Mosque of Omar。それ等を見越して、眞正面が橄欖山。露西亞信心の紀念の Belvedere 塔は、昔ながらに高い。橄欖山の南邊かに、死海向ふの山山が指さされる。

第二 エルサレム

其 一 屋上日記

(一)

つい先日、カイロで、埃及の新統監として着任した自動車上の彼を私共が見た Allenby 将軍が、若干の獨逸兵と、多数の土耳其軍とを、南方から次第に追ひ捲つて、此エルサレムに入城したのは、1917年の十二月十一日であつた。それから一年四ヶ月、エルサレムは英吉利が支配して居る。敵味方共エルサレムに敬意を拂ふて、城内では戦争しなかつたので、建物などは一尙損じて居ない。但、獨、土軍がエルサレムを明け渡す前に、發電所を悉皆破壊したので、エルサレムには電燈なく、夜は瓦斯や、石油ランプで、ほの闇く照らされて居る。私共が着いた夜、部屋の電燈の Switch を捻つても捻つてもつかぬので、給仕を呼んだら、赤帽の斑ら髪、六十近い彼は苦笑して、それは駄目です、土耳其人が毀してしまつたのですから、と云ふて、寢臺側の Stand にのせてある燭臺をつけてくれた。

* * *

ちよつと見には十三年前も異らぬやうなエルサレム。何を云ふても、あの大战の後である。すべてに異つた事があらう。私共は Palestina に來た。エルサレムに來た。皆がエルサイユに急ぐ時、私共は飛びはなれて此處に來た。最初、誰が驛やき、誰がきめ、誰が驅つて、私共は必此エルサレムに來たの乎？唯一歩づつしか示されぬ私共は、もとよりはじめから Programme などはない。然し、Palestina が私共の世界一周の山であるべきだけは、分つて居た。そこで、私共は來た。私共は來た。而して、これから、如何するのであらう？私共は知らぬ。然し、兎に角船は港に入つた。私共は錨を投じやう。而して、日又日と、見せらるるものを見やう。而して、させられる事をしやう。私の叙述はまた日誌の體をとる。それは重なり重なつた花瓣の一片づつ開くやうに、すべてが日を逐ふて鮮やかな形を成して往くのであるから。

* * *

大正八年三月三十日。日曜。正午私は十三年ぶり、妻は初めて、エルサレムに着いた。土人經營の Grand New Hotel は、随分大きな、而して Home like なホテルである。客は未だ少ない。食堂は二階にある。五色の硝子窓下の二人卓で、午餐には歓迎かのやうに Curry Rice が甘かつた。厚い煎餅のやうな Syria 式パンも、うまかつた。其前、着くと直ぐ入浴。薪で燃す獨逸製の輕便風呂。連つたねちを捻つて、頭から冷水の夕立を浴びる。

午眠。

赤帽に云ふて、折たたみ式の脇かけ椅子二脚を借りる。赤帽は土耳其帽だ。土耳其帽は、土耳其人も、埃及人も、ある亞刺比亞人も、あるシリア人も、かぶる。土耳其の史丹から橋の下の芥拾ひまで、白髪のお爺さんから五つ六つの子供まで、皆かぶる。回教徒が重にかぶるが、耶蘇信者のある者もかぶる。鍔なし上細りのバケツ形、頂邊に黒い縷をつけて、色は茜に近いものもあるが、大抵は眞赤だ。土耳其帽では長いから、これから赤帽と書く。

夕食に私共は、ぼるねお以来の日本服で食堂に下りる。埃及でも、室では着たが、食堂には洋服で出た。一変、和服に、私は絨のトンビ、妻は道行きで、夜エズベキヤ公園に往つたら、誰やら Curious と私共の風態を背から評する聲が聞こえた。エルサレムは、どうせ長逗留になるから、私共も、其つもりで、本來の着物で食堂に現はれたのである。必しも日本を標榜するではない。また、せぬでもない。要するに、着心地好いものを着る。

* * *

三月卅一日。橄欖山から日が出て、窓の外に夥しい燕が、蚊などのやうに飛び交ふ。寒暖計は六十四度。海拔約二千五百呎だけに、山の上の空気が爽やかに體を引きしめる。朝食後、私共は共に夏服で、ヤツファ門を出て、北に街を上つて、郵便局に行く。英吉利の監督で、局員は土人を使ふて居る。私共に宛てた郵便物は、一もなかつた。私共の郵便物は、すべて Olivet House 宛にしてあつた。

其 Olivet House は閉ぢたさうな。然し家はあるであらう。それは城の西北、傾斜の上の静かな屋敷町にあつて、Olivet House の名にしおふ橄欖山を一目に見晴らす處だつた。何でも此郵便局から遠くはない筈。私共は其方へ往つて見る。それらしい通りには直ぐ出たが、何を云ふにも過ぎ去つた十三年、庭樹がふとつたり、新しい家が出来たり、戦後と云ひ、人も變れば物も變つて、それらしい家を見ても、いよいよそれとは定めかねる。もとの Olivet House Olivet House と二三度人に尋ねる。パレスチナで一番通るは佛蘭西語。次が獨逸語。英語はあまり通用せぬ。其不自由な英語で尋ね廻るので、要領を得ぬも尤だ。然し到頭見つけた。それはやはり最初此と思ふた路傍の長い家で、いくつにも割られ、ホテル見た様なものになつて居る。玄關を覗いたままで歸る。出て來た女達を佛蘭西人かと思ふたら、後で聞けば猶太人であつた。

私共が淋しい其巷路を歸りかけると、喧嘩がある。一方は拔劍を提げた赤帽のアラブの若者。一方は斑白の猶太人、帽子も冠らず、シャツに黒胴衣、白い前かけをして、スリツバアをはいて居る。私は一喝、間に突と入つて、老人を背に押隔てた。見れば破落戸の片手に狎見たやうな白い小犬の綱を引張つて居る。犬についての諍らしい。犬は確に老人のだ。老人の顔を見上げ見上げて、いやいや引張られて行く。破落戸はもどかしがつて、それを引抱へて行かうとする。老人はまた追ひすが。而して赤帽の手にわなわなふるへて居る犬の頭を撫でる。私の日本語も英語もアラブと猶太の諍をさばくに

向用をなさぬ。丁度其處に埃及人らしい若い巡査がやつて来た。私は彼に注意し、居合はした十二三の白い男の子が、破落戸を指さして、巡査に二言三言云ふ。巡査はアラブを呼び返へしたが、抜身の劍に敬意を拂つてか、犬を取り上げずに去らして了ふた。アラブは土色粗毛の長外套を翻へして、大勝に歩み去つた。まだ諦めかねた老人が、スリツメアをひきずりひきずり、後から跟いて行く。

* * *

耶穌が再び生れ出て、三十三で打切られた前生の後をつづけるとすれば、彼は神、人となつた生涯の後に、人、神となる生涯をつづけて、ここに人天交合、靈肉一致、全い生の環を成さねばならぬ。彼は必らず結婚する。耶穌は妻として誰を擇むであらう乎。四福音書に若い女が數人出て居るが、著しいのはベタニヤのマルタ、マリア姉妹と、マグダラのマリアである。皆耶穌を愛した。耶穌も彼等を愛した。妻を擇むとして、耶穌は誰を擇むであらう乎。マグダラのマリアは昔から最負女優で、文藝美術は彼女を取り立ててそやして居る。泥からぬけ出た白蓮、對照が著しく、色彩が鮮明で、殊に喜ばれるのだ。彼女は後れ馳せの焦躁を加味した復讐のやうな愛を以て耶穌を愛したに違ひない、パウロが耶穌を無するまでに耶穌をかついだやうに。耶穌も勿論彼女を愛した、憐憫の添ふた愛を以て。然し三生を契る妻とし擇む場合に、耶穌は彼女よりも誰よりも、彼はベタニヤの妹娘マリアを擇んだに違ひない。あのうぶな、純な素直な女マリアこそ耶穌の妻になるべき女だ。マグダラのマリアが持て

る世の中は、英雄崇拜時代、奴隸時代、一人の神を造る時代、非常本位の時代の事である。そんな時代を繰りかへす爲に耶穌再臨の要はない。耶穌に再臨の要があるなら、前生の裏を返へすそれでなければならぬ。平和に始まつて十字架に終つた前生は、十字架に始まつて平和に成る後生で繼がれねばならぬ。耶穌の前生は大工であつた。今生は大工でも大工でなくても何でもよい。唯平凡な人として、Democratic な時代相應に生れ、而して純眞の Democrat として、平凡な生涯を送らねばならぬ。その女房として擇む場合に、平凡耶穌の夫人として一番似つかはしいのは、ベタニヤの平凡マリアでなければならぬ。平和はあまりに侮蔑された。善良はあまりに侮蔑された。平凡平常はあまりに侮蔑された。今は十字架が顛倒する時代だ。價値の天地大返へしの時代だ。耶穌の母マリアは、父ヨセフと永く眠るがよい。マグダラのマリアは、他に恰好の相手であらう。ベタニヤのマルタは永久に好い小母さんである。耶穌の側には、ベタニヤのマリアが永劫に座はらねばならぬ。

私はベタニヤの記事を私の妻に讀る。

* * * * *

四月、日。窓外の雀の聲が賑はふ。冷いやりと櫻時のやうな匂はしい粕谷の朝心地が身をつつむ。と、部屋中が遽にぼつと明るくなつた。今し檜隈山に爛爛と朝日が上つたのである。ああ、何といふ生命のあふるる美しい光りであらう！好いお天気とわたくしは

よることだ。けふはベタニヤにゆくつもりでわたくし達は、いそいそと午前九時二頭挽きの馬車で出かけた。

ヤツファ門を出て右へ右へと折れ、古城壁を右に見上げつつ長い坂を下つて、ダマスコ門外をまっすぐに東に向ふて下る。路の左に今しも黒襦子の衣を頭からすぼり着て、可愛い白服の子供の手を引いたアラブ女が上つてゆく低い丘がある。ゴルドン將軍がいふカルヅリは、彼處だよ、と夫が指さす。丘上には澤山の犬が遊んで居ると思つたら、眞黒や白の羊が草をあさつて居るのであつた。

道は南に迂廻してケデロンの谷へ下る。右はソロモンの神殿あとの Mosque of Omar が、谷を隔てて橄欖山と相對する。山頂には、南に露西亞の Belvedere 塔、北の端に獨逸の昇天塔（今は英軍の大本營）が聳え、山腹には金色きらめく露西亞のお寺や橄欖の茂みが見ゆる。其下に塀をめぐらした木立の一區、あれが所謂ゲツセマネの園、と夫が教へる。橋を橄欖山麓に渡る。ふりかへると、エルサレムの東の城壁に、世の終りの日に平和の君が來て此門を開くといふ金門が今猶閉ざされたままに見ゆる。眩しい程のからりとした白い道。所謂ゲツセマネの塀外を南へ馳せて次第に上る。世界にはびこるユダヤ人も、死しては故郷の土に其骨を埋むることを願ふ心から、澤山の白い墓石が、歸り來て貴い故山に抱きついて眠つて居る。谷を見下ろす斜面に入念の石の塔が見ゆるのは、アブサロムの墓さうな。父ダビデには謀叛の子でも、人望があつただけ今に無事に残つては居る。

馬車の上に頭を回らして、わたくしはエルサレムを眺める。山に圍まれ谷をめぐらした山の上の城は美しい。白い建物が碧空にくつきりと浮び出て、五月の空に白木蓮の花を見上るやう。

路は橄欖山腹をうねうねと南東へめぐりゆく。エリコの方へ流るる谷を隔つる南の山山は、山畑や麥縁にもえて波のやうに起伏し、牛や羊がのそりのそり遊んで居る。岩の狭間、白い路を縁どる草のなかにも、燃ゆるやうな緋の虞美人草が薄紫の草薺や白や黄の野菊、色さまざまの薊といりみだれて星のやうに笑みこぼれて居る。牧童が花を床に足さしのべて、春の空氣に浸つて居る。武者繪のやうなアラブが、驢馬をコトコト走らして來たりする。

“これだ、これだ。おれは此空氣を吸はないと萎びてしまふ!”
と夫はよろこぶ。

ああ此道よ！イエスは此人生のやうにうねりうねりした、近くて遠いやうなベタニヤから、エルサレムの間の此の道を、さまざまの心を抱いて幾十たび往復された事であらう？一石一草も人よりも濃く思ひを潜むる。斯うして二人してベタニヤ行をする事が、新郎と里歸りをするやうな心持ちをわたくしにさせる。ほこらしいやうな、なつかしいやうな情緒が、綿綿と身を包む。夢のやうに軽やかに、馬車はからからからからと滑りゆく。

馬車がとまつた。山腹にとりついて、土造の小さな家が、まばらに見ゆる村はづれ。ベタニヤである。

わたくし達が馬車から下りると、隣近處のむすこむすめがかけ

て来た。男の子は二人共 David といふさうな。“マリアさんの宅は此方にゆくね?”と夫が話しかけると、“私が御案内します”,と大きい方のダビデ、十四五のむすこが英語で答へる。小さいマルタさんマリアさんが、赤ん坊を負つたり、手を引いたりして、ぞろぞろと附いて来る。そして早速のおみやげねだり! バクシイシと小さい手が右から左から出る。夫は“みんな来い、来い”とよびながら、狭い坂道をのぼる。少しのぼつて、左の崖に横穴がある。戸があつて、黒い服着た十六七の娘が番をして居た。所謂ラザロの墓である。

手に手に太短の蠟燭を持って、岩を刻むだ暗い狭い段段を下りると、やや穴が廣くなつて居る。其處から横へ三段下つてラザロの墓になるといふ。わたくし達は這入らず、小ダビデが段に下り立つて居た。

墓の丁度上にあたる、夫が立つて居る横の岩壁に、小さい孔がある。大きい方のダビデは、此孔を指さし、イエスがここから“ラザロよ! 出でよ!”と呼ばれたのです、と口吻をまねるかのやうに、抑揚つけていふのであつた。夫が出しぬけに、

“ラザロ! 出て来い! ラザロ! 出て来い!”

と日本語で笑顔しながら小ダビデに聲をかけた。初め一同一寸あつけにとられたが、すぐ解つたと見え、一同の顔に笑が溢れた。小ダビデもにこにこ上つて来た。

墓守娘に五Pやつて、わたくし達はどやどやと此處を出た。なほ少し坂をのぼる。そして左に折れ 山腹の屋敷あととでもいひさ

うな草地を幾つか通つて、可なり大きな門に来た。僂儂の男が番をして居る。錠をあけてもらつてはいると、門内は一面の草地。奥の一段低くなつたところに、彫刻した白い石灰石のアアチの残部が立つて居る。これはマルタマリアの屋敷を記念して昔建つて居た寺の遺物ださうな。其奥に二つに割つた四角な家跡らしいのがある。後がラザロで、前が姉妹の部屋であつた、とダビデはいふ。あまりに狭いと思はるけれど、昔の事ではあり、場所も此あたりではあつたらうし、又家とでもさう大きくはなかつたにちがひない、など思ふ。柘榴が部屋跡といふに二本、濃緑の間に朱の蕾がほころびやうとして居る。紅白黄紫の草花が美しい。わたくしは緋の雛芥子をとつて、手帳にはさんだ。すると娘たちは思ひ思ひの花を摘んで来て、わたくしの胸にさせといふ。こんどは帽子に、次は仕方なく手にもたされた。わたくしは全くの花嫁さまになつてしまつた。

十三年前、夫の順禮行の留守に、わたくしは東京麻布の英印女學校に寄宿して、船の寄る港港、行く先先から書き送る夫のたよりばかりを樂に、淋しさもつらさも忍んで一學生として十二三のお下げの嬢ちゃん達と同じ教場に英語を學んで居た。ある日エルサレムから夫の手紙が届いた。細々と書いたたよりの其中に、白い洋紙に包んだものが入つて居た。開けば、ばつと佳い香が立つて、四十幾日、八千裡を渡つて来たとは覺えず、昨日今日摘むだばかりと思ふ緋の色眼がましい虞美人草の二輪が入つて居た。其包紙には、“マルタよりもマリアよりも誰よりもいとほしの妻に”と書いてあつた。

“伴ひ行くべかりし妻に”と題して贈られた“順禮紀行”の、あとで思へばその魂ときへわたくしには思はれた。わたくしはそれを聖書にはさむで置いた。間もなく夫は歸つて來た。而して順禮紀行が未だ書かれない内に、一夜盜が入つて、マリアの花を聖書ごと持ち去つた。他の盜品は歸つたが、聖書と花とは到頭歸つて來なかつた。わたくしは哀しみ惜んだ。それから十三年を経て、わたくしは夫に伴はれて今正にマリアマルタの家の跡に來て、自ら其花を摘んだのである。

わたくしは、この娘達の顔をじいに見入つた。よごれてこそ居れ、皆可愛いマルタマリアの顔立ちをして居る。何の罪もない。わたくしは日本語で“もうバクシイシなんかおよし。好い子におなりよ”と頭を撫でてやつた。もとより言葉はわかりやうはないが、何かしら好い気持ちは感じたらしい。古い建物の壁の一部が高い處に見ゆる。聖書に所謂癩病シモンの家跡だなど云ふ。わたくしは露西亞の一畫家が描いた耶蘇とマルタマリアの繪を思ひ出す。日本の女は自分を初めとし兎角マルタになりたがる。それが一番やすい仕方だ。而してマルタを以て正によしとさへして居る。夫婦の間にすらもさうである。然し耶蘇はマルタを擇ばず、マリアを擇んだ。とはいへ、わたくしは思ふ。マルタが居てこそ、マリアもああして居れたのだ。これからの女は、マルタでもいけぬ。また單にマリアでもいけぬ。マリアにマルタを兼ねた女でなければならぬ。それが兼ねられねば、兼ねられるやうな生活の仕組にせねばならぬ。

こんな事など思ひつつ、馬車の方へ又ぞろぞろと立ちかへつた。夫は僣倖に10Pやつた。

子供達がバクシイシの手を出す。夫は“二人にだよ”といつて10Pを大きいダビに渡すと、彼は、案内したのは自分で小ダビはさうでない、といつて獨り占めにしてしまつた。夫の墓口にはもう小錢がなかつた。たつた一枚残る5Pを“みんなにあげるのだよ”といつて腕をみんなの頭の上にはして、小ダビの手にのせた。さあ娘達が承知せぬ。一人の娘は馬車臺にとびのつてまで追つかけたりした。氣の毒な娘等よ、マリアになつておくれ！とわたくしは念じつつ歸つた。

ほんとうに、お菓子をもつてくれればよかつたのに！

あ い

(二)

四月一日。今朝出かけに、R少佐の紹介狀を封入して、エルサレム知事 Storrs 少將に面會の日時を聞き合はして置いた。ベタニヤから歸るとやがて返書が來て、正午に來てくれとある。急ぎ仕度して、馬車を城北ダマスコ門外の知事官廳に乗りつけた時は、十二時を三十分過ぎて居た。官廳はもと獨逸の加特力 Hospice で、石造の宏莊な建物である。

玄關の階段を上つて、向つて右の知事室と札うつた其前で玄關

番の埃兵士と分かれぬ問答をして居ると、階段の下から“Mr Tokutomi?”と快活な聲が聞こえて、三四人がたがた上つて来た中から、丈高い中年のカアキイが、つかつかと寄つて、手をのべた。Storrs 知事であつた。

潤い其室で、私共は軽い話をする。

エルサレムの現人口は約八萬。其三萬は猶太人である。昔は土耳其人が猶太人を憎むだが、今は亞刺比亞人が憎むこと甚しく、よくこうします、と少將は咽喉を切る手眞似をして見せる。私は昨日の目撃談をした。

Zionist Scheme の前に、一番困難なのは、回教である。土耳其が去つても、亞刺比亞人が Mosque of Omar に頑張つて居る間は、容易に猶太人の Palestina には成り得ないであらう。

アラブを disarm する事は出来まいか。然しそれは無理だ。自ら武器を持つて居て、他にそれを捨てます事は出来ない。それに英吉利が土耳其獨逸の軍を Palestina から一掃するには、亞刺伯の助力をしつかり借りて居る。今更勝手な事をされる義理ではないのだ。何れにしても、頑強な猶太人と、兇猛な亞刺伯と、輕薄なシリア土人と、英吉利軍、印度兵、埃及兵、それ等がごちやごちやと一つに寄つて居るエルサレム及其附近を治める知事の骨折が思はれる。明るく如才ない顔のSさんは、日本のたよりが皆好いたよりで、一つも心配する事はないと私共を悦ばせ、要があつたら遠慮なく私にお出なさい、と碎けたものだ。公邊の事にかけては、“私は公僕で、倫敦の

指圖次第に何も行動するのですから、個人としての意見もありません”と用意周到である。

* * *

午後ホテルの自室で日本茶をいれる。昨夏北陸の金澤で買った菊盛上げ摸様の玩具の様に可愛い臙銀瓶と、外が虹龜模様の、内に鶯曲鶴龜の一節を染めつけた一對の九谷の湯呑と、自爾の茶一鐘は、私共が大切な手廻はりの一つである。印度洋を越して茶の風味は少し劣つて覺えたが、それでも家園を距る八千哩のエルサレムにして斯く夫妻相對してわが國の茶を味はうなんか、ありがたい事だ。持參の朝鮮飴も甘かつた。

昨夕は妻の腹工合がよくなかつたので、これも昨夏越後の赤倉みやげの葛で葛湯を作つた。

* * *

よく食堂で見かける肥大漢がある。老婦人と中年の婦人が一緒である。私のを二つも合はせた様な腹を突き出し、顔を奇麗に剃つて居るのは、米國人かと思ふたら、自づから名のる所によれば、もと露西亞生れで、二十何年も英吉利に居たと云ふ。名はFeingold。“The Truth”と云ふ宗教雑誌の記者である。希臘正教會に屬して居るといふ。Russian Jew であらう。

夕食後私共が二階の廣間でくつろいで居ると、Fさんは初老の赤帽紳士を連れて来て、私共に紹介した。名はAyub。土耳其人だが、十字軍士の裔で、基督者と云ふ。英吉利最負の故で、戦争中土

耳其官憲に拘禁され、それから追放され、歸つたばかりださうだ。氣の毒にひどく疲れて居る。Aさんは、Olivet House の Hensman さんを識つて居た。英吉利最負の土耳其人すら拘禁される位だから、正銘の英吉利人なるHさんは、勿論土耳其政府の爲に禁錮され、土耳其軍の敗退につれ、此處から其處と移されて居たが、休戦になつたので、先頃放免されて、今現に此處の赤十字病院に居る、のであつた。

Fさんは正教會員で、Aさんも基督者である。Fさんは私共の信仰を問ふた。向ふの Sofa には、妻を中にして、いつもFさんと食卓を同じうする彼老婦人と中年増がかけて居る。老婦人の方はもう十九年からエルサレムに居るさうだ。共に兵士の爲に働いて居る。

私は例の“十字架の時代は過ぎた”を持ち出した。基督の再臨は已にあつた。大戦其ものが已に審判であつた。これからは新天新地だ。Symbol の必要があるなら、それは十字架でなくて、大陽であらねばならぬ。

Fさんは言ふ。基督の再臨は近い。然し未だである。基督再臨の時は、橄欖山に現はれる。

Aさんは、基督の十字架がなければ私共は救はれぬ、と云ふ常套語をくり返へす。

私は段段熱して來た。まつい英語が可なり雄辯になつて、熱心に述べた。基督は二千年前に、“われすでに世に勝てり”と宣した。惡の崇拜、惡魔奉仕は最早止まねばならぬ。する事も、なる事も、犠牲

は最早澤山だ。耶穌が小兒を愛した如く、私は自然を信ずる。小兒は自然だから良いのだ。眞善美が私の三位一體である。

妻に並むで向ふの Sofa にかけて居る婦人は、可なり印象をうけたやうだ。“Sensible”と叫んだと妻は後で語つた。Fさんはあまり憚びない顔をした。而して私の妻の信仰を聞きたい、と云ひ出した。

私は妻に代つて斯く答へた。“彼女は、私以上に、自然の信者である。彼女は子供でした。子供です。而して白髪になつても子供でせう——子供と云ふのは眞の意味に於ての子供です。

* * *

室に歸ると、妻は“手紙が澤山來てますよ”と文卓の上を見る。どれ、と私も見る。何も無い。妻は笑つて居る。何の事だ。分つた。今日は四月一日。私はまんまと“April Fool”になつたのであつた。

(三)

四月二日。今日は妻に Mosque of Omar を見せに連れて行く。カアキイ服、同じ色の巻頭巾、若い印度兵の門番が、今にも銃劍で突きさうに無用の者を追つ拂つて居た。事務所の白髯爺さんが、二年天津に居たと云ふて、Mosque の口まで送つて來て、妻の靴にカアアをかけさしたりしてくれた。約十四町歩、眞白に石を鋪きつめ、たた

きつめた高臺に、虹の光を放つ八角堂、圓屋根の上高く新月の金冠を碧空に撃げた Mosque は、流石に美しと妻も見た。而してたたきの床を貫いて轟轟と天を指す黒い Cypress の木木を眺め、天水溜の井を覗き、橄欖山の方を見晴らしたりして、せせつこましいエルサムに唯一の開豁な而して静肅なこの境を喜んだ。然しアブラハムがイサクを献げやうとしたと云ふ磐や、モオゼ、ダビデが祈つた跡だの、マホメッド昇天の孔などは、わざわざ見るものでもなかつた。而して到る處のバクシイシ強請には、兩人共うんざりして歸つた。

* * *

四月三日。昨日 Mosque 行きの留守に Hensman さんが私共を訪ねて來た。あの土耳其人の A さんが話したのであらう。そこで今日は H さん訪問に、亞米利加の赤十字病院に出かける。

病院はもとの Olivet House と相對した以前の露西亞 Mission の構内にあつて、もとの露西亞の病院を其まま使つて居る。H さんは留守だつた。私共は其 flyleaf に贈呈の辭を書いて置いた英文不知歸を一冊殘して置いて歸ることにした。私は十三年前 Olivet House に逗留中、Mrs. Hensman に“Namiko”を送る事を約して、然も終に果さず、今十三年ぶりに舊債を償ふたわけである。

郵便局前からヤツファ門に通ふ街を歸つて居ると、American Bible depot の前で、私共を呼びとめる者がある。それはホテルの食堂でよく顔を合はす其店の米人であつた。私共がとまると、一人の老人が店から出て握手の手をさしのべた。H さんである。髪は白

くなつて居るが、見覚えある顔。早速午餐に同伴する。H さんは尿道の手術後歩行がまだ十分でない。私は持つて居る籐のステッキを H さんに譲つた。而して話しながらゆるゆるホテルに往つた。

H さんはカイロから出した私の手紙を見て、直ぐ返書を出したさうだ。そして Grand New Hotel をすすめたさうだ。それは私は見なかつた。戦争が始まると、英吉利人の H さんは直ぐ土耳其官憲の爲に拘禁され、家財萬端沒收された。Olivet House は私が十三年前に世話になつた頃からいよいよ繁昌して、戦争前には食卓に七十人から出たさうだ。H さんは四年間土耳其の俘虜として、此處彼處に移され、時折いもじい目にも遭はされた。H さんは今年六十六、夫人も同年さうな。H 夫人は戦争前に英吉利に歸つて居た。H さんはポケットから夫人の小さな寫眞を出して私共に見せるのであつた。H 夫人は少しトルストイ夫人に肖て居る。俘虜になつて居た四年間に、夫人の手紙がそれでも四本だけ H さんの手に渡されたさうだ。H さん夫婦は子がなく、兄の子の Robert 君を子にして居る。それも最早三十八。亞刺比亞語が重寶がられて、今 Mesopotamia の英軍に居るが、程なく歸つて來る筈で、H 夫人も其内來ることになつて居ると云ふ。H さんの父は英吉利の農夫で、三年前九十六の高齡で永眠したさうな。Olivet House は今三軒に分けて貸してある。H さんは自由の身になつてエルサレムに歸り、それから赤十字病院で手術を受けて二週間餘になると云ふ。土耳其に四年の拘禁は、随分ひどい目に H さんも會ふたものだ。“然し私なんかまだ仕合せて

した」とHさんは言ふ。同じ俘虜の中で、死んだ者が十四人もある。それは自然の死か、疑問であつた。何某と云ふアルメニア人などは、家族離散し、幸に亞歴山で一緒にはなつたが、家族は誰も誰もひどい目に遭つた。

食堂前の客間で話して居ると、ぐたりした佛蘭西人が来て、Hさんと握手する。此も俘虜仲間であつた。

俘虜と云へば、此ホテルを經營して居るシリヤ人の三人組合の中、眼鏡をかけた脊高の癆せぎすは、始終生唾をはいて息苦しうにして居る。やはり俘虜にされて、虐待され、番人に賄賂して逃げは逃げたが、それ以來すつかり健康を損して居るのであつた。

何れにもせよ、無くなつたと思ふた Olivet House が兎に角あつて、主人のHさんがエルサレムに居合はせたのは、私共に嬉しい事の一つであつた。Hさんは、1890年以來エルサレムに住んで居るので、三十年の居住者は、英吉利人としては恐らく一番ふるい人だ。私が十三年前に厄介になつて以來、日本人で來泊した者が四五人はあつたさうだ。

* * * *

Hさんが病院に歸り行いたあとで、私共はChurch of Holy Sepulchreに出かける。私共の部屋から直ぐ其處に大小二つの圓屋根が見えて居るが、迷宮の様なエルサレムの巷路は、兎もすれば飛んでもない方に人を誘ふ。さつさと歩いて居ると、忽ちダマスコ門に出て了ふた。引かへして、“IV St.”の榜示を見つけた。これは所謂ビ

ラトの廳から所謂十字架の場に通ふ、Via Dolorosaの箇處々々を賣したものだから、それをたよつて行けば、耶穌でなくても、ひとりてに十字架の場に辿りつく。私共はそれをたよりに、爪先上りに上つて、正に寺前の廣場に來た。

Church of Holy Sepulchre

Via Dolorosaの第七Stationから、狭い路次をはいると、其處には恰も本願寺の附近のやうに、兩側には金ピカの十字架や像やメダルや額などを賣つて居る。それに、復活祭に近いせいか、大小五色の蠟燭がさまざまの紀念品と共に處ぜまに並べてある。

鋪道を少し下ると、高い建物に圍まれた石壘の廣場に出る。左に堂の入口があつて、案内者が数名ぶらぶら客をまつて居る。かまはず堂内にいる。まづ耶穌の屍體に膏を塗つた跡といふ白大理石の臺が眼につく。眞鍮の燈籠が數個其上に吊してある。左に折れて大きなドームの下に出る。中老のガイドが來た。二度目だから其つもりで、といふ條件で、案内さす。軍人や外國婦人の二三が居るだけで、淋しい事である。大きなドームの内壁には、見上げるやうな高い廻廊が二段かかつて、天井からは金金した花燈籠が瓔珞のやうに吊るされて居る。其ドームの下の眞中に、床を二段ほど高くして東向きに赤大理石の約五間に三間の御堂が建てられて居る。所謂お墓で、み堂の入口の一室には、希臘派、加特力、アルメニアの獻納といふ金

銀の美しい燈籠が妍を競つて居る。左の壁に尺徑位の孔が見ゆるのは、聖靈の火が出る場所といふ。なほ奥の一室は、空であるべき墓の上を大理石で包んで、其上には十字架上の耶蘇の額を掲げ、蠟燭がともつて居る。賽銭であらう、銀盆に小金が見ゆる。わたくし達も番人御苦勞といつて20Pをのせた。番人はわたくし達の爲に蠟燭を二本たて加へた。此み堂と向ひあつて、希臘派の暗あい會堂がある。きらきらした椅子などが見えて居た。墓の御堂と希臘派の會堂をくろめて、潤い鋪石の廊がまはつて居る。廊の壁、會堂の後へかけて、僧正大僧正の墓や油繪の肖像が數多ならんで居る。

希臘派會堂の背から尙一層奥に十數段の石階を地下室に降ると、明るい可なり廣い室に出る。コンスタンチン大帝の母君ヘレナが此處からふるい十字架を掘り出したのが、多分耶蘇のであらうと、ヘレナの像に其十字架をもたして祭つてある。小さい方のドームが上を蓋ふて居る。私共のホテルの室から眺めて、大きなドームの東に並んだ小さなドーム、其頂に十字架が立つて居るのは、即ちこれである。

元にかへつて、希臘派會堂の横手から南に階段を十數段のぼると、石造の二階のやうな、西に石の欄がついた薄暗い處に出る。欄から脊をぬつた臺を見下ろす。此處がカルザリーの跡といふので、欄に對した東の正面には、實物大の耶蘇の像が、蠟燭の明できらきら、西向きに立つて居る。大理石の床に、銀縁の穴がある。所謂十字架の跡さうな。少しはなれて、案内者が大理石の蓋をのけて、私共

に“岩の裂け目”を覗かせる。石灰岩とおぼしい天然岩が見られた。わたくしは、自分が子供であつた時代に感じたと同じ心持に感ずる事をどうする事も出来なかつた。それは基督についての何の智識も持たない十三四のわたくしは、其十字架の姿を第一いやだと思つた。そして二目と見たくなかつた。聖書の上では、其悲壯にうたれるやうになつてからでも、十字架上の基督を見るのはいやであつた。今も矢張見たくない。女の情として、十字架を見るに忍びない。早くとり下ろして、手足さすつて、いたはつて、復活を祈るより外に何の望みかあらう？私は出立の頃、夫が“十字架の時代は過ぎた”と旗をかかげた時、單に女として胸なでおろすよろこびを感じた。

十字架上の基督の左にならんで、硝子箱入、お母さんのマリアの像がある。硝子箱入りだけに、本當に人形の氣もちがする。世界人類の感謝の象徴を一身に集めて、歐洲各國の帝王から富豪から贈られた白光のダイア、紅黄碧紫緑、と虹のきらめきがあたりをくらますほどの寶玉の數數、ルビイ、オオバル、エメラルド、サツファイア、トツバアズ、眞珠、紫水晶、世界にあらんかぎりの珠玉をプラチナ金銀にちりばめて、ネツクレエス、耳飾、腕輪、指輪、勳章と重さうにつけてお出になる。なほつけきれずに、其後の箱板にまで掛け連ねてさへある。錫崙のカンデイのお寺の歯を納めたあの籠も寶石で美しかつたが、これとはとても比べものにならぬ。

私はマリアの顔を見ながら言葉をかけた。“お母さん、随分つらい思ひをあなたはなさいましたね。こんなに飾りたてられても、うれ

しくばかりはおありでないでせう。二千年とは、ながう御座いましたね。けれども、もう御安心なさい。“十字架の時代は過ぎ”ました。あなたの愛子の耶蘇の復活が知らるる時になりました。おうれしいでせう。復活の耶蘇の傍には、あなたの娘^{よめ}が立ちます。あなたは早く夫ヨセフさんの側にお歸りなさい。世の男子のそそのかしにのつて、大事の夫をふりすてて、一人飾りたてられて、何が幸福なものですか。ねえ、さうでせう、ね？ 祭り上げられて、決して本意でありますまい。安心してお歸りなさい。

あ い

* * *

私は聖母マリアを此前よく見なかつた。今度見て其寶石の富に驚いた。私に澤山の Weakness がある。寶石が好きなのも其一つだ。私は戯れに妻に云ふた。“此頃の此寺のさびれやうでは、アラブの一人二人を語らうて、あのマリアを盗み出す位何でもない。”妻は直ぐ云ふた。“するとアラブがあなたを殺して寶石を独占めにしてしまひます。”道理至極の一言に、私は盗み心をやめにした。何は兎もあれ、私が戯談にもそんな事を言ふた程寺の内は薄暗く淋しく、前に見た時に比すれば、恐ろしいさびれ様である。戦争のお蔭が思はれる。聖書に云ふ通り、耶蘇が復活したなら、其墓は空虚な筈だ。空虚な墓の上に建てられた此寺院が、空虚である可きは、自然である。私は人氣の少ない、而して薄暗い、物さびしいの^{ありがた}かつた。いつそなければ、尙^{ありがた}い。然し復活祭も近いので、また雑沓が始まる

だらう。

* * * * *

夕食後、二階の Parlor で、米國の一紳士と話す。Harper's Magazine の政治記者で、一昨年日本にも來た事がある。三時間も立てつづけに長廣舌を弄したと云ふ大侯や、新博士の噂などして居た。細君は、佛蘭西で、兵士に演説をして歩いて居る、さうだ。一時間の談話に、私は例の通り十字架の経過、新紀元の創始、種族の還元、兵備全變等を宣べたが、思はしく舌がまはりかねて、もどかしかつた。

其 二 屋上日記 (續)

(一)

私はエルサレムに来てからの日記を、「屋上日記」と題した。耶蘇の言に、「掩はれて露はれざるものはなく、隠れて知られざるものはなし。是故に爾曹暗きに語りし事は、明るきに聞ゆべし。密室にて耳に付き言ひし事は、屋上に播るべし。」とある。Palestina の人家の平たい屋根の上は、家の一番公な部分である。殊にエルサレムなどのやうに、人家密集して、家内薄暗く、迷宮のやうな巷路のくねくねして、何處で何があるやも知れぬやうな處では、天下晴れた公の場所としては、平たい屋根の上に越すものはない。何の家にも、奇麗なたきになつた平屋根がある。水の乏しい地だけに、天水を其處で集めて溜に流す爲に。洗濯など乾す爲に。また夕涼をする爲に。好色の王ダビデが夕涼みして、適に滌ぎ物などするベテシバの艶色を見つけたも、屋上だ。觀面に其爵として、逆子アブサロムの父を辱しめた烈しい事を働いたも、屋上である。眞晝中斷食祈禱して、たまらなく空腹に茫となつた瞬間、氣弱のベテロが頓悟して、「構ふ事はない、何でも食べ」と云ふ異象を見たも、エルサレムではなくヤ

ツアのやはり屋上である。猶太民族の歴史に、「屋上」は大なる于繁がある。古の歴史に于繁ある屋上は、今の生活にも勿論飲可からざるものだ。そこで物變り星移つても、此地方の平屋根は、依然として建築の重要な部分の一つである。何の家にも、それがある。Grand New Hotel にもそれがある事を、私共が見出したのは、來て間もなくの事であつた。

(二)

私共の室から五歩にして廣間に出る。時によりて“Private”の札が下がる南側にくつついた小客間と共に、此ホテルでの一番立派な廣間だ。其廣間を西の端まで往つて、階段を下れば、帳場や食堂や他の一階の室室に往かれる。それを下りずして、却て上る階段が、一隅にある。それを上ると、折れ曲りにまた一つ階段がある。折れ曲りの壁には、Trafalgar の海戦ネルソン負傷の石版畫が挂つて居る。その第二階段を上り果てると、短い廊下がある。向つて左が物置。右の硝子扉を開けると、平屋根に出る。

青天白日、八方無礙の大展望臺を、近くわが頭上に有つ事を見出した私共の悦喜は、大なるものであつた。

それは、百五十疊も敷けさうな、長方形の平臺で、すつかりたきになつて、水はきの爲北の一方が蓮の葉を半折したやうに心もち凹くなつて居る。眩かけ程の石欄がぐるりと廻つて、見下ろすうち

よと眼まひがしきうに高いが、欄内は少しも不安な感がない。風の方向次第で廻轉する鐵葉の場を取りつけた煙突が數本、東北側の欄外に出て居るが、下で暖爐を焚かないから、煙が出た事がない。洗濯物を乾すやうにはなつて居ても、滅多に乾してあつた事なく、妻が時々物干しに利用する位。何様なホテル繁昌の時も、此平屋根へ上る物數奇の客もないので、これは全く私共の専用も同様であつた。前後五十日近い私共のエルサレム逗留は、殆んど此屋上のお蔭であつた。

Grand New Hotel の位置が好かつた。エルサレムは西が高く、東下りになつて居る。ホテルは、エルサレムの西門ヤツファア門を入つて直ぐの所で、地盤が已に高い上に、四階の屋上は、展望を礙げるものもない好い見晴らしであつた。私共が其處に立つて東面すると、橄欖山かけてエルサレムは一目であつた。白がちの平屋根が、段段低に東に流れる。其間を、大きな泡球のやうに色色の圓屋根が浮き出たり、或は十字或は新月をいただいた筈の様な尖塔が突出たりして、單調を破つて居る。エルサレムに樹木は少ない。Mosque of Omar の Cypress, Zion 山の赤松、それからよくエルサレムの寫眞の前景に使はるる Armenia 區の一本棕櫚、其他は尺庭寸園の小さな植物で、緑の快感はエルサレムには獲られない。ひらり、ひらり、屋根から屋根に飛んで、エルサレム中は土踏まずに歩かれさうに、家が密集して居る。其大部分が平屋根である。其平屋根に、晝間は洗濯物干しの女でなければ滅多に上るものもないが、夕方になると、

皆散歩に出る。飛でもない處に遠見の僧衣姿が二つぶらぶらして居ると思ふと、それはやはり寺の平屋根の上である。ある時、不圖見かへつて、馬が二階に上つて居ると思ふたのは、背の方の地盤がより高いので、其處の狭い Court に秣を食んで居るのが、二階のやうに見えたのであつた。

これらのごちやごちやしたエルサレムを見越して、當面に橄欖山がゆつたり此方を見て居る。横長い其阜に、露西亞の Belvedere 塔は南、それと脊くらべする獨逸の方塔は北に立ち、それから折れ曲りに北へつづいて、昔羅馬の帝 Titu が其處からエルサレムを攻めたと云ふ Scopus 山になつて居る。橄欖山頂の獨逸の塔は、低く見えて、其實露西亞の塔より高い。ダマスコ門外の Hospice、つい私共の眼下のエルサレムの真中に居て周圍の何れよりも高い獨逸會堂の尖塔、要害に堅固なものを建てた獨逸の執心は淺くない。橄欖山の向つて右が死海向ふの山山で、月が其處から出る。

西は、城外の谷から、エルサレムを圍む山山波濤のうねるがやうに、猶太人其他の植民部落や、さまざまの獨立家屋が、近くまた遠く、緒く又白く、點點して、快晴の日は數里の外を見晴らし、あまりに明るく、白く、眩しい程である。

ホテルの南面は、ヤツファア門内の廣小路の端を低い石垣で劃つて、雜草の生えた空壕から古城砦になつてゐる。其處には英吉利兵埃及兵が住んで、時に喇叭の聲を聞く。其石垣の間間は、朝夕にエルサレムを賑はす無數の燕、それから鳩や雀の巢になつて居る。飛行

機を晒ふ燕が輕快無比の滑走宙返へりをして、ずつと其石間に消えるのを見るは、眼の樂である。然しそんな燕の輕業も、屋上から見下ろす下の通りの限りない活動畫の變化に比べては、あまりにあつきりとしたものである。エルサレム中で、人間の見物は、ヤツファ門附近を第一とする。十三年前に私が來た時よりも、門は取擴げられて居るが、此世紀の最初の年に Kaiser 歡迎の爲建てられた高い時計臺は昔のままで、私共をまごつかす土耳其時間をしした其硝子面、三十分毎に高く鳴り低く和する妙な調子の其音は、あまりに耳近で、最初は氣になつて仕方がなかつた。時計臺から内に、銃劍の英兵が二名、左右に分れて、番をして居る。時計臺の此方は、憲兵屯所になつて居る。

屋上から眺めて居ると、實にさまざまのものが眼下を通る。朝は Market の往復で殊に賑合ふ。ヤツファ門外の阪上、馬車や驢馬の溜りで常に騷しい其處の廣辻には、トマトやオレンジ、季節の野菜の卸賣小賣りがあるし、門内も左右の歩道は菓物賣、飴賣、菓子賣、籃入りの生きた鶏賣、さまざまの物賣男女で一ぱいになるが、本當の Market は、其門内の廣小路を歩き盡して、東へ下りる狭い巷路にある。廣小路は、ホテルから半丁程で、鍵の手に、南に折れる。Banco di Roma や Thomas Cook & Sons の看板が折れ曲りに見られる。其 Cook の店から東へさした巷路を下る。二間幅の坂になつた鋪石の巷路。左右は、肉屋、パン屋、八百屋、干物店、豆腐屋かと思ふやうな丸四角さまざまの白いものをならべたチイス屋、それ

には不規則な小間物屋、などもまじつて、口の小さい暗い店が、ハアモニカの歌口のやうに並んで居る。其處を、人間ぐるみ、驢馬ぐるみ、聲と臭とごつちやになつて押し合ふ雜沓は言語道斷である。然し Market まで下らずとも、私共の屋上からの眺めで澤山だ。馬車で Cook が買ひ出しに來る。大きな提籃の口から赤いもの、緑のもの、紫のものなど喰み出さして、個風な女が體を歪まして行く。血だらけの丸むきの羊を背負ふて、男が行く。母のお使ひの boy が甲斐としく空籃提げて來る。Market には要もないハイカラ装の土耳其赤帽が、ステツキをふつて來る。黒い羊を引張つた粗糲のアラブが來る。三人連立つ英吉利 Khaki。巻頭巾の印度兵。中剃りした頭に、兜巾のやうな小さな帽をひよいとのせた修道僧は、踵にまつはる鶯色羅紗の僧服に、重たい銀の十字架をぶら下げて來る。長い劍をちやらつかせて、馬上のアラブ憲兵が來る。驢馬の尻つべたにのつて、白髯の爺さんが來る。眞黒に包まれた回教婦人が行く。縞の筒袖着流しに紅革の靴、揉み上げを長くちぢらした猶太人が行く。背廣輕快に、紐育でも歩いて居さうな足どりて米國人が來る。それから塵埃が立つと、頭と四肢を切り去つた山羊の胴體其ままの革囊をぶわぶわと負ふた素足の男が、口からうちふりうちふり、しやあしやあ水を撒いて行く。

日の間は靜かになるが、夕方はまた賑合ふ。日がな一日眺めて居ても、中々見盡す事ではない。

全く此屋上は、特に私共の爲に興へられたやうなものであつた。

妻は粕谷の書齋の茅葺屋根を撤去して、平屋根を造る事さへ主張する。而して何を見るのであらう？

(三)

此屋上を有する Grand New Hotel は、赤帽の太短い髯無しさんと、赤帽の脊高八字髯さんと、先に云ふたせいせい息の眼鏡さんと、Syria 人の三人組で經營して居る。使用人は皆 Syria 土人である。私共の室の電鈴を一つ押せば、赤帽の六十近い Anton が来る。物馴れて、少しは英語を使ふ。二つ押せば、無口で柔和な四十近い maria が来る。佛蘭西語しかいけぬ。手様半分用事を頼むと、“All right” と云ふ代りに、“Good bye” と云ふ。食堂給仕も勿論佛語である。食時には銅鑼をうつ。食物は、戦後としては、比較的好的だ。朝の珈琲が好い。乳もよい。午餐二皿。夕食三皿。Dessert に何時も Orange がつく。度毎に食ふても要かぬは Orange だ。日曜にはきつとライスカレイがある。野菜によく朝鮮薊を食はす。ザラメ砂糖の豊富なものが、一番ありがたい。“砂糖の味は平和の味” と誰やら言ふたが、全くだ。平和の民たる私共は、粕谷の生活に、四五人の家族で、少ない時も月に砂糖の一貫目近くは舐める。埃及の Shepherd's Hotel は、料理は好かつたが、砂糖節約で、茶や葡萄酒に和す爲にも、給仕がちよつぱりしか持つて来てくれなかつた。エルサレムに来て砂糖に不自由しない事は、一の意外であつた。飲料水も、英吉利の統治に

なつてから、餘程好くなつたさうな。時折石油の臭がするのは、ホテルで器物を消毒した其あとがよく拭けてないからであつた。兎に角水は不自由なく、手摺ながら風呂にも入れる。W. C. の近くに、手洗ひがあるのがありがたい。

Olivet House がなくなつた場合、Grand New Hotel はやはり私共に一番好い宿であつた。外出の場合の外は、和服で通す。屋上はもとより、廣間も私共のくつろぐに任されて居る。然し追々 Easter が近づくので、今にホテルも満員の賑合にならう。

(四)

平屋根について、エルサレムの特色は其巷路である。周圍約一里の城壁に囲まれたエルサレムを一の完全な迷宮にしてのけるものは、其無数の巷路である。自動車を通れる道路は、城内には一條もない。石灰石を鋪いた狭い道路は、年と共に凹凸が出来て、歩きにくい事夥しい。一時間城内を歩いて歸ると、三四里の路を歩いたよりも足が疲れる。城内は四區に大別される。西北に高いのが歐羅巴區。西南の同じ高い一區が Armenia 區。東北 Mosque of Omar に接して回回教區。東南が猶太人區。エルサレムを二分して、西の高みの歐人アルメニア人區は、比較的建物も立派で、驕かで、石路も奇麗な方だが、それでも人通りの少ないを好い事にして、糞尿の臭氣往往鼻をつく處がある。氣味わるく何の血だか垂れて居たりもする。猶

太人區は、更にごちやごちやして居て、汚ない。回教區に到ては、駭かしき、汚なさ、お話にならぬ。すべての清淨は Mosque of Omar に預けて、残りの不潔は赤帽諸君アラブ諸君は生活してお出だ。馬や驢馬の落しものに危く足を踏み滑らして、覗き込む客の中のやうな暗い店には、古綿のやうに羊毛を積んで賣つたり、家の中からカタコト蹄の響がして、繫がれた驢馬の眼が暗に光つたり、狭い巷路を一ぱいふさげて、例の暑寒ぶつ通しの粗袴をひろげたアラブの恐いおちさん達が、永遠をわが有の顔してのんきに立話をして居たり、如何はしいものまみれた鋪石を跳足の男の子が走つたり、全くほうと息をつく。痰唾吐く者が少ないのと、此不潔にしては蠅が少ない方であるのが、まだしもの取柄である。

腹黒い人の腸のやうなエルサレムの巷路。其騒がしい處は、右の如く、淋しい處は、また特有の氣味悪さがある。あの石塀の曲り角、そこにはイスカリオテのユダが短劍ぬいて再臨の耶穌を待伏せしては居まいか。抜け小路、袋小路、上り小路、下り小路、塀に傍ひ、家をめぐり、暗みへ、明るみへ、出つ、入りつ、くねり、くねつて、エルサレムを全く一大迷宮にしてのける此等の巷路は、人の心を不安にせては惜かぬ。此方が人を追つかけるであつたら、如何追ふたら追ひつけやう?かくれんぼうには、持つて來いのエルサレムである。遁げる身であつたら、如何逃げおほせやう? 保蹄と陷窠だらけのエルサレムである。次の横小路でばつたり捉まらずには済みさうもない。市街戦のさまを思ふて見る。狭巷短兵相接處、殺人如草不聞聲と

云ふ一幕もあらう。耶穌の死後三十年ならずして、エルサレムが羅馬人に攻め陥された時、頑強な猶太人が尺寸の地を死守して、一步毎に手いたく戦ふた其時を思ふ。それから、ある書で見た繪が思はれる。あの兜をかぶつた羅馬兵が二人、落ちたエルサレムの奥の人家に入ると、安達原の婆見たやうな、餓に迫つた母が、刀をとつて子を屠らうとして居るので、ぎよつとする、畫である。短刀右手に、兵士を見かへつた其眼の凄さが、今も眼にある。

歐羅巴人、Armenia 人、回教徒、猶太人と、おのおの類によつて集まつて居るが、互の憎惡が此エルサレムの狭い城内に爆發したら如何であらう? 猶太人の虐殺、アルメニア人の虐殺が、回教徒によつて行はれたら、如何であらう? 猶太人は勿論、基督教徒にも、また回教徒にも、神聖若くは半神聖のエルサレムだから我慢して居るやうなもの、要するに、此山の上の城は、本當の噴火山上の城だ。

私は、周圍の城壁を毀ち、一度エルサレムを Church of Holy Sepulchre ぐるみ、Mosque of Omar ぐるみ、美しいもの、汚ないもの、舊いもの、新しいもの、一切合切焼き拂ひ、而して後、十分の間隔をとり、縁を多くして、新しい山の上のエルサレムを造りたい。

其 三 屋上日記 (續)

(一)

四月四日。午後屋上に上る。少し冷えるが、美しい日だ。好い眺めだ。妻は美しい都城だと云ふ。然し私には一向別に面白くも嬉しくもない。適か下の鋪石を見下ろすと、飛んで自分を粉にしたくなる。エルサレムの寺だの塔だのごちやごちやした集團を見ると、獨逸の大砲でも借りて来て、一気に粉碎してしまひたくなる。歴史が邪魔になる。過去が邪魔になる。新天新地の邪魔になる。何で此様に私に殺氣が湧くの乎。妻は曰ふ、あなたの心には美しい都がとくに出来て居ます、だからふるいものには、興味がないのです。

私は最早エルサレムがいやになつた。

然し、兎に角 Easter は近い。復活祭が過ぎたら、早早往つて了はう。

(二)

今日は金曜日。猶太人が涙の石壁に斬りをささぐる日である。

午後四時から、わたくし達は、ダビデの碧の空濠に傍ふて南に折れ、それから東に折れて、アルメニア區を通る。松の大木数株松風奏づる縁の影を、故國なつかしい心地に見上げながら行く。此區の塀高く、要心堅固に見ゆるは、土耳其にふだん憎まるるアルメニア人の住居だけに戒心があるのであらう。黒服すつぽりと頭から掩ふた女が、子供の手を引いてゆくのに出逢ふ。夫は“マダム!”とよびとめ、‘Wailing Place は此方ですか。’と日英まぢりに指ざしたづねると、一寸どきまぎして、“アア、ソオ”とまるで故國の女そつくりな聲してわたくし達をよるこぼした。固より言葉はわかつては居らぬ。まあいつて見やうと、やや北へ足をむけた。狭い石壁の小路に、五つ六つの子供達が遊んで居る。後ろの方を指さすので、はいつてゆくと、それは地下室になつて居る猶太人の會堂であつた。二三の人が居たので、夫が帽をとつて道をたづねやうとしたら、彼等自らの帽を指し、おとりになるには及びません、私共の風習です、といふらしい。一體して此處を出て、驢馬の糞などちらばつて居る臭い、それでもやはり鋪石の小路を迷宮のやうにまはつた。とうとう、赤帽のきちんとした片眼の青年に案内してもらつて、折れ、曲り、上り、下りして、やうやく石壁に辿り着いた。もう三十人許の男女が、石壁の下にあつまつて居る。

ソロモン時代の名残りといふ此石壁は、長さ二十六間、高さ十間、中には一丈平方もあらうと思はるる紫色の大石を用ゐて、約三千年になるさうな。背も石垣で、深い塹壕の底に落ちたやうな心地がす

る。老も幼も手に手に、新書本であらう、古びた茶皮表紙の小形の本をひろげて、節かなしげに歌ふやうに、泣くやうに、祈るやうに誦する。或一群では、一人の先達ラビが一句を誦すれば、皆合唱する。わが唱する聲につれてラビの頭が上つたり下つたりすると、皆が和して口に文句を唱へながら體を前後に揺るのが、可笑しくもまたあはれでもある。女は隅に一群をなし、中には石壁に顔をうづめるやうにびつたり身をよせて、小さい聲して祈るのもある。男の中には、土耳其帽も居る。鹿服が多いが、次第に増す人数の内には、紫や金茶や黒や青の艶艶したフラッシュ天の長いがウンを着流し、ラッコの毛を長く縁どつた平つたい頭巾やうの帽子をかぶつたのも見えて居た。

私共の外に、赤帽や、カアキイの英人が四五人、はなれて見物して居る。

石垣の一番下の石には、希伯來文字の題書が数々見える。石と石との間に、大小の錆釘が幾本も幾本も打こまれて居る。乾燥地だけに、草や苔は割に少ないが、石の間から昇り藤のやうなクリーム色の花が仰向きに咲いて居る。わたくし達は、紀念に其一枝をとると思ふたが、Jew さん達に氣の毒になつて、止めにした。

耶蘇基督に眼をさまさなかつた彼等は、二千年ねむつて來た。過去の死骸にとりつくも人情の美には相違ないが、こんな事では、今此新世界の創立に又もやとりのこされはすまいか。

あ い

* * *

猶太教から、耶蘇教が生れた。耶蘇から六百年後れて、マホメッドがアラビアに生れた。マホメッドも最初は父なる猶太教を敬し、兄なる耶蘇教に一目置いた。然し此猛烈な沙漠の人は、其父をも其兄をも邪魔視するやうになつた。それも自然であらう。

猶太教と耶、回教の關係は、アダムの其子カインとアベルのやうに、アブラハムの庶子イシマエルとイサクの様に、またイサクの其子エサウとヤコブの關係に似て居る。猶太人の歴史は、アラブをイシマエルの裔とさへ云ふて居る。カインもイシマエルもエサウも兄だつたが、弟に嗣子の位置を奪はれた。マホメッドは耶蘇より六百年の弟だが、アラブと云ふ其荒びた氣癖、庶子の怒、廢嫡の恨と云ふたやうに、父を怒り、兄弟を嫉む行迹は、何となくカイン、イシマエル、エサウの系統をひいて居る。回教は斷じて平和の宗教でない。此親子兄弟喧嘩は、マホメッドの昔から、十字軍の昔から、色色の嗣合を更へて、今日につづいて居る。このたびの大戦に、土耳其と結んだ獨逸が、マホメッドどころをした事は、争はれない。同時に“柔和なる者地を嗣ぐ”と云ひ、“劍を抜く者は劍にて亡ぶ”と云ふた耶蘇の意が所謂聯合國によつて體現徹底されたとは云はれない。繼嗣争ひは、何處の家にも、何處の國にもある。然し此エルサレムにあらはれて居るそのやうに著明なものが、滅多にあらうか。耶蘇を生むて、まだ餘命ある猶太の頑強は、殆んど Eternity のやうな壯觀がある。強弩の末、まだまだ馬鹿にはならぬ。昔は耶蘇がソロモンの殿から

利益を貪る商人を繩の鞭でたたき出したが、今は六百年の弟の裔が其神殿跡を吾有貌に居据わつて居る。英吉利は今エルサレムを治めて居る。Zionist は猶太の再興を希圖して居る。回教徒は極力それを廢げやうとする。此争ひは如何様に納まるであらう乎。父が亡びたらよくない。兄が亡びてもよくない。弟が亡びてもよくない。皆生きねばならぬ。皆活かさねばならぬ。而して平和が終に地を嗣がねばならぬ。勝負は、とつくについて居る。唯それが、人の眼の前に、展開して来る道行き、が見ものだ。

* * * * *

復活節が近づいて、ホテルにも客が増した。私共の最初居た隣の室にも、英吉利人らしい夫妻が入つた。

(四)

四月五日。Hensman さんが日本からの郵便物を持って來てくれた。エルサレムで受取る最初の日本だよりである。Hさんは、最初會ふた時より、日に日に元氣に見えるが、然し何角と不自由らしく、服などが大分ふるびて居る。

午餐後、私共は徒歩橄欖山に出かける。基督再臨信者の多くは、基督は橄欖山に現はれる、と信じて居る。私共は、唯散歩に行くのだ。其處に再臨の基督にぶつかる爲ではない。また自ら基督に化けに往くでもない。

ダマスコ門を出る。此門附近の城壁は、鋸齒狀に高低して、一番中世時代の城らしい感を與へる。それから城壁の石垣の下部が、石黒み、草青み、天然岩の面貌をして居るのも、古い感じである。知事官廳横をずらと通つて、ケデロンの谷に下る。毎毎ながら道傍の圓饅頭の形した丘、即ちゴルドン將軍のカルザリイを見て、十字架の跡としては此方を私共は探りたく思ふ。あんなうるさい會堂や何かのつかつて居ず、青天井で、日光はあたり放題、と云ふ此方がいくらましかも知りぬ。ゴルドンは、附近にそれらしい岩穴の墓さへ見つけた。私は此前も見ず、今度もまだ見ないが、見るまでもなく、それにして置く。二千年後に空墓の詮議でもあるまい。

ケデロンの谷の橋近く、土人の子供が Orange を賣つて居る。二個を 1P で買ふ。ゲツセマネの園はまた見るとして、私共はそれを右に見て、山につけられた細い逕を上る。小さな一輪草のやうな紫の花が咲いて居るのを、妻は摘み摘み上る。

上り果てると、橄欖山上には、坦坦たる大道が通じて、自動車が一臺、馬車が一臺走つて居る。私共は直ぐ露西亞の Belvedere Tower に行く。私共のホテルの部屋から日夕眺むるあの高塔である。露西亞人のお婆さんが編物しながら番をして居る。私共は、一寸目禮して、直ぐ上りかけた。二階まで上ると、一人の青年が英語で、“今下りて來る者がありますから、少し待つて下さい”と云ふた。やがて青年男女が二人、飛ぶ様に螺旋階を下りて來た。私共は一段一段、一層又一層と、徐に上つて行く。すべて六層。三階に大鐘が一つ。四階に

は中、小の鐘が七つ掛つて居る。風が吹き出した。Orange を食つて元氣をつけ、吹きつゝの風にとられじと、妻は帽子の上からゴエルで頬冠りし、片手は編幅、片手は階につれてくねる鐵欄干をしかと捉へて上る。總計二百十四段を上り上つて、絶頂に來た。

橄欖山はエルサレムより二百呎高い。而して塔は尙其上に立つて居る。獨逸の塔を除いては附近の展望臺として、此に越すものはない。私は妻を東面に導びく。死海、ヨルダンの谷が東に現はれる。死海は Turquoise の楕圓鏡を深く嵌し、ヨルダンの谷は白茶の帯を低う延べる。其處は塔から十五哩半、三千九百呎の下であるが、空氣澄明、ついそこにあるかのやう。今度は南に向ふ。ベテレヘムから其方の山山が波の如く起伏する。北の方にも、西の方にも、山又山が永久の波をうつて居る。

好い眺め、然しひどい風である。十三年前私が一人で上つた日も、塔を吹き倒しさうに吹いたが、妻を連れて來た今日も、劣らず吹く。ペンテコステの風のやうな風だ。あまりひどいので、大抵にして塔を下る。戦争以來、此處の寺院もさびれ、塔の其處此處の硝子窓も、破れたままになつて居る。

塔を下りると、先刻の青年男女の群がまだ居た。少し話す。彼等は Jew であつた。今日は土曜日、即ち其安息日なのだ。群の中に七八歳の男の子が居る。私は其子と握手し、Kantara の Y.M.O. A. で買つて今日も持つて來た一箱のキャラメルをやつた。皆喜ぶ。

塔の近くに小松林がある。前に私が來た時までは無かつた。私

共は黒松の蔭に腰かけて Orange を食べる。若木の松が、風を起して、故國の情調をそそる。先刻の猶太人の群が通りかかつて、“左様なら”と呼ぶ。彼小供がキャラメル握つた小な手を擧げて、笑貌を見せながら往つた。

歸りは Scopus 山を通るとして、橄欖山頂の大道を少し北へ行くと、後から空馬車が來て、乗れとすすめる。先刻見た馬車である。疲れ足の私共は、喜んで乗つた。馬は白糸編みの耳立頭巾をきちんとかぶつて、青玉の頸輪をかけて居る。やがて獨逸の寺院を過ぎる。此處の高塔は、露西亞のと二つ並んで橄欖山頂の目標である。此處は今英吉利軍の本營になつて、高塔の上から英吉利の眼が四方を見張つて居る。スコバス山上には、英兵の天幕がある。目算五百もあらうかと思はるる新しい十字架の墓標は、附近の戦に斃れた英吉利將士の墓である。

向ふから來た馬車の上に、目撃する老少二人の女を見れば、毎日ホテルの食堂で顔を合はす人人であつた。

英吉利會堂の前で馬車を下り、徒歩街を歩いて歸る。店が多くしまつて居る。猶太人の店。

ホテルに歸つて、室内に茶を呼び、あらためてベルゴデル塔を眺める。先刻其頂に立つたから、私共の有の様になつかしく眺められる。

* * * * *

夕食後、二階の廣間にくつろいで居ると、足のわるい瀟洒とし

た老紳士が、淡紅の婦人と、来て向ふの Sofa にかけた、私共の隣室に居る夫妻である。名は Mr. and Mrs. Foa。夫人が若いと思ふたら、後妻であつた。而して子供がない。Foa は英吉利人には珍らしい名。祖先は伊太利の人さうな。英吉利埃及銀行頭取で、南米の銀行も有つて居る事を後で知つた。Fさんは Cambridge で故菊池さんと同級で、菊池さんが亡くなる迄交誼はつづいたさうな。外国語を使ひながら始終首席を菊さんが占めて居た、と昔話をして、同じ國人の私共を殊になつかしがるのであつた。Fさんは痼疾の足痛で、休養かたがた永らくナイルの上流カアツウムに逗留して居たと云ふ。色々ナイルやカアツウムの話をしてくれる。カアツウムで衛生上蚊の征伐に骨を折リ、川蒸気などで蚊を連れて來ると罰金を課する、と云ふ話が出る。徹底的ですね、と云ふた私の言葉がFさんを満足させ、一番好い旅行の Plan は Plan なしに歩くのだ、などと地口を云ふて、Fさん軽い話をする。

淡紅夫人は妻の羽織の大鳥を撫でて見て絹に驚き、行丈の短いその羽織を被て、肩を掉つて、廣間を往つたり來たりする。と、あの十字架無用論以來少し疎くなつた肥大の Feingold 君とマツキンレエのやうな顔をした米國の雑誌記者が、似合ひましたと笑ふ。夫人は、自身の淡紅色の絹編の Gown を引つづつて見せたり、琥珀の頸飾を見せたりする。

夫人が退いてからも、私共は猶しばらく話した。Fさんは Zionist Scheme について、寧悲觀的だ。慈惠に生きる猶太人が多くて

いけぬ、と云ふ。

(五)

四月六日。日曜。昨日Hさんとの約によつて、英吉利の教會に同行すべく、私共は午前十時に亞米利加の赤十字病院に往つた。Hさんの室は、穹窿があつて、僧庵のやう。隣には浴室など添ふて居る。醫師や看護婦の親切を、Hさんは感謝して居る。エルサレムが英吉利の手に歸したを喜んで昨年十月に出した大阪の藤收師のはがきを、Hさんは見せて喜んで居た。

Hさんと病院を出る。構内に、柵結ひめぐらして、石柱が一本横はつて居る。それは石灰石床から切り出しかけて、少し裂け目があるので其ままに捨て置かれたのである。Hさんの推測によれば、其昔神殿の用に切り出しかけたのであらう、と云ふ。

Hさんは途々色々の人に挨拶して行く。三十年から居る人だけに、戦後の今日も相識が多い。病院の看護婦連が、Hさんに言葉をかけつつさつさと追ひ越して行く。回教の女が Veil を掲げ顔を露はに歩いて來る。回教男子が來ると、大急ぎであの Veil を下ろす、とHさんは笑ふて話す。最早、回教の女の顔にも夜が明けかかつたのである。北の丘の上に Mosque があつたのは、戦争中砲彈の爲に倒されて了ふたさうな。

St. George の Cathedral は、昨日其前で私共が蹴躓山歸りの馬

車を下りた處であつた。構内には、Pepper tree が鬱鬱と淺緑の葉を垂れ、玄關口には、蔓ばらが一ぱいに咲いて居る。禮拜は最早始まつて居る。會衆は至て少ない。説教はなく、晚餐式がある。Hさんは罷り出て其式に預かる。私共は祈禱本を見たり、疎らな會衆を見たりする。F夫人が女中と來て居る。

會が終ると、私共はHさんの案内で其處らを見て廻る。壇上には、定まつた椅子があつて、此處は濠洲メルボルン大監督の座、此處は云々と一一記してある。先刻私共を途中で追ひ越した看護婦連の中のお俠が、つかつかと其椅子にかけやうとすると、英吉利女らしい看護婦長が、持つて居る鞭の先きで、背を小突いて、叱叱と制し止めた。大理石の浸禮盤は、昇クトリア女皇の献上と銘うつてある。Hさんは、其處に近いある一處を指して、此處は Canon が立つ位置で、それを土人の子供がさかしらから Canuon と知らしたので、大砲でも如何かしたのか、と獨逸人や土耳其人が大騒ぎして床下を掘つて見た、と云ふ話をした。

外に立つて居る斷柱は、Byzantine の時代物である。

* * * * *

四月七日。午後、午眠からさめて、東の扉を開くと、一羽の鶴がエルサレムの空を舞ふて居る。妻を呼んで、共に眺める。嬉しい氣もちになる。

鶴が消えると、飛行機が城上を飛ぶ。“全く鳥だね”と私共は其翻翔を目送る。

向ふの屋根を、胸の白い黒猫が通る。聲をかけると、此方を見る。“まるで、尼さん”と妻が云ふ。

白の下着、黒の上衣の尼僧が、現に其屋根の上で、洗濯物ののりをつけて居る。

* * * * *

復活祭前に、復活祭前に、と私はエルサレムに行くについて云ひ云ひした。復活祭は近い。一體、私は何を復活祭に期待して居るの乎。此復活祭に、基督が出現し、再臨する、と望んで居るのであらう乎。何か變つた現象が、此 1919年の Easter に起る、と思ふて居るのであらう乎。

何で私はエルサレムに來たのであらう？

先日私はあの肥大漢のFさんに、“講和會議は、エルサイユでなく、エルサレムにこそ開かるべきであつた”と曰ふた。

私はエルサレムに來た。而して復活祭は近い。

私には、云ふべき事があつた筈だ。

エルサイユの界限、否、世界を通じて論客説者は雲の如くにあらうとも、それは其人達の事である。

然だ。基督は逝き、トルストイは死んだ。

私が云はずに、誰が私の曰ふ事を云はう？

山の上のエルサレムは、聲を出すに好い場所である。

復活節は好い季節である。

私は言ふ。

私は言はねばならぬ。

其爲にこそ来たのだ。

モオゼの如く辭退し、ヨナの如く逃げて、^{エペソ}阿翁につかまつたが最後、言ふ事を言ひ、爲る事を爲るまでは、息もつかされぬ、のは知れて居る。

逃げも隠れもせぬ。

私は言ふ。

(五)

四月八日。春だ。私共の部屋から眺めると、橄欖山が私共の来た時より餘程綠になつたかのやう。朝は蒼い霞が谷を盈たし、日の午には、軟らかい綿の様な春雲が、一つ二つ Belvedere 塔の上を遊ぶ

午餐後、食堂から出る、と其處の客間は、五彩撩亂と絹織物を取り散らして、Fさん夫妻が東方の婦人から織物を買ふて居る。中央亞細亞のボカアラから来たさうな。英語も佛語も分からず、西班牙語で話したが、どうして西班牙語を知つてゐるか、とFさんは後で話して居た。米國の雑誌記者が見て居る。“日本の子供は斯様な美しい色を被ますね”と云ふ。“子供がお在りですか。”“否。”此處にも、また子なし夫婦が居る。

午後ソロモン神殿の模型を見にゆくつもりで出かけたが、所在が分からぬ。Hさんを訪ふ。カアキイ兵士が二人、話して居た。赤

十字の肩章をつけた濠洲兵士。エルサレムでは、英語を話す者が少ないので、英語を話しに來ました、と兵士は笑つて居た。

兵士達が去つた後で、私共は少し話した。持參の朝鮮餡を少々Hさんに贈る。Hさんが瓶に挿してあつた中から、淡紅の薔薇と、マアガレットを少々ぬいて妻にくれた。

私は語した。“露西亞の病院、英吉利の患者、米國の醫者、濠洲の看護婦、而して日本の見舞客、随分萬國的ですな。”私は一つ落した。而してバレスチナの地。

歸つて茶を飲み、少し書き物をし、夕方屋上にのぼる。風が少し冷たいが、夕景色が美しい。燕子が數限りなく飛び交ふ、ちち、ちち、と呼びながら。エルサレムの燕は全く名物の一つである。エルサレムには鳩も飛べば、雀も飛ぶ。稀に鶴も舞ふ。然し燕の夥しきに比すべき何ものもない。日の夕、何處から出て來て何處の巢に歸るか知らぬが、エルサレムの城上一面蚊の如く群れ、而して燕の如くといふより外に形容のしやうもない散りやう舞ひやうをする。私共は毎日の事だが、其度毎に、彼等の飛翔の譬へやうもない美にうたれる。何の爲にああ舞ひ翔るの乎。何の要もありげでない。飛ぶが面白、翔けるが嬉しくて、飛び翔るやうに見える。遠きは蚊頭の一筋、近きは白い胸を見せて、ちちちちちちちとかけ聲をしつつ、何萬何千萬と云ふ數知れぬそれが、水色の空から城へ、城から空へ、山から塔へ、塔から山へ、稻妻の如く閃めき、磔の如く落ち、夢の如く輕やかに、想の如く速かに、光線と射、音波と揺らぎ、ま

ことに快い舞の限りを見せる。あの夥しい燕が、あんな自由な全速の飛翔をして、唯一の撞着衝突もなく、自づからにして反れ、驟はし、綽綽として餘裕があるのは、全く驚嘆の外はない。恒砂の数のあの星、限りない星雲の夥しきを、何の苦もなく宙宇にふり廻はして自在無礙の其手が、あの燕をああ飛ばすのだ。人類の世界的舞踏も、ああありたい。Democracyの飛行藝術は、あなくてはならぬ。それは、一個個がそれ自身に全己であるからだ。合はせやうとする音楽は、合はぬに終る。私共は日日見馴れて、今夕もまた今更のやうに此夥しい燕の體で譜を描く大樂曲に見とれる。

夕はいよいよ進む。死海の向ふの山は淡い、夢のやうに。高塔聳え綠豊かな橄欖山、一本の棕櫚を前景にして、圓屋根、鋒屋根、平屋根の高低參差としたエルサレム、皆美しい。私は妻に曰ふ、先日俺はエルサレムがいやになつて、早く立たう、二度と來まい、と思ふだが、矢張エルサレムは美しい都だ。

全くエルサレムは美しい都だ。

耶蘇が“エルサレムよ、エルサレムよ”と愛し嘆いた筈だ。

風が冷たくなつたので、私共は下界に下りる。

廣間を通ると、Fさん夫妻が呼びとめて、先刻買った絹織物を見せる。Gownになる短尺物の色色絹、娘の帯にして好いやうなものもある。あるものは、刺繍してある。F夫人は、銀糸の浮いた美しい緑の厚織を買つて居る。15 磅程のものもある。

F夫人は、Mosque of Omarの水彩スケッチをして居る。一通

りのもの。ナイルで描いた Luxorのは、更に好い。

私共は、カイロで買った Autograph bookを出して、夫妻に名を書いてもらう。名刺に筆で私共の名を書いて贈る。筆や硯や墨がFさん達の興味をただならず牽き、Fさんは一挺五圓の墨の値段に少し驚いて居た。F夫人は、署名の傍に、筆で Mosque of Omarの小さなスケッチを描いた。

妻は、出發前、私共の懇意な若い畫家、渡さんに描いてもらつて來た扇子の中から、子守娘の一本を取り出し、署名して、F夫人に贈つた。其返禮に、Fさんが、ベテレヘムみやげだと云ふて、“死海の石”と蓋に刻むだ、小さな黒いものをくれた。香爐か、と思ふたら、インク壺であつた。

夫人には、畫の道樂がある。あなたのは、と問ふたら“若い時は、Cricketが好き、銃獵も好きでした。今は年が寄つて、妻の鎖につながれて、彼女の往きたい所に往く位のものです。”とFさんは清らかな老顔に、軽い苦笑を浮べた。

* * *

四月九日。Hさんが日本の新聞を持つて來てくれた。Autograph bookに署名してもらふ。十三年ぶりに會ふたと云ふ其“meet”を“meat”と書いた。俘虜の四年間におりおり嘗めさせられた飢餓の苦が、此一字にあらはれて、胸が痛い様であつた。“新春”や“みみずのたはこと”を出して、私共の家や、書齋の挿畫を見せた。Hさんは、私が鐵を持つて立つて居る百姓姿を殊に喜んだ。Hさんの阿父は、

英吉利の農夫で、Hさん自身も、エルサレムに来て菜園などよくやつた。此邊の者は浮誇で、土仕事などする處を見られるを恥とする風があつて、自分が畑仕事でもして居ると、皆が笑ふ、とHさんは憤慨して居た。

三月目で日本の新聞を見る。母の死について、思ひがけない人が死んで居る。普通選挙が問題になりかけて居る。エルサレムに来てから、新聞を見ないから、歐羅巴の事も却て月おくれの日本の新聞で知る事が多い。クレマンソーを暗殺しかけた者がある。獨逸は傲慢で、露西亞は憎憎。世界の何處を見ても、われがちに騒いで居る。上海から書き送つた私のたよりが出て居る。

夕方、先刻Hさんの話に聞いた幻燈を見に英吉利會堂に行く。それは Cathedral ではなく、つい下の通りを Banco di Roma の方へ折れ曲つた處にある、小さな會堂であつた。少し早過ぎたので、ぶらぶら庭を歩く。薔薇やゼラニウムが咲いて居る。紫の Iris は、私共に郷國の初夏を思はせた。

私共は會堂に入った。Hさんも來た。カアキイの若い兵士が大部分、婦人や子供で、大きからぬ會堂は、一ぱいになつた。

パイプオルガンが鳴る。皆が起立して讚美歌を歌ふ。短かい演説。祈禱。それから幻燈が始まる。

最初はテベリア湖畔の景。それから耶蘇が出て來る。席が後方にあるので、私には映畫がはつきりせぬ。説明の言葉がよく聞きとれぬ。讚美歌の文句が、Screen に映される。それは私にもはつきり

讀める。兵士も子供も女も、皆起立して、其文句を歌ふ。其内

“Jesus, lover of my soul,
let me to thy bosom fly.”

と云ふ文句が映されて、皆が異口同音に歌ひはじめた。

私も萬更讚美歌が嫌ひではない。好きでよく歌ふ歌もある。然し其大部分は、文句が氣に入らぬ。“Jesus, lover of my soul”なんかは、女なら知らぬ事、舉丸をもつ私には、自己麻痺でもしない限り所詮歌へぬ。

私は突と立上つて叫びたくなつた。

“馬鹿！やめろ！兵士達！モオゼは、殺すなかれ、と云ふた。

で君達は、兵隊なぞになつて、獨逸人土耳其人を殺すのだ？耶蘇は互に相愛せよ、と云ふた。何で君達は、自分の國で自分のしたいやうにふるまう土人を射たりするのだ？女達も、何で眼を細くして、口引張つて、名ばかりの基督に戀歌を歌ふのだ？十字架の時代は過ぎた、と知らないか。”

然し、私は黙つて、會の果てる迄、硬い木欄にかけて居た。

(六)

四月十日。妻にベテレヘムを見すべく、馬車で出かける。ヤツファ門を出て、停車場を右に、南西に奔る一路は、坦坦として好い道路だが、白い塵埃が雲の如く舞ひ立つのは、惜しい。朝曇りして

風が冷たく、私は合服の上に同じ外套を被、妻は私の夏外套を着て居る。死海の方を見晴らす處に來たが、今日は珍らしく其處に霧があつて、茫として居る。所謂ラケルの墓を過ぎて、エルサレムから約一時間にしてベテレヘムに着く。

貝細工屋が引とめるを、歸途にと手をふつて、狭い巷路を馬車は誕生寺の前に止まる。

私の柏谷の門よりもつと低くて狭い、耶蘇が“より入れよ”と云ひさうな窄い門、門よりも口が、先づ私の眼を牽いた。此前氣をとめなかつたものである。これは、回教徒が誕生寺内を市場にして、牛馬家畜をわざと寺内に引き込んだりした爲に、十字軍の人人が向後牛馬の出入を出来ぬやうに斯くしたのだ、と後で案内者は云ふたが、何れにせよ、此寺には尤も適當な象徴的な入口である事は争はれぬ。“窄き門より入れよ。”而して人の生れ出づるも、窄き門からである。胎内寶とも云へやう。此窄い口が、即ち誕生寺の一番好い象徴である。

身を俛めて、其口から私共は入る。中の單純にして然も雄大な意匠が、あのやかましい綺羅々らしい Church of Holy Sepulchre よりも、遙に私共を悦ばせる。ざらりと立並んだ大理石の柱、潤大な鋪石、屋根の梁木、仰ぎ見る天井の金のモザイクは剥げて、少なくとも千五百年の昔の面影を残して居る。

若い土人の案内者が來たので、それに色々案内さす。近づいた復活祭の用意に、僧の幾人か燈明の盡を掃除したり、油をさしたり

忙しさうに立働いて居る。黄水晶のやうな橄欖油の燈明が美しい。私共は細長い蠟燭をつけて、誕生の洞に下り、所謂 Bethlehem の星、白銀の星紋晃晃とした所謂誕生跡を見る。それから所謂耶蘇の身代りの孩兒達の墓や、聖ゼロオムが卅三年住んで、希伯來聖書を Latin 譯したと云ふ洞を見る。其妻と娘も此處に葬られて居ると云ふ。昔の槽は繮馬に移されて、今は大理石のが置いてある Virgin の井と云ふのは、潤れて居た。

私は、ナザレで生れてナザレに長じたナザレつ子、と耶蘇を思ふ。然し此誕生寺は悪くない。ダビデの故郷、ルツの舞臺、兎に角ベテレヘムは、なつかしい處である。

私共は寺を出て、みやげ物を賣る店に往つた。先刻の案内者が跟いて來る。彼は商人でパナマ運河に五年居たさうだ。戦争中、無理に土耳其兵士にされたが、輜重兵で銃はとらなかつたと云ふ。

妻は此處で綠玉の頸飾を 300P で買つた。少し硝子玉めいて居るが、碧綠玲瓏と美しいもので、妻は大慶して居る。それから他に少しみやげ物など買つたので、持合はせが不足し、溢る馭者に 50P 借りて、拂を済ます。

先の貝細工屋の前まで來ると、出て來た主人に、馭者は“もう此客は文無しだよ”とでも云ふやうな言を云つて、さつきと通り過ぎた。而して勝手に若い土人の便乗者を一人馭者臺にのせた。而してホテルに歸つて大きな紙幣で拂ふものを拂ふと、立替の利子と云つたやうに、10P の Baksheesh を天引して、つり錢をくれた。

夕食前に、Fさん夫妻と話す。明日からダマスコ見物に往くさうである。妻はお茶の水女高師で、生徒としては菊夫人の母堂に裁縫を習ひ、教生としては嬢さんに教へた事もあるので、其事を話したら、Fさんは縁の偶然ならぬを悦び、嬢さんの出来は如何であつたか、父の女らしいものがあつたか、と問ひ、よく出来た、と聞いて更に悦んで居た。Fさんは、女中の撮つた小さな寫眞を數多私共に見せた。ただの女中でなく、Fさんも“私共の友”と云ふて居る。私共は英文不如歸を夫人に贈つた。而して“新春”や“みみずのたはこと”の縮冊を見せた。F夫人は別して“新春”の表紙の鮮麗にうたれて居た。而して土耳其菓子くれた。私共の朝鮮餡に綠豆をぽつぽつ入れたやうなもので、悪くない菓子であつた。

其 四 新 春 日

(一)

四月十一日。箆筒のトに立てた剝曆を見ると、今日四月十一日の面に、“新春。母の九十一誕辰。”と私の筆で書いて居る。昨年の暮、粕谷で、出立前の用意に、買つて来て、私共の結婚日、誕生日、父の命日、などと共に、今一年中の記憶すべき要項を豫じめ書いて置いたのだ。“新春”は今日で満一歳になつた。然し母は五十三日前に死んだ。二月十八日から五十三日生きて居たら、母も満九十歳、九十一誕辰を迎ふる筈であつた。今日を知らずに書いた私。其様な事も何も一切知らずに逝いた母。やはり私共は神でない。人間であつた。さうだ。私共は被造物である。造物ではない。部分である。全體ではない。子である。父ではない。“父とわれとは一也”とまでは上り得やう。然し“我は即父也”とは所詮僭上である。耶蘇は人間意識の達し得る最高所まで上つた。私は斷言する。人間が進化の絶頂に達しても、生命の本源に對して、父子以上には決して進み得ない。さうだ。私共は人間だ。神の子だ。神の子に許さるるは、父を讚美する事である。父の讀ます書を読み、父の心を知り、其旨に遵

ふて働く事である。人間に許さるる事は、相愛し相宥す事、悔いて改むる事、此外にはない。私が人である如く、母も人であつたのだ。私は唇の自題を熟々眺めて、悵然とする外はなかつた。

(二)

然し今日は新春 day である。

午前十時頃、部屋で書きものをして居ると、街上俄かに物騒がしい。私は妻と小客間のバルコニーに急いだ。此處はヤツファ門の内外を見るに恰好の場處である。唯見てあれば、門を入り来る白旗赤旗すべて七流。それには亞刺比亞文字が刺繡されて居る。太鼓が四人、鏡鼓が七人。平太鼓が一人。たたき連れ、鳴らしつれ、勢込むで囃し立つると、白い頭巾に色さまさまの鉢巻きして、牛皮のやうな粗袴を被つた赤黒い顔のアラブ男が、幾百となく手を拍きつれ、歌ひながら進んで来る。手に杖を持った長老が五六人、まゝを待つた、待つてくれ、とそれを押し止めるかのやうに、時々踏むでは両手に杖を擧げて、其進行をとめるやうにする。構はずそれを追ひ捲くるやうに、勢猛に進んで来る。見物の男女も、前になり、後になり、わいわい押し寄せる。

私はカイロの埃及人の示威運動を想ひ起した。

此は示威運動か。それとも祭なのであらうか？

歌ひつ、囃やしつ、留めつ、まくりつ、騒騒しい行列は次第に

進んで、私共が立つバルコニーの直下を過ぐる。見れば、群の中に、血氣盛な男が、長劍をぬいて、劍の舞を舞ひながら行く。数分後には、行列は狭い market の通りを賑やかに mosque of Omar の方へ消えた。

新着の手紙を持つて、Hさんが来た。今日は、回教徒の祭日で、あの行列は、神殿の廣場に練り込み、それからエリコに往つて、彼等が所謂モオゼの墓に詣ると云ふ。事ありげな風説もあり、勿論英吉利官憲が抑へて居るから大事もあるまいが、今日は外出をお見合はせなさい、と注意して、Hさんは歸つて往つた。

耶蘇の復活祭は、もう直ぐだ。

猶太人の逾越節も、同時に行はれる。

それを押つかぶせて、回教徒の祭が、いや先にはじまつたのである。

(三)

祭の行列は、過ぎて往つた。

あとは、静かな春の日。

本當に、今日は春だ。橄欖山上には、眞綿のやうな嫩らかな雲が浮いて居る。橄欖山腹の縁も、染めた様に縁である。千萬の燕が、これも人に競ふて、祭禮らしう飛び交う。

一軒置いて向ふの平屋根に、十六七以下の女學生が、淡紅、白、水

色など、五六人出て来て、Two steps を踊つて居る。稚子鬻の様なリボンをかけた、白い服の、八九歳の小さな女生が、十五六の丈の高いのと、相抱いて Waltz を踊る。皆が、燕其もののやうに、軽い。それが私共の眼を悦ばせる。

春だ。新春 day だ。

(四)

私共の室のバルコニイの直ぐ下で、歌聲と、拍子の揃つた足音がタツタツと響いて来る。急いで覗く。少年隊の行列が、今正に狭い巷路を通るところだ。お祭に行く回教少年の一隊 Boy Scout の類であらう。先頭に男二人、緑葉と花で飾つた門形のを捧げて行く。次に赤地に金の亞刺比亞文字の旗が一朧。つづいて太鼓の少年が二人。黒塗の横笛が三人。それから素手の一組が歌ふて行く。先細りの黒棒を、前下りに小脇にかい込んだ少年の一群。十六七から十一二までのが、彼此五十人ばかり、何れもカアキイ服の揃ひで、兜帽を被ふた緑の帛は垂れて肩に波うつ。カアキイ服で亞刺比亞風へるめつとのかぶりものをかぶつた男の指揮の下に、二列を作つて、緑のしこるを波うたせ、タツタツと靴音揃へて練つて行く。凜凜しいつたら、無い。私の心がときめく。白虎隊が頭に浮ぶ。印度洋の船の上で屈強な水夫の群を見ると引連れて海賊をして見たくなつたやうに、此様な兵兒の卵を見ると、引連れて横行して見たいマホメツド魂、成吉へと

斯汗魂、カイゼル魂が、起りさうでならぬ。

兎もあれ、兜帽に緑の春をいただいた少年軍の一隊は、今日にふさはしいものであつた。

確に、今日は“新春 Day”である。

(五)

私共は嬉しい心地になつて、食堂に下りた。而して午餐の食卓には、葡萄酒の盃を妻と合はせて、天上の母と、“新春”の一年とを祝ふた。

午眠。

ど、どど——ん。恐ろしい音して、大砲が鳴つた。

驚いて、私は眼をさました。

先刻食堂に下りた時、帳場の人がHさんの傳言をとりついで。今日は回教徒の行列の相圖に大砲が鳴るから、驚かぬやうに、と云ふのであつた。それで、私共はそんなに驚かなかつたが、やはり少しは驚いた。

私共は、双眼鏡を持つて、屋上にいそいだ。最早先刻のあの大勢の行列や少年軍の行列がエリコの所謂モオゼの墓に着いた頃だらう。其方角を見ても、何も見えなかつた。ヤツファア門の内外も、淋しい事であつた。

然し物物しい砲聲は、ただならぬ感を私共に與へた。英吉利の

飛行機が一臺、今朝からエルサレムの上を往つたり來たり、Mosque of Omar の上を低空飛行したりしたのも、ただ事ではなかつた。聖刺比亞人は、英吉利を扶けて、土耳其人放逐の爲に働いたが、餘勇は何時何處に如何迸り出るかも知れぬのである。

(六)

下りて、緑茶を入れる。

下の巷から哀調が響いて来る。バルコニイから見下ろすと、先刻線の少年隊が通つた直下の巷路を、葬式が来る。第一に棺の蓋を頭にのせた男が行く。金筋で縁とつた黒ぬりの蓋。それから儀杖をもつた男。次に加特力僧が二人、背に銀十字を刺繍した黒天鵝絨の袍を被たのが居る。其後から四人で黒塗の浅い棺を昇いで来る。私共は喫驚した。棺は無蓋で、死顔がむき出しになつて居る。緑葉や紅黄ろい花に埋もれた女の死骸。私にはよく見えなかつたが、妻の見たのは五十左右の瘠せた白い面の婦人で、穏やかな美しい死相をして居たさうな。尼さんであつたのかも知れぬ。少し驚いたが、此は好い風習である。棺の頭部を硝子にしたりして告別さす事はよくするが、埋葬にゆく道すから、すつかり棺の蓋をあけて、日に、空に、道ゆく人にも、思ふさま別れを告げさす事も、なほ好もしい事ではあるまいか。今日の様に悦ばしい新春の日には、葬式さへも喜びを添へる。いや、葬式は本來めでたかるべきものだ。よく送られた生涯の

終りは、悦喜を以て結ばれるが自然である。涙が流れやうとも、それは感謝の嬉し涙であらねばならぬ。

私は母の死骸を見なかつた。然し母の誕生日に、わざわざ棺の蓋をとつて、私共の室の眞下を通つた清らかな婦人の死顔は、私共に何の関係もないものであつたらうか。私は妙な気がする。

(七)

午後六時、私共は復屋上にのぼつた。私は椅子を其處に持ち出した。足踏みして見ると、東西十五間に、南北五間ある。人は來ず、いつも奇麗に乾いて居るので、私共は時々其處に寝ころびながら、星の出そめた空を見上げて、何時の間にエルサレムに來て居るのか、と不思議に思ふ。

春の日が入つたあとのエルサレムは美しい。紫の空が淡紅にぼけ、更に眞珠鼠にぼけ、死海向ふの遠山は、えいやつと見えて居る。白い、赭い、灰色をしたエルサレム、鋭三角の寺の塔や圓屋根や平たい屋根の高低したエルサレム、ぐるりと山をめぐらして少々の樹木を城市にあしらつたエルサレム、燕や鳩の黒白無数に亂れ、さまざまの調子をした寺の鐘が色々に夕を告ぐるエルサレム——要するにエルサレムは美しい。あの田舎者の耶蘇も嘸美しく思つたらう。取蘇はエルサレムを愛して憎み、憎んで然も愛した。獨逸の巨砲を借りて粉微塵にしたいと先日いきまいた私も、矢張エルサレム

を愛せずには居れぬ。

陰曆十一夜の月が銀光を流しはじめた。星がぼつぼつ眼を開き出した。宵の空が美しい、埃及の空程ではないが。西北から冷たい風が吹く。遠くスコパス山の上、近く Church of Holy Sepulchre の邊、瓦斯の火らしい灯が見え出した。橄欖山上には、やや大きな火が見える。それが、見る見る Belvedere 塔の方へ動いて行く。此も回教行列の相圖の火かも知れぬ。

夕は夜となり、私共も屋根から下りる。

(八)

夕食には、また残りの葡萄酒を斟みかはす。

室に歸ると、月も高く空に上つた。バルコイの戸が開いて、其處から月に照らされた一部の橄欖山と、一部のエルサレムが、眼の前に顯はれる。明るい月だ。私共のバルコイの欄干の影が、まざまざと向ふの家に落ちかかつて居る。何處かで、月夜鳥が啼いて居る。

私共は、興に乗じて、讚美歌、俗歌、義太夫の幾くさり、あらん限りを歌ふて、めでたく“新春日”を終つた。

其 五

光明十字

(一)

四月十二日。W.C. に行くと、そこら中、水うつた様に濡れて居る。何の悪戯だらう？ふいと眼をあげると、硝子窓の棧の所に、ぶぶ濡れになつた鳥が一羽とまつて居る。鳩のやうだ。何處から入つて來たか。何でも、天井下にとりつけた不淨流しのあの水槽で行水したに違ひない。眞面目くさつたぶぶ濡れ姿が、私を笑はせた。

室に歸つて書き物をして居ると、耳近くせつかちなかみさんでもわめき散らすやうに噪ましい鐘が鳴る。眼をあげると、向ふの家の平屋根が≡字形をなして居る窪の處の壁つきに、小さな鐘がぶら下つて居るのが、下で綱を引いて居ると見えて、性急に點頭ちんとうしては、忙がはしげに鳴つて居る。それがまた私を笑はす。

(二)

午餐後、屋上へ。

往來向ふの空濠端の低い石垣に、今日は段通商人が店を出して

居る。さまざまの色模様の絨氈が、其石垣に打ちかけられて、買手を待つて居る。赤帽の商人が其一つに悠悠と座はり込んで、永い春日を買手の来るを待つて居る。乞食の子の様な汚ない子供が、美しい氈を撫でて通る。あるひは、負つた重荷を其上に卸して、腰を伸して休むだりする。商人は一向平氣だ。皆が見て通る。極稀に商人と値を論ずるらしい客もある。然し一向賣れる容子もない。其中に、春の血汐を悉くここにあつめたかとはばかり、眼がさめるやうに美しい朱色の妻は欲しがる。値段だけでも聞いて見たい、と云ふ。勿論私も欲しい。が、まだ前途が遠い。先待て、と私は宥める。

此一兩日、私は街からたまらなくなつかしい物賣りの聲を聞く。永らく東京の山の手に住むだ私共は、苗賣りの聲を忘るることは出来ぬ。‘朝顔の苗——胡瓜の苗——松葉牡丹、蝦夷菊の苗。’春も暮れ方の静かな山の手町の空氣を震はして、あの胡弓の弓をきゆうと長く引いたやうな苗賣の美しい聲を聞くと、春逝き夏來る哀切な情調が私共の躰をびりりと震はさずには措かなかつた。其苗賣そつくりの聲を、此エルサレムで聞いた。何だらう？今日屋上から見て居ると、それは餠屋の賣り聲であつた。紅い白い棒餠を、盤臺のやうなものに入れて賣つて居るのだ。先日の朝鮮餠式土耳其餠と云ひ、賣り物、ふれ聲、やはり“近東”は“極東”に近い。東洋は畢竟東洋だ。まづい親類でも、親しい血の感ばかりは、理窟でも何でも如何する事も出来ぬ、それが血にあるから。

土耳其帽、刺繍した陣羽織の襟なのを被、彎つた劍をつるして、

銀頭の杖をついた男が十人許。此儀仗兵の後から僧達が行く。

復活祭が迫つて居る。

(二)

午後は寺の鐘が盛に鳴り出した。私の粕谷の書齋から八の日毎に聞く東覺院の縁日の鉦見たやうに、さあ來い、さあ來い、來い、來い、來い、と云ふやうな人寄せの鳴り方をする。佛教耶蘇教に區別はない。要するに縁日なのだ。

夕方また屋上。月が出て居る。然し今夜は少しおぼろだ。風は無く、暖かで、理想的なおぼろ夜だ。私共は持參の夏膝掛をたたきの上に展べて、仰向けに寝ころぶ。エルサレムの屋根の上で寝て居ると思ふと、可笑しくもある。粕谷の巢は鼠や雀に任せて、此様な處に納まつて居るのを、お月様が笑ふでせう、と妻が曰ふ。粕谷も、エルサレムも、旅と云へば旅、家と云へば家なのだ、と私は答へる。美しい夜だ。私共の枕もとで、虫が鳴いて居る。

エルサレムに、ちらほら灯がつき出した。

“十字架！十字架！御覽なさい、お墓の寺の頂邊に！”

突然妻が叫び出した。

起き上つて、其方を眺める。

お墓の寺の、小さい方のドオムの頂に、光の點を連ねて、正しく十字架が燃えて光つて揺いて居る。

美しい十字架!

“十字架の時代は過ぎた”と宣ぶ私の眼も、それを美しと見ることは禁じ得ない。南支那海に、印度洋に見た南十字より、人間の細工だけに、形が好い。

見て居る内に、十字架の光明は、瞬たき揺いで、時々缺けたりする。光が明滅するは、瓦斯を風が消すのであらう。人が上つて、それを兎や角する様が、夜目にも黒く見える。折角つけたのが、消えはせぬか、と氣が揉める。

私共は、良久しく、其あぶなかしい美しい光明の十字架を眺めて居たが、終に夕食に下りた。

(三)

本當に春の宵だ。眠むたげな月の和らかな光が、空を、山を、谷を、エルサレムの家と云ふ家を、一つに融かして居る。暖かい空氣が、生類の血を温める。われも人も、歌ひたくなる。踊りたくなる。下の街巷には、歌聲が賑やかである。樂器の音もする。蓄音機も鳴つて居る。

私共も、室内の椅子に相對して、知れる限りを、次から次ぎと唱ひつ、和しつ、興に入る。

誰やら、コツコツ扉をたたく。直ぐ、六十近い紳士のにこにこした顔が現はれた。而して間違へたと云ふ風をして、笑つて一體して引

下つた。一兩日見受ける快活な爺さん。客間のピアノで、さまざまの手を弾いて、青年に教へたりして居た。私共の陽氣な歌調が、其道の數寄者を嫉つたのだ。

船上 星夜 獨座

われを教へ われを導き いくしむ
父の なさけ に 背むかめや われ

其六 聖週日記

* *
* 日 *
* *
* *

棕櫚日曜

(一)

四月十三日。今日は棕櫚日曜日である。耶蘇がエリコの方から橄欖山を経てエルサレムに驢馬に乗つて入ると、田舎から祭に上つて来た人人が衣服や木の枝を路に敷き、棕櫚の枝を手にとり持ちて、“ホザナよ、主の名によりて来る者は福也、イスラエルの王は福也”と異口同音に歌ふて囃した、其日を記念の日曜である。それから、十字架を経て復活に到る一週間を、聖週或は受難週とも唱へて居る。今日は、其一週のはじめの日。

朝物見に屋上にのぼる。曇つて居る。新しい可愛い靴をはき、淡紅や白の新しいボンネットをかぶつたのや、淡紅色の絹の服に白い靴の揃の三人姉妹、男の子もきりりとした、すがすがしい装、すべて今日を晴れと着飾つた重に白人の小供達が、或男の子は自分の丈より高い棕櫚の葉を両手にささげ、或者は面白う編んだ棕櫚の葉を

持ち、或少女は真紅の薔薇や緋のカアネエジョンを結ひつけ取り添へた棕櫚の葉を持ち、ある者はまた橄欖の小枝を持ち、嬉喜としてお寺へ行く。姉に手ひかれ、父の腕に抱かれて居るのも、皆橄欖の小枝か、紅白黄紫とりどりに美しい花をとりつけた棕櫚の葉を持つて居る。それ等が、今日も店を出して居る絨氈商のさまざまに美しい氈をうちかけた低い石垣の前を、次から次と過ぎて行く。花が花を持つて花の前を流るるやう。

私共もうかれ心地になつて、十時頃、先夜幻燈を見た近くの英教會に往つて見る。太鼓喇叭で、靴音整然と、一隊のカアキイが、會堂にねり込むて来た。内を覗くと、例の通りの禮拜でありさうなので、私共は Church of Holy Sepulchre に往く。

此處の内外は、夥しい人である。正装した僧達が、手手に棕櫚の葉を持ち、歌ひながら墓御堂の周圍を廻はつて居る。多くの Base の中に、子供の甲高い聲が著しく響く。寺も美しくなつて居る。見物も美しい。水色、淡紅、白、緑、茶など薄絹の頭巾した猶太乙女。紫天鵝絨の服、寶石を晃めかした十七八の娘の白い顔が、ほの闇い堂内にくつきりと浮み出る。棕櫚の葉で小さく揃ひの十字架を作つて臂にさしてゐるのは、看護婦の英米婦人であらう。尼さん達は、今日は光る黒絹の下に濃紫をかさね、雪白の頭巾の清さ。シリア人の娘達であらう、ミツシヨンスクールの少女等が、空色の揃ひの服で、尼さんに連れられ、うれしさうに通る。花やかな棕櫚日曜。

私共は階段を上つて、所謂カルブライイに來た。下の雑沓をはな

れて、此處は人氣なく、燈一つついて居ない。私共はマリアの像のあたりから、鍵の手に折れた、壁つきの、細長い大理石壇に腰を下ろした。背後には、Stained Glass の窓がある。薄暗さと、大理石の冷たさが、疲れた私を癒はせる。下からは、お墓をめぐる甲乙兩音の歌や大勢の靴音が響いて来る。妻の父は非常な曇がりて、鐵の寢臺に裸で寝たい、と口癖のやうに云ふて居たさうだ。此大理石の上だと、大慶だつたらう。

私共が薄闇がりに腰かけて居ると、眞黒に包まれた四十ばかりの女が一人階段を上つて來た。びつたり頭を床につけて、十字架の耶穌を拜んで居る。しばらく念じて立上り、更に身を俛めて、十字架の跡の壇下に這入り、其穴に Kiss をする。如何にも子の側はなれがたなに見へたが、やつと聖母マリアの像の前に来て、臺に垂るる覆をかかげて、星に接吻し、像を見上げてちよと右の手をわが額のあたりにあげて、十字を切る。マリアの像のほとりにある十字架に、今日は紫繻子の袋をかけてある。女は其臺に額押しつけ、跪いて祈念を凝らすのであつた。戦争の十字架に子を献げた後の母マリアであらう。女が戀戀としてやつと思ひ切つたやうに階段を下りて去ると、今度は十一二の端正な貌した男の子が、蠟燭を持ちながらやつて來て、マリアの像の前なる臺の被ひをかかげ、顔を傾しげて其星をキスして去つた。次はカアキイ姿の大の男。しばらく膝を折つて、拜して行く。十五六から八九歳までの女兒の一群は、マリアの寶石に見とれて往つた。それから母に連れられて七八つの少女が

來た。母がする通りに足つまだてて、マリアの臺をキスし、それから一二間うしろ退りに退つてから、又跪いて十字を切つて、見返へりがちに往く。妻は深い感動を以て眺めて居た。

“本當に、西洋の小供は、阿母の乳と一緒に宗教を吸ふのですものね。”

と彼女は嘆つのであつた。

私共の間に見る眼を、皆氣づかずに去つた。私は、じれつたい氣がしてならなかつた。此マリアと云ふ女、生世の中には其子を信ぜいせよず、死んであまりに崇められ過ぎる。

“あのお母さんね、マリアね、あれは少少馬の字だつたね。”私は妻に云ふた。

“全く人の良い、平凡な女でした。”と妻も云ふ。

私は連りに欠伸をした。

突然妻が泣き出した。

闇いカルブライに時がやや立つ。

私共は立ち上つた。而して十字架の跡に來ると、私は跪いて其十字架の跡と云ふ銀縁の孔に、右手をさし込んで見た。勿論何ものがあるでもなかつた。それから、マリアの像の前に来て、熟と聖母の像を見る。やつれて眼が凹み、劍が金の心臓を貫いて居る其像は、珠玉や金で飾られてあるだけ、傷はしい。少少馬の字ではあつたが、矢張母は母だつた。

俄かに歌聲が耳近くなつた。

石欄の邊まで往つて、見下ろす。先刻お墓を廻つて居た行列が、直ぐ下にある大理石の平臺を、歌ひながら廻つて居る。十字架から取り下ろした耶蘇の體に膏を塗つた跡、と云はれて居るその臺である。ある僧は、手に提げた香爐を右や左に振つて居る。儀仗片手に、彎つた長劍を吊した儀仗の武士數人、其後から右に小さな十字架を捧げ、左にきらきりと重さうな杖を持つて大僧正が来る。聳えた帽、金銀珠玉や刺繍で全身光り渡つて居る。その後から黒髯の若いのが銀袍で来る。歌ひながら膏石を廻つて、行列は出て往つた。

私共も近道からホテルに歸る。到る處笑顔と可愛い聲とで驕喜をエルサレムに満たす子供を見ると、私はこう云ふを禁じ得なかつた。

“うれしいさ、可愛がつたのなもの。”

(二)

夕方また屋上にのぼる。今夜は、Church of Holy Sepulchre の上に、昨夜見た十字架の燈明がない。雲が一ぱいかぶさつて、風が寒い。然し私共は屋上に散らばつて居る木の柵や物干の綱などを取り片づけて、二人で屋上を跑け廻はり、踊り廻はつた。“ホザナよ、父に遣はされて來た我等夫妻は福である。”

* *
* 月 *
* *

赤帽を脱げ

(一)

四月四日。月曜。バルコニイのカアテンをひいて見ると雨が降つて居る。今朝降り出したものと見える。エルサレムの雨！私は此前、五月から六月にかけ、三週間程パレスチナに居たが、一滴の雨にも會はなかつた。

剥曆の記入を見れば、十三年前の今月今日、私は獨順禮行の途に上つて居る。

雨は終日續く。時時は向ふ隣の平屋根にもんどりうつて雹が降つた。雹がびかりとして、砲聲ならぬ雷さへも鳴つた。雲間から、日が出やうとすると、それを打ち消すかのやうに、遽ただししい驟雨が來た。耶蘇とマホメツドの争を見るやうに。

(二)

雨に垂籠めて、マホメツド傳を読む。エルサレムで買ったパレスチナ新案内記に出て居るそれ。そして色色の事を思ふ。

私はコランも読んで居ない。回回教について、もつと知りたい。都合によつては、汽車もあるから、メツカにも往つて見やうかと思

ふ。然し、其必要は無ささうでもある。

マホメツドの宗教は、敵愾の宗教である。敵愾の宗教。憤激の宗教。其弟イサクの母なる正妻サラの爲に母諸共父の天幕を追ひ出されたアブラハムの嫡庶子、イシマエルの宗教。智慧者で母の愛を得て居る弟ヤコブの爲に家督をとられたイサクの子、實は伯父イシマエルの生れ變りのエサウの宗教である。皮を剥げば殺氣と婦人に對する尊敬の欠乏が、其宗教の基調である。正でなくて権。嫡でなくて庶。怒と嫉妬が、正統を狙ふて居る。これが回教徒の猶太人や基督に對する態度だ。砂漠の人は、氣の毒だ。然し變は終に正ではない。“天下惡乎定？定于—。不嗜殺人者能—之。”” 柔和なる者地を嗣がん。”で、“殺”は世界の一統者にはなれぬ。或時、或處に、或必要の爲に、或人が生れる。マホメツドもそれで生れた。砂漠の心を一の神にまとめするには、必要な使者であつた。然し世界は成長する。而して異なる時代は、異なる必要が異なる力を求める。必要と云ふ名の下に殺を認め、婦人を大切にしない宗教は、新天地の宗教にはなり得ない。基督者と稱しても、女を愛せず殺人を行ふ人間は、基督信者ではない。マホメツド信者である。

マホメツドの時は、己に過ぎて了ふた。

回教諸國（或は基督者と唱ふるマホメツド信者）は、マホメツドを脱けなければ、必亡ぶる。私は曾て謂ふた、朝鮮の復活は、白衣脱ぎ捨てにはじまる、と。私は今日ふ、近東諸族の復活は、土耳其帽の赤帽を脱ぐ時にはじまる、と。

* *
* 火 *
* *

模型の神殿

(一)

四月十五日。今日は晴れた。世界の平和に關する公開狀を書く。

それから私共はつい近くの神殿模型を見に往く。もとで印度人と知つた一紳士が、私共の爲に説明の勞をとつてくれる。先づ埃及を出てから曠野の旅に建てられた最初の幕屋の模型から始めて、ソロモンの神殿、ヘロデの神殿、今のオマルのモスク、皆揃ふて居る。幕屋の屋根に狸の皮を張り、ソロモンの神殿に、昔の幕屋其ものを内陣に圍ひ、ヘロデの神殿に婦人の參拜所の潤くて好い位置を與へられて居るのが面白い。羅馬人の時代に、ジュピターと云ふて女の像を神殿の跡に座せたり、東羅馬時代に十字架形に建てられたアクサ會堂 十字架の頭を回教徒が破毀して残りを自家用にしたり、色色眞面目な惡戯が、私共をほほ笑ませた。全く人類は子供で、一切が兒戯の心地がする。木造の模型は芝居の書割の様に取りはづし自在で、石垣水溜や市場の位置などの時代と共に色色の變化が、説明者の手と舌とで如實に示される。此はエルサルレムに住んで神殿の研究と模型の製作に五十年を費やした獨逸人 Dr. Scheck の作で、作者は十九年前に没したが、其餘惠は私共にまで斯く及ぶのである。十三

年前、私は此模型の見物を勧められたが、見なかつた。

説明者は、軍隊に出て居る自身の兄弟が、印度に歸るので、坡西土に別れに行く、と云ふて辭し去つた。あとは青年の米人が受持つ。

見料十志を拂ふて歸る。

(二)

歸途、ヤツファ門外が夥しく賑やかだ。人立ちの方へ往つて見ると、それはアラブが踊つて居るのであつた。群衆の真中で、豎笛を一人が吹く。それに合はせて、七八人の一組が手振可笑しく踊つて居る。劍を抜いて舞ふのもある。土乃のキリン踊を思ひ出す。四月十一日から、十八日までは、回教の例祭ださうな。猶太人の逾越節、基督者の復活節、皆丁度同時に行はるので、エルサレムは、色色の祭禮氣分が、ごつちやになつて、賑やかなことだ。何の祭禮が、一番神様の思召に叶ふであらう？

今日神殿の模型を見た時、贖罪の献物が、小さな人形や牛羊の形で示されて居るのを見て、今更の様に思ふた。舊約の神様は義、猶太教は計算の上に立つ。復讐、戦争、訴訟、喧嘩、はそれから起る。日本がまさに古昔の猶太だ。昔の選民、以前の神國、よく似たものだ。義によつて立つ Square な猶太精神。それを打破つたが耶蘇である。耶蘇は無計算、無賠償、“憐憫を好むで、祭祀を好まず、” 誠によれる自由、愛に由る生命、を與へた。然し氣の毒な事には、彼は十字架に死ぬとやがて、所謂弟子の一人によつて掩はれてしまつた。

それはパウロだ。彼は自分の罪を高調するあまり、耶蘇の十字架を高調してしまつた。耶蘇を二千年近く十字架にかけづめにした張本人は、パウロである。而してパウロは皮をかぶつた猶太教徒だ。パウロの罪は、イスカリオテのユダより遙に重い。ユダは耶蘇の隈どりになるが、パウロは似而非者のまぎららしいものを以て、目くらがしをする。耶蘇の上に自分を押し立て、耶蘇神社の入口に保羅祠を建てて、昔アブサロムが父ダビデの人望を横どりしたやうに、不知不識參詣を奪ふて居る。庇を假して母屋をとられるとは、此事だ。パウロもマホメツドも、似たやうなものだ。出過ぎ者の孔雀衣を引剥ぐ時が來た。耶蘇の直弟子は、耶蘇の復活を説いて、十字架を高調しなかつた。それを高調したのは、パウロだ。猶太教義の逆襲である。而して二千年來の徑過を見ると、基督者よりパウロ者の方が餘程多い。耶蘇は女が好きであつた。女を恐がつたのはパウロだ。私はあのしたり親の推參者を想ふと、腹が立つてたまらぬ。

(三)

夕方屋上へ。日は入つて、死海の方は霧がかかつて居る。其霧の中に圓い赤いものが薄つすら影のやうに見えて居る。それが段段はつきりして來るのを見れば月、しかも満月であつた。赤提燈のやうに大きい眞赤な月。一本の棕櫚と赭屋根の家とを前景にした其赤い月は、美しいと云へば美しく、而して矢張凄い。

夕食後、妻の主張で、また上る。月は最早空高く銀光を漲らし、橄欖山は黒く近近と寄つて見える。ゲツセマネの園の見當に、燈が一つ。ちつと立つて居ると、低い、然しはつきりした虫の音が聞こえる。何處か、この屋上で鳴いて居るのだ。向ふの家では、樂隊が賑やかに奏して居る。

* *
* 水 *
* *

聖母の墓

(一)

四月十六日。朝食後また屋上。少し寒いが、美しい日だ。透明で、光る碧空。埃及の空の様に美しい。

室に歸つて、公開狀を書き更める。

書いて居る内、來客。Shelley と云ふ五十左右の英國紳士。赤十字に働いて居る人で、エルサレムの英國商業會議所名譽書記。昨日神殿模型の處で私共を見かけ、それで來訪したのだ。エルサレムに日本商品の見本を欲しいから、東京商業會議所に手紙をやつてくれと云ふ。筋違ひだが、紹介するだけは怪しうはあるまい、と思ふので、諾。それから少し宗教談。Sさんは基督再臨信者だ。此程の戦争と云ひ、西洋に不信者が多くて、東洋に却て信者があるのも、其一つの證據だ、と云ふ。然し再臨までには、此エルサレムでまた一戦争あ

ると云ふ。Sさんの言ふままに、聖書を出して来て、其指示するザカリアの十四章、使徒行傳の一章を、小學一年生の讀むやうに私は音讀した。何れも耶蘇再臨に關したもので、あの肥大漢のFさんが云ふたのもそれだつた。Sさんは、第二の基督は猶太人から出ない、Zionist Scheme などは嫌いだ、と云ふ。再臨に關する小冊子をくれて、Sさんは歸つて行つた。

(二)

午餐後、私共は歩いてゲツセマネの園に往つた。橄欖山の麓、土塀で圍ふた靜かな園である。私共は其東の門から入る。フランシスカンの老僧が迎へて、來訪帳に名を書かせる。八本の橄欖樹は、皆ふるいもので、空洞になつたのには、石をつめてある。樹樹の間は花壇になつて、色色の花が咲いて居る。橄欖のあるものは、千年以上のものと見られる。或は耶蘇の時からのものでないとも限らぬ。老僧は落ちた橄欖の葉を私共の爲に拾つてくれ、また三色すみれやストツクスの花を妻の爲に摘んでくれた。老僧に10P、園に働いて居た土人の二人に2P宛やると、皆喜んだ。其處にある棘槐——基督の冠はりあんどゆの荆と稱する——が、眼もさむるばかり鮮やかな緑をかぶつて居るのが、力強い新春を見せて、私共の心を悦ばせた。老僧は私共を送つて出て、門口に近い石垣の石柱の一部を指して、ユダが耶蘇を接吻した處と教へ、向ふの石灰岩を指して、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、の

三弟子が眠った處と教へてくれた。

私共は園を後にして、先日 Belvedere 塔を見に往つた時の徑をとつて、橄欖山の中腹にのぼり、乾いた水落の石に腰かけて、持参の Orange を食ふ。土人の子がぶらりと通りかかり、持つて居た薔薇の一輪を妻にくれた。Orange をやつたら、喜んで早速それを食ひ食ひ上つて往つた。

此處からエルサレムを見ると、閉された金門外の墓が甚見つともない。移されねばならぬ。

(三)

やをら立つて山を下り、所謂聖母マリアの墓を見る。それはケデロンの溪橋の東詰にある。此前の順禮行に、私が見なかつたものである。往還から石段を下りて、寺の口に出る。それから四十七級の大理石階段を下つて、二十疊敷位の石壘に出る。眞暗な地下の院である。光がぱつと射して來た。唯見ると、英吉利婦人が一名、義足の英兵が一名、蠟燭を手にして奥の方から出て來た。兩人が段を上つて去ると、あとは闇くなつた。番僧が細長い蠟燭を二本點して、私共に持つて來てくれる。其光を便りに、案内僧の後から、右に折れて奥の院に、マリアの墓と云ふ大きな石棺を見る。棺の上には幕が垂れて、燈がほのかに其處の暗を照らして居る。傳説によれば、聖母は使徒達によつて此處に葬られ、其後で昇天したと云ふ。

寺の創始は五世紀の頃で、それから幾度か破壊され、建直されて今日に到つて居る。此地下の院には、聖母の墓の外に、耶穌の父ヨセフの墓、マリアの父母ヨアキムとアンヌの墓、それから耶穌の汗が血の如く滴り落ちたと云ふ洞や、如何はしいものも色々ある。それらは別に私の注意を牽くに足るものではなかつた。私の注意を牽いたものが一つあつた。それは聖母の墓の石壁に掲げられた畫額である。繪馬式に拙なく描かれ、硝子をはめた二尺に一尺餘の額である。聖母が眠るが如く死の床に横はつて居る。其床側に耶穌が立つて、母の死顔を靜かに見下して居る。耶穌の腕には、女の孩兒が抱かれて居る。それは母の生れ變はりである。聖母は死んだ。而して女兒に生れて、耶穌に抱かれて居る。死は即ち生で、愛は抱く。親が子になり、子が親になる。母を亡くしてまだ二月しかたため私にとつて、暗示の深い畫である。私は此前來なかつた聖母の墓に今日何で來る氣になつたかを初めて知つた。

斯地下院には、水溜の井がある。妻は飲んで好い水、と云ふて居た。

私共は、嬉しい心地になつて、寺を出た。寺僧に10Pをやり、それから、橋の上で、乞食の女に銅貨をやつたのも、嬉しい心のあふれであつた。

歸途、赤十字病院に亘さんを訪ねる。留守。名刺と紅羊羹少々残して歸る。

(四)

復活祭で、此兩三日ホテル大繁昌。今日の夕食には、新顔が夥しく居る、隣の食卓から、シリア婦人が話しかける。米國仕込みの女醫で、Beirûtに住み、良人は同大學の教授で、日本人が大好きだと云ふ。私共が外出以外すべて日本服で居るので、新來の客は皆私共の頭の尖から足の爪先まで見上げ見下ろす。今日はスリッパを穿いて居るので、明日は草履をはかう、と二人は云ひ合ふ。右の女醫の外に、シリアの男女客が大分居る。シリア人は、男女共に髪は黒く、色も白からず、黒からず、身材も普通で、餘程日本人に近い。眉毛が濃いのと、人を覗ふやうな眼つきが、特色である。

食堂に入る時、私共の前に行くカアキイが一方の足を曳きずつて、艱ましげに歩くのが、氣の毒でならぬ。今日も途中で、妻は盲兵が二人、仲間に手をとられて歩いて居るのを見た、と云ふ。色色の意味に於て人を不具にする戦争を、何時まで人間は止めないのだらう？

* *

* 木 *

* *

洗 足 式

(一)

四月十七日。今日は一歩の雲も空になく、玉のやうな美

晴。エルサレム中の市街、家屋、草木は、先日の雨に洗はれたあとを、黄金の日に照らされて、すがすがしく、きらきらしく、好い氣もちつたら無い。私共の部屋から眺めると、橄欖山腹の猶太人の墓墓が、霜柱のやうにきらきらする。

十時頃Hさんが一束の日本新聞を持参して、今日はお墓の寺で洗足式があり、近い英吉利會堂では夕方禮拜があつて、それから行列はゲツセマネの園に往つてそこでまた禮拜をする、と云ふ事を知らしてくれた。私共は早手廻はしに、昨日ゲツセマネに往つてしまつた。Hさんは家財残らず土耳其政府に沒收されたが、此程自身の居る赤十字病院で家財のあるものを看出したさうだ。これも其一つだ、と云ふて、Olivet house の寫眞入り書翰紙を、少しくれた。H夫人は船便の都合で少し來るのがおくれるかも知れぬさうな。

Hさんが去ると私共はやがて、お墓の寺へ出かけた。が、午後一時でなければ式は始まらぬと云ふので、またホテルに歸り、午餐を済まして出直す。

寺前の廣場は、眞黒の人立ちである。扉の前近く私共が立つて居ると、中剃りした頭に小さな帽子をのせた修道服の坊さんが、私共に會譯して、佛蘭西語で話しかける。話は分からぬが、日本人であるだけは分つたやう。やがて、旗と、彎刀、陣羽織、儀仗の武士を先に立てて、大僧正がやつて來た。紫地錦襦の衣に、金玉を鑲ほりた白い冠高高とかぶり、銀の杖を重たげについて居る。左右も似た裝で、美しい行列。寺の扉が開かれる。大僧正以下が入る後から、私共も入

つて、Bench に腰をかける。墓御堂と相對した一段高い高臺の上に、大僧正の美しい椅子が据えられる。椅子の上には紫の天蓋が覆ふ。役僧が、“佛蘭西!”と呼び、“伊太利と”呼ぶと、大僧正の椅子を首席に、カアキイの兵士が十二名、六人一列、相向ふて Bench にかける。耶蘇がわりの大僧正が、昔の十二使徒がわりに足を洗ふべき連中で、聯合國側の各國兵士から撰拔された者共である。日本の兵士が居ないのは、申す迄もない。

お墓の左右に、大蠟燭がともされる。ドオムの頂から、おのおの五つの小燈を點した金の燈明がつり下ろされる。

大僧正が入つて来る。皆起立する。お墓の前では、唱歌が始まる。

十二人のカアキイの兵士達は各自右足のゲートルを解き、靴を脱ぎ、襪をとりはじめた。一僧が銀の大香爐を振る。香しい煙がそこらに漲る。紫の帽、赤地に白い刺繍の衣、紫薄絹の裳のやうなものをつけた大僧正が、歌につれて、やをら兵士の前に来て、一僧がすすむる Cushion に膝をつく。一僧が銀の洗盤を出す。大僧正が兵士の素足を左の手で持つ。他の一僧が、足の上から水を灌ぐ。大僧正は右の手で其足を洗ふて、タオルで拭き、而して足の甲を接吻する。足が奇麗になると、基督が弟子の足を洗ふ畫をかいた橄欖條の小畫額を大僧正がくれる。兵士は受けて、之を接吻して傍に置く。大僧正は次に移つて、同じ事をくり返へす。一人毎に Towel は新しく取り換へられる。十二人の足洗が終へて、大僧正が奥へ引込むと、件の

兵士達は襪をはき、靴をはき、ゲートルをはめ、件の畫額を持つて立上る。

式が済んだので、いざ歸らうとすると、扉がしまつて居る。英吉利の士官と兵士がやつて来て、それを開けやうと、がちやがちややつて居ると、頭髮の中剃りして、紐の帯から重さうな十字架をつり下げた Monk がやつて来て、五時前十五分でなくては扉は開かぬ、と云ふ。時計を見れば、二時少し過ぎたばかり。まだ二時間の餘も待たねばならぬ。

私共はまた御堂前のベンチに歸つた。皆がお墓の前では片膝ついて、十字を切り、而して御堂に入つて行く。御堂の入り口には、土耳其帽の儀仗服が二人、番をして居る。おほよそ墓の前を過ぐる者、僧も、非僧も、子供も、成人も、如何に忙しい折にも、必片膝ついて十字を切る事を忘れない。それは美しい禮儀である。然し私は美しい爲に、皆に倣ふて、あの墓の前に膝をつくであらう乎。

それを決定する時が来た。

先刻寺の門前で私共に愛想したあの役僧が私共の處に来て、あなた方もお墓に詣つてお出なさい、と云ふ風をする。私共は先日已に此寺が淋しい日に来て、其墓も見たが、今日はまた今日で何様な飾りがあるか、それを見るべく、また其好意に背かざるべく、僧の勤むるままに立上つた。御堂の前に来た。皆の跪く如く、私は跪かない。私が跪かぬので、妻も跪かない。私共は、ただの處へ往くやうに、心易く入らうとした。土耳其帽の衛士が、私共を拒むだ 私共靜ふ

て入る要を認めなかつた。夫妻は墓の口から引返へして、もとのベンチに戻つた。

御堂の前では、唱歌隊の合唱が始まつた。僧衣の一人が如何にも得意らしく指揮棒を揮ふて居る。棒の先から湧くやうに、一高一低海の音の様な聲音が洋洋と寺内に満つる。好い音だ。然し其内に私共は最早飽きて來た。

所在なきに、寺内を歩き廻はつて、また出口の方にもどる。扉番の席を見つけて、私共はそこに素早く腰をかける。其處には、彼此三百人程の異種異類の老若男女が、思ひがけない拘留に會ふて、氣のぬけた様な顔をして居る。しばしば時計を見る。皆待ちあぐんで居るが、そんなに騒がないのは、流石である。英吉利の士官が、私共に挨拶する。埃及の Shepherd's Hotel で私共を見知つて居る。復活祭を見物に來た、と云ふ。

亞米利加にも此様なものがあるか、と思ふやうに、私よりずつと矮い年少兵士が居る。中學齡にしか見えぬ。父母が待つて居やうに、早く歸つたら如何だ、と私は云ふ。印度兵が居る。頭巾をといて、巻き直すを見れば、中幅一丈餘もありさう。印度兵は、日本人がなつかしさうに、時計を見せてもらひに來る。互に話したいが、言葉が通はぬ。

最初此寺の見物に來た時の老案内者が、私共を見覺えて居て、Orange の半分をくれたのは、大に嬉しかつた。

時時扉の切穴から、使命が齎らされる。内外から皆が覗く。外の

子供と、内の子供と、覗き合ひして、騒がしくなると、年長の Monk がやつて來て、杖を借りて子供等を追拂ふ。耶蘇の追拂つたのは、子供ではなかつたやうだ。

やつと長長しい唱歌が止み、旗と前衛を先に立て、大僧正が來ると、扉は開かれ、私共は自由を與へられた。

(二)

歸つて、一杯の葡萄酒を飲み、それから公開書を英譯する。

美しい日は、美しい夕になり、向ふの山山の空は、深碧から臙脂紫になり、眞珠鼠になり、今し入る日の光は、下なる獨逸會堂の白い塔の十字架を、金十字架に輝やかして居る。幾千とも數知れぬ燕子が飛び交ふ。

私共は到頭屋上に上つて、此靜かな夕をぶらつきながら四方山を語る。

"It is a beautiful evening, calm and free,

The holy time is quiet as a Nun

Breathless with adoration."

Wordsworth の Sonnet が口吟される。

其處に給仕が上つて來て、來客を告げる。

下つて見れば、S さん。近くの教會の禮拜に同伴しやうと云ふ。疲れて居るので、斷はる。S さんは加特力や希臘の儀式を好まない

ので、今日洗足式を私共が見に往つたのを、嬉しくない顔をして、きつきと歸つて往つた。

好い夕方だ 私共の部屋の向ふ隣の平屋根では、黒衣の婦人が聖書を読んで居る。やがて階段に腰かけて、長いことちつとして居る。休息して居るのか。祈禱して居るのであらうか。祈禱は即休息なのであらう。其處は、Conventらしく、澤山の鞆などが干されて居たりする。女中の尼さんが忙しく洗濯を干したり、糊をしりするのをよく見かける。黒衣の婦人は、多分彼女であらう。“It is beauteous evening”の句がまた浮んだ。

夕食から歸ると、先刻向ふ隣の尼さんが祈つて居た平屋根の欄干の上に、圓いきらきらとしたものを見つけた。何かと思へば、月である。それはびつくりする程近く、光つて、五十二年來見て居る月ながら、今はじめて見るかと思ふ程人を駭かす明月である。

私共はまた屋上にのぼつた。

* *
* 金 *
* *

十字架日

四月十八日。寒い日がつづいたあと、今日は暖かい日が來た。寒暖計が七十度に上つた。

今日は所謂 “Good Friday” である。耶蘇が捕へられ、裁判さ

れ、心無い輩に侮辱され、十字架につけられ、死んで墓に入れられた日である。土曜日の安息日前に耶蘇を片づけやうとして、昔の猶太人も急いだものだ。十字架の金曜、何が “Good” なものか。“Bad Friday” だ。“Shameful Friday” だ。

朝からエルサレム中の寺寺の鐘がのべつに鳴る。

今日はまた回教祭禮の終りの日なので、此方も中中賑やかだ。手を拍いては、環を作つて、街上に踊り廻はる。女連の Mosque of Omar 詣りが美しい。白い絹、緑の光を出す紅、紋織の黒ちり、顔は見せぬが花やかな装で、赤、白、青さまさまの洋傘さし連れて居る。白い野薔薇の花で鬘を飾つた鹿毛の馬に、服は洋服、かぶり物はアラブのかぶりものをひらひらさせて、全身花で飾つた五歳位の男子をのせ、回教の女達や男達が手を拍ち雑やして Mosque へ行くのが、畫にも描きたい光景である。驢馬の基督から換骨奪胎の分捕意匠ではないかと思ふ。由來亞刺比亞人は、糧に敵に依る種族だ。

この賑合を見る可く、屋上にのぼつて居ると、西隣の低い平屋根の上に、羊の鳴き聲がする。此處は土人の憲兵屯所で、よく帶劍の憲兵が破落戸や不良少年を拘致するのを見かける。下の入口から入つて、見えなくなると思ふと、しばらくたつて、平屋根に現はれる。夕方などは、憲兵さん達、此平屋根に椅子を出して、涼みながら珈琲を飲んだりする。Mew, Mew の聲に見てあれば、一疋の白い羊が、引張られても行かず、頭をのぼして下を見下ろし、飛び下りさうにする。一人がつきまつた。一人がぐいと引張つて行く。多分 Mutton

になるのであらう。所謂“屠所の羊”なのだ。千九百年前に、さうして耶蘇も牽かれた。

まあ“Mutton”は、いやだ!

夜はまた Church of Holy sepulchre の塔上に、十字架の燈明がかがやいた。

今日は外出せず、公開書に附する私書數通を書いた。

* *
* 士 *
* *

靈 火

(一)

四月十九日。朝食後、小客間で英文公開狀を書いて居ると、且さんが私共の郵便物を持つて来て、今日はお墓の寺で靈火祭がある、と云ふ話をして、歸つた。

郵便物は其ままにして、私共は直ぐ衣を更め、例の近道からお墓の寺に往く。廣場手前の巷路では、店毎に大小長短紅白さまざまの蠟燭を、山の如く積んで、賣つて居る。寺の内外は、一ぱいの人であつた。洗足式の日よりも夥しい群衆である。案内者の一人が導くままに、群衆を押分けて、私共は墓御堂に向ふた希臘會堂の中に往つた。

20Pを頂戴して、案内者は罷る。

老若男女さまざまの人の限りは、手手に蠟燭を持つて居る。

Dome の内側を二重に廻つて居る高い Gallery も、一ぱいの人である。其處から、紐で蠟燭をつり下ろして居る者もある。私共の室の女中 Maria も、晴れ衣で来て居る。私共の立つて居る處から少し離れて、二つの高臺には、然る可き人の家族が来て居て、知事 S 少將が挨拶に來たりして居る。

場内は可なり騒々しい。高い Gallery から奇聲を發して彌次る連中は、回教徒の若者らしい。自分達の祭禮が昨日で済んだので、これから耶蘇信者の邪魔をしようとするのであらう。私共の直ぐ背にベンチを持ち出し、それに屈強の亞刺比亞人の若者が五六人突立つて、腕組みして、墓御堂の方を睨んで居る。一荒れ荒れさうな面魂をして居る。埃及巡查が二人、制しても聽かぬ。其處に、四十前後の、身の丈高い、色は白いが逞ましい Monk が、腕まくりしてやつて来て、溢くるアラブの猛者共を Bench から追ひ下ろして、Bench を引つたくり、ぐいぐいと向へ押しつけてしまつた。

時刻移る程に、私共の立つ背の方から、幡が幾旋となくあらはれて、次から次とお墓の方へ行く。薔薇を刺繍した白衣の Monk が大勢來る。それが墓の前に練り行き、環を作つて、ぐるりぐるり歌ひながら墓を周つて居る。靈火は、墓御堂の中に昔から断なくともされてある、其火から煩たると云ふので、私共は遙に墓の方ばかり眺める。皆も其方を眺めて居る。今か今かと、緊張の度は加はつて來る。

忽然、其墓の方に大勢雪崩れ寄る。と思ふ間に、何處を如何廻つ

て来たのか、高く長柄の銀の燈明を捧げた男が私共のつい背後に現はれた。

忽ち私共の周囲は、其松明の方に吸ひ寄せられた。松明の火は蠟燭に、蠟燭の火は他の蠟燭に、火は火を起し、火は火を生んで、呀と思ふた時は、Church of Holy Sepulchre 内、何千といふ蠟燭は、皆朱に、皆明に、とろ、とろ、とろ、とろ燃えて居た。Gallery からつり下げた蠟燭も、火になつて、つり上げられる。何處を見ても、黄いろい火、朱の光が、生命の揺らぎを見せて、とろとろと燃えて居る。それが高い天井からつり下げられた大きな蠅よけの硝子玉に映つて、宙にも火が燃えて居る。

火光と、煙と、聲とで、大きな堂の内は、一ぱいになつた。

誰も彼も、其蠟燭の火に手をかざしては、それで眉を撫で、目を撫でして居る。露西亞から来た巡禮の婆さん達は、嬉しさのあまり涙を流して居る。

私共が日本人だと云ふと、露西亞の婆さん達は嬉しがつて、皺だらけの大きな手で、私共の手をしつかり握る。婆さんが、私に帽をとれと云ふので、私は悦んで帽をとつた。

私共は蠟燭を持たぬので、私共の手に火は無い。然し皆が持つ火は、私共を悦ばせる。

生命の象徴の火！

昔亞刺比亞の曠野に、燃えて然も荆棘を焼かず、モオゼを怪しましめた、あの不思議の火。

ベンテコスタの日に、使徒達の頭上に舌の如き形をして燃えた聖霊の火。

私の父が死んだ後で、私共の家の夜の庭を照らし過ぎた一團の怪しの火。

全く火は生命の象徴だ。私は目を拜する者を怪まぬ。火を拜するも、不思議でない。

聖週さまさまの儀式の中で、聖火の式は、気に入つた。

全世界の全人類で此様な Illumination をやりたい！

“火は好いものだね。”

斯く平凡な事を云ひ合つて、悦んで私共は歸る。

(二)

午後、私共の室で、且さんが今朝程持つて来てくれた郵便物を見る。母の死に関する新聞の切抜きが其中にある。二人の子を持ちながら、其何れも臨終に、葬送に、もち得なかつた母は、祝された人とは云はれない。臨終近く“本望”と云ふた父の一語に腸を斷つ Resignation を讀み得ぬ者は、“もう駄目”の一語を心すずしい大往生と聞くであらう。眞實に徹し得ない半死の牧師や賣僧が、何とお世辭を並べやう共、母の死は黒い X である。

喝！

私の胸には、地獄の底から迸る黒い噴毒が漲る。私は齒を喰ひ

しばつた。

今夜を晴れと、お墓の寺の塔頂に、十字架の燈明が輝やく。電燈の無いエルサレムも、輝やき得る限りは輝やいて居る。天には無数の星が晃めく。宵の明星は、全く月程に光る。遠くの歌聲は、春の潮の漲るやうに響いて来る。

復活の前宵だ。エルサレムは、やがて進り出る生命の豫感に震へて居る。

エルサレムは、来る可き歡喜の期待に、はち切れさうに揺らめいて居る。

然し私の心は、暗く、淋しく、失望して寝て了ふ。

其七 大復活

(一)

四月二十日。復活日曜である。昨夜は、エルサレムに居る基督者の多くは、眠らずに夜を明したらしい。今朝廣間に出ると、其處の Sofa に眠り倒れて居る人を見た。

朝食に下りると、帳場の連中や、食堂の給仕までが、平常の“Good morning”でなく、“Christ to you!”と云ふ。

私は、兎も角も、公開狀、及びこれに附する私書を合はせ、幾通の日英文の手紙を書き終へた。

書き終へたが、一向嬉しくない。昨來の不快が、胸に躡つて、容易に融けぬ。宇宙を踏み碎きたい嗔恚が胸に漲る。何の平和があるものか、と云ふ様な眞黒い感情が、ともすれば焔となつて燃え上る。

私は、きりきり齒を喰ひしばつて、到頭キルツンや、ロイドジョオジに宛てた手紙を寸寸に引裂いた。

“俺の心が、怒に煮える。如何して、平和な手紙が書けるか？”

妻は愀然とした。“本當に、さうでせうとも。でも、あなたがお書きなさらずに、誰が其手紙を書くでせう？”

憤憤して午餐に下りる。

室に歸つて、午眠する。

さめたが、いまだに胸が震れぬ。

復活日のエルサレムは、流石に歡喜の都である。白衣をつけた婦人達娘達が嬉嬉として街を歩いて居る。何處からともなく、歡聲が潮のやうに湧く。然し私共の室では、扉をしめ切り、バルコエイの扉の Blind を下ろして日光と青空をしめ出し、墓の中のやうな薄闇がりに、再び十字架の苦しみをする。私につれて、妻も。それは、生命は共通で、責任は聯帶である。男の私が父の爲に十字架に上れば、女の妻は母の爲に十字架に上らねばならぬ。斯くて私共は千九百年の後に再び生れて、エルサレムで最後の十字架をする。

恐ろしい復活日！

(二)

四月二十一日。父や母や血族の夢を見て夜半にさめる。

向ふの隅の白蚊帳の中で、妻がひどく魔されて居る。聲をかけて、呼びさます。苦しい息をついて、妻が語るを聞けば、骨ばかりの手が、ひどい力で押しつけるのを、剣ねのけやうとしても、中々力が及ばぬので、苦しんで居ました、と曰ふ。

私は慄然とした。

ああ 恐ろしい。恐ろしい。妻は正夢を見たのだ。

私を失望させ、私に平和の手紙を引裂かせ、夜の夢にまで妻を
押し殺さうとする、それは何ものか？

“過去”だ。

“過去”の咀ひだ。

骸骨の咀ひだ。骸骨の咀ひの手だ。

妻は、またすやすや寝入つた容子。

私は、私の白蚊帳の内に寤めて、私の半生を思ふ。

* * * * *

私共が昔まだ東京は原宿に住んだ頃、近在から來て居た一人の女中があつた。氣さくな女であつたが、母は繼母であつた。彼女は二十歳近くなるまで、母の繼母である事を知らなかつた。知らなかつたが、何となく變に感じて、“おつかさん、おまへさんはまるで繼母見たいね。”と云ひ云ひした。それが本當の事を云ひあてたと後で知つた時、彼女はがっかりしたが、また安心なやうな氣もした、と云つて居た。

私の母は、正しく私の母であつた。而して私は、正しく父の子であつた。然し私は不幸にして母の咀ひの子であつた。それをおぼろげに感じはじめたのは、餘程小さい昔の事であつた。“新春”に書いたあの子供の無禮が因をなしたのだ、と私は“新春”の出る迄思ふて居た。“新春”が出てから、姉の一人が來て、私に私の生の秘密を語つた。姉の話によつて、私は初めて母の咀ひが五歳の時に崩さず、母の胎内に私が宿つた其夜に始まる事を知つた。母が咀ひの胎内に、

私が宿つたのであつた。つまり、五十一歳にして、私は初めてわが生の秘密、私を縛る呪咀の秘密の鍵を與へられたのである。

姉は私が生るる前後七八歳の幼女として母の傍に居、最近には同じ東京に住むて母の自白を聞いて居る。即ち私は父の子母の子に相違ないが、私は父の大酔の子で、母の呪咀の子であつた。父に對する母の憎悪と侮蔑が烈しく燃え、男性の性慾に對する呪咀で眞黒になつた瞬間、母はわれにもあらず私を孕むたのである。呪咀の胎が私を迎へた。私は呪咀に包まれて生をはじめた。呪咀は即ち十字架である。母の呪咀、人の子としてこれに過ぐる十字架があらうか。私の生は十字架に始まつた。私が“耶蘇の生涯は十字架に終つたが、私の生涯は十字架に始まつた。”と謂ふのは、是だ。耶蘇が終つた處から、私が始める。私は耶蘇の生涯の裏を返へす。私の五十年は十字架の生涯だ。私は十字架を負ふた。だから“十字架の時代は過ぎた”と叫ぶ。十字架を負ふた者でなければ、“十字架の時代は過ぎた”と叫ぶ事は、許されぬ。

勿論母は悔いたさうだ。而して私が母の胎に居る間に、母は姉を連れて觀音様に詣つたさうだ。其呪咀が胎内の私に及ぶを恐れたのである。母は聰明を恃む高慢な女であつたが、眞率でもあり、また愛する人でもあつた。母は最初の呪咀を打消す可く、私が胎内に居る時から努めた。母が後で耶蘇を信じ、私を耶蘇に導くやうに努めたのも、最初の呪咀を轉回せん爲に外ならなかつた。母は私について随分努めた。然し悲しい事には、呪咀が最初にあつた。それは

私の生の第一層を包んでしまふた。

生がのびると、呪咀ものびた。それは椰子の殻の如く厚く私の生、若くは生の私を包圍した。私の半生は、中心の生が其厚い殻を破つて出やうとする苦しい戦闘の歴史である。それはもつと具體的に語られる日が来る。

母の呪咀は、私の幼少時代を苦しめた胎毒として先づあらはれた。私の生の烈しい二元分裂、ややもすれば陥り易い自暴自棄、生の失望、死の誘惑、要するに成長の遅緩、皆其呪咀の結果である。

勿論母は苦勞人であつた。而して瑪蘇を信じて居た。八十にして洗禮を受けた夫の子が、假令發足點は何處の泥濘から踏み出さうとも、向上進歩の可能性を有する事を疑ひはしなかつた。而して彼女の公心に於ては、私の成長を喜んでくれたに違ひない。然し高慢な彼女の私心は、最初の呪咀を肯定する惑誘を全然退くる事が出来なかつた。私が彼女の期待にはづる毎に、彼女の公心は悲しみ、而して彼女の私心は満足した。“傘屋のむすこだから”と宗盛をあきらめた池の禪尼も、他事でない。

私の成績がよくない毎に、母は最初の呪咀に歸つた。“やはりあれだもの”と謂ふのである。私は到頭母の全い愛と信とを得なかつた。

自然は直覺する。如何に粧ふても、自然を動かすものは中心の自然である。私は努力して母の公心を満足さすより、自ら滅亡に奔つて母が最初の呪咀を肯定するをよしとさへ思ふ時があつた。亡びて

も愛されたい。それ程男の子に母の愛は大切であるのだ。私は自分を墮落させて、母の私心に媚びやうとさへ思つた。母が私を信じない限り、私に自信のつきやうがなかつた。母をふり捨てた耶蘇はやはり偉い。然しマリアは耶蘇を孕む時、私が母に咀はれたやうに耶蘇を咀ふたのであらうか？ マリアが咀はなかつた事は、耶蘇が母を捨て得た事で分かる。母に咀はれた私、母が其咀ひを取り去つてくれない以上、母を捨てる事が出来やう筈がない。

これは勿論僻事である。父母は父母、子は子である。自己は自己の自己であるべく、父母の自己であつてはならぬ。宇宙の一切が信ぜずとも、人は自ら信ぜねばならぬ。誰一人愛してくれる者がなくとも、それが自愛を捨てる理由とはならない。私が母に執着は過ぎたかも知れぬ。これは所謂愚かな事であらう。然し全い父母の愛を得ない子は、不完全な生の所有者である。如何に父の愛が強くと、母の呪咀が残る限り、私の成長は片輪なものである。全的に生きなければ、私は生きる要がない。私は生の初に溺つて、母の呪咀を根底から抜くか、然らば母の呪咀を肯定して、其呪咀にかなはせんが爲に、其呪咀に殉死するかの二つの外はないのだ。三生を通じて生命の流れを疏通しやうと謂ふ私が、半分白髪になつてまだ干からびた母の乳房をしぼるも、無意味ではない。母の呪咀が母によつてぬかれない限り、即ち母が私を全然信愛しない限り、最初の殻は何時までも私にくつついて私の生の十分な成長を邪魔せずには居らぬ。母が姉への懺悔は、呪咀の撤去と云へる。然し十分ではな

い。母は私を祝福せねばならなかつた。私は母の祝福を求めた。然し母は終に祝福を與へずに死んで了ふた。母は常に祈つたさうだ。然しそれは私に届かない祈であつた。死後二ヶ月、エルサレムまで其最初の呪咀が追かけて来るを見れば、母の祝福は欠けたのだ。悲しい事であるが、事實は如何ともする事が出来ぬ。

“おまへの生れは斯くである。おまへの半生は斯くである。おまへは平和の君など氣取られる柄でない。おまへは罪の子だ。おまへはあさましい獣だ。おまへは馬鹿だ。おまへはわたしの祝福を受け得ない子だ。いや、おまへはわたしの子ではない。わたしの子わたしの女の中で、おまへは永劫に咀はれの子だ。榮の冠をいただくのは、おまへではない。”

墓のあなたから、母が斯く言ふ。

私が其爲に遣はされた平和の書を引裂いたのは、不覺にも私が母の其言を聴いたからだ。

それについて、思ひ出す事がある。

五月に妻が嫁して來て其夏、裁縫不馴れの彼女は、私の爲に一反三圓程の縮みの浴衣を縫ふてくれた。彼女の誇り顔な喜び、私の満足は、言ふまでもなかつた。ある夕、私は不圖母が言ふのを聞いた。“あんな好い衣をつくつて着する！”私は其浴衣を着るに足らぬ者と母にせられたのである。三日ばかりして後、私は何かの事から怒つて、齒ぎりしりしながら、其浴衣を寸寸に引裂いた。其寸寸になつた浴衣を抱いて泣き崩れた花嫁の姿を思ふ時、私は妻に對する數々の

罪の中でこれ程の罪はない心地がする。

あの浴衣を裂いた手が、私の平和の書よみを引裂いたのだ。皆母の最初の呪咀がさすのだ。

妻の夢に妻を押し殺さうとした骸骨の手は、母の呪咀の手でなくて、何であらう？

私に平和の書を裂かせ、夢にまで妻を押し殺さうとする呪咀の執念深さは、全く恐ろしい。

父が死ぬ時、母は私を父の臨終に呼ばなかつた。私共が此世界一周に出る時、母は人傳によつてだに一句の祝福も與へなかつた。祝福の欠乏は、呪咀の肯定の如くにさへ見ゆる。母の祝福が子に如何様の関係あるかを、大抵の母は知らぬ。それは子にとり、殊にある子にとって、生死の問題である。母の不信が、私を生き甲斐のないものにさへ思はせた。

印度洋が私を牽いたもその爲だ。

過ぎたと思ふ過去の憂愁が、山の如く壓するもそれだ。今此大なる復活節に、私をして十字架に未練を残させ、平和の書を裂かせ、快く平和の君たらしめないのもそれだ。

然しよくよく思へば、私が十字架を負ふて過去に事ふるも已に五十年、母の呪咀に奉仕の時はもう過ぎた筈。私は母の子であるが、同時に父の子である。母の“私”には咀はれの子であつたが、“公”には祝福されないまでも咀はれない子、信ぜられないまでも少しは認められた子である。而して其父も死に、其母も死んで居る。私は父の

子母の子であるが、私は父でもなく、母でもなく、私は“生命”だ。永劫から永劫に生きる生命が、此時此地に此形を假つて現はれて居る私である。私が生命である如く、向ふの白蚊帳の内にスヤスヤ眠つて居る妻も、生命だ。生命と生命、それは過去の奉仕を終へて、新天新地の創造に遣はされて居るアダム、イヴだ。

ふるいものは死んだ。“死にたるものをして死にたるものを葬らせよ。”十字架に執着する者は、十字架と共に朽ちしめよ。アダム、イヴは新天地の新生活を創むればよい。

さうだ。“十字架の時代は過ぎた。”耶蘇は復活した。母のマリアは父ヨセフに歸り、耶蘇の傍には妻マリアが並んで居る。

呪咀の殻は、悉皆破れた。生命の木は、新春の緑を輝やかして、新天地の朝風にそよいで居る。

私は曾て夢に、父が母を私に連れて来て、“もう、ゆるしてやれよ”と言ふた聲をまざまざと聞いた事がある。夢は大方自ら造るもの、私は心の中でとく母をゆるして居るのだ。子としては母の不信に苦しむ。呪咀がとられたあとに祝福が満たなかつたのは、つらい思出である。敬愛したい母としては、勿論失望である。然しすべてを抱く父としては、やんちゃな女むすめをゆるすに何の造作があらう？母は、死んだ日に、私の女むすめになつたのだ。私はもう誰も罪せぬ。罪はすべて消えた。宥さるる日に、それは消えて居る。審判は過ぎて、今はゆるしと喜びの日である。

私を中心とした半生の悲劇に於て、随分つらい事、醜い事、は

づかしい事の數數も聞して來たが、それは耶穌の言ふやうに、“父の罪でもなく、母の罪でもなく、私の罪でもなく、それによりて天の父の榮が彰はれん爲”である。

其天の父の榮が、今彰はれる。

やはり新天新地だ。アダム、イヴだ。過去は皆私共に於て新になるのだ。天の父の勝利だ。生命の凱歌が今擧がるのだ。

* * *

愛の潮がふたたび私の全身心に漲りはじめた。

(三)

東が白むと、私は起き上つて、バルゴニイの扉を開け、流れ入る朝の冷やりした空氣と雀の囀りの中に、昨日裂き捨てた手紙を、また書きはじめた。

妻も起きて、英文の分を淨書する。

午後の二時頃、悉皆書き終へた。私共はそれを投函すべく郵便局に往つた。早く出してしまわねば安心がならぬ。“手が焼けるやうだ。”と私は戯れたが、それは戯てはなかつた。

郵便局は閉つて居る。Easter mondayで、休日なのだ。郵便局ばかりでなく、店も多くは閉つて居る。

私は失望した。

手紙が私に執着して、中々手からはなれぬ。

燃ゆるやうな數通の手紙をポケットにして、私共は歸りはじめた。Credit Lyonnaisの前まで歸ると、街に人だかりがして居る。唯見ると、其中から若い英吉利の兵士が憤憤した容子で、つかつかと郵便局の方に行きかける。手に短かい鞭を持つて居る。忽ち土耳其帽の男が俛むよと見れば、手頃の石をつかんで件の兵士に投げつけた。撞と兵士の背に命中する。若い兵士が駭然見かへつて、つかつか戻つて來る。丁度其時私は土耳其帽の左の頬から血がたらたら流れ落ちるのを見た。私は突と仲に入つた。他にも二三人立ち入つた。兵士は私の右腕をつかんでぐいと押しのけ、土耳其帽に飛びかからうとしたが、大勢に隔てられて到頭物わかれになつた。英兵士は他の二三のカアキイに宥められて、郵便局の方に去つた。血だらけの土耳其帽は、土人に擁せられてヤッフア門に去つた。血だらけの顔を見て、十二三の女の兒が驚いて泣き出したのを、妻が頭を撫でてやつたので、泣き止んで彼方へ去つた。

一場の出來事は私共の胸を痛ませた。戦争の後だ。祭禮上りだ。疲れても居る。氣も荒くなつて居る。喧嘩は別に珍らしくもない。直線の西洋氣風に曲線の東洋癖、相互がびつたり合はぬは、ありがちである。察する處、赤帽のアラブが若い英兵士を憤らせたのに、相違はない。

然し血は、見よいものではない。

私共は、心を傷めてホテルに歸つた。ダマスコの遊から昨日歸つたFさん夫妻が、廣間で英士官と話して居る。私共と握手して、

Eさんはダマスコで買った絹物を見せると云ふが、其様な氣になれぬ。

室に歸つて少し横になり、それから起きて、固形アルコールで湯を沸かし、緑茶を入れ、朝鮮餡の一片を食ふ。而して夫妻で英吉利を論ずる。一兩日の心痛で、妻の眼が凹み、お墓の寺のカルツリイにある聖母マリアのやうにやつれて居るのを、傷はしく思ふ。

夕方客間を通ると、先日Eさんと話して居た蘇格蘭の婦人が居る。永年カイロに住み、兵士の爲に働いて居る人で、休養に来たのである。話によれば、カイロがまた騒いで居るさうな。埃及人は市街で Barricade を造つたりして、血も大分流れた。汽車はすべて英吉利兵の手で運轉して居る。事態は日日險惡になつて行く。其様な話を彼女はする。先日は、Eさんが埃及は總蜂起の危険がある、と新聞を傳へた。Allenby が來ても、國民的勃發を押へる事は困難と見える。

私は今日私共の公開書私書が、郵便局休業の爲に投函出来なかつた仔細を悟つた。私の手紙のあるものは、書き改められねばならぬ。

私は日本人である。だから私の血は先づ東洋の爲に動く。然し私は人である。だから西洋人の腹にも、私は入り得る。

日輪は遍ねく照らす。日の子、日の女、は一切衆生の父たり母であらねばならぬ。

今日は復活月曜。エルサレムはまだ祭禮装して、祭禮氣分が支

配する。お墓の寺の十字架は、晃晃と輝やいて居る。明るいエルサレムに歌聲が湧く。私共の胸に愛の悦喜と力が漲る。

畢竟それは“復活”であつた。

然だ。大復活である。

其 八 私 共 の 手 紙

(一)

四月二十二日。天明、起きて英吉利首相への手紙を書き直す。エルサレムに来てから、新聞も見ないので、私は一向講和會議の近状は知らぬ。私は出来る事なら佛蘭西のクレマンソオにも、伊太利のオルランドにも、獨逸や奧地利にも、露西亞にも、土耳其にも、バルカンの諸小邦にも、支那、印度、埃及、猶太人といはず、黒人といはず、全世界の全國民、全種族に語りたく思ふた。然しさし當つては、出来る限りを以て満足しなければならぬ。

櫻咲く頃の東京を思はず、暖かて、風がひどく、白塵立つ日である。午前十時頃、私共は久し振りに夏服で出かけた。私は月の一日にエルサレムで買ったカアキイ色ヘルメット帽をかぶり、妻はベテレヘムで買った緑玉の頸飾をかけた。郵便局に往つて、祝禱と共にすべて五通を書留郵便に附した。係の土耳其帽が、青鉛筆で一通毎に手紙の裏表に十字を書いた。英吉利の占領以來、パレスチナは埃及貨幣が通用される。私 郵便代しめて 12P 半を拂ふと、件の土耳其帽が “Thank you” と曰ふた。何でも無い言葉が、それでも私共を悦ばせた

局前の空地に燃えて居る、ひな芥子の花を一輪摘んで、私共は悦んで宿に歸る。

勿論これは始であつて、終ではない。五十年を過去に捧げた私共の創造の仕事は、これからである。然し此新紀元的第一年に於て、其爲にエルサレムに遣はされた私共の仕事は、兎も角も爲されたのだ。私は今こそ前生の耶蘇と顔合せが出来ぬ。今こそ Tolstoy に如何？と言ひ得る。彼は私を見ながらよく私を諷らずに死んだ。母さへも私を信じなかつたもの。私はまた父の師横井小楠を私の座から見下ろす事が出来る。彼は維新の昔已に四海の兵戈をやむる事を考へた。私の父は愛と誠を以て師に仕へたが、英靈活氣の師は父を愚直一遍の者に思ふた。彼は其自慢の弟子でも愛 子でもなかつた弟子の其子供の中でも一番の屑と看られた末子が、彼の頭に閃めいた理想を世界的に押立てるを夢にも思はなかつたのだ。所謂“主のなし給へる事にしてわれらの目に奇しとする所なり”で、阿爺はよくこないたづらをする。私はまた私の父母、妻の父母、私共の血族、縁者、すべて私共を見知り、聞き知る人人に面を向ける事が出来る。最後に、而して第一に、母に代つて私に加はへられた母の呪咀を解き、私と十字架を負ひ、私と十字架に上り、墓に下り、而して共 復活の榮光の中に今立つ千九百年前のベタニアのマリア、其名は愛の私の妻に對して、瑞瑞しい悦喜の顔を合はす事が出来る。

(二)

私の所望

今朝私は此手紙を日本に出すと同時に、同一意を巴里の西園寺侯と、キルソン氏と、ロイド、ジョージ氏と、倫敦タイムスとに、書き送つた。その手紙の運命を私は知らぬ。私はただ書くべきを書き、出すべきを出したまでである。

私が十三歳の春であつた、同志社の地理科で製圖の課題が出て、六大洲をそれぞれ割り當てられた。一番年少の私には、歐羅巴が宛てられた。皆懸命に描いた。私も面白半分大版の洋紙に、借りたコムパスと尺とペンとで、最初は可なり丁寧に描いて居たが、あの出入のうるさい諾威の海岸線あたりから段々いやになつて、後では原圖も疎く見ず、コムパス尺も抛つて置いて、毛筆で放膽的にやつてのけ、皆が屏風で圍ふたり、徹夜で眼を悪くしたり、苦心惨憺の最中を、此方は石けりの遊戯に耽つて居た。期日になると、教室の案上には、巻かれた地圖が山をなした。先生が一つ一つ取り上げては、展げて行く。随分入念に描いたものが多く、中にはあれでも手で描いたのか、と思ふ様なものがある。其内段々と展覽批評の幕は進んで、私の歐羅巴地圖が展げられると、教室は一度に哄と笑ひ出した。私も笑はずには居られなかつた。如何にもそれはわれながら目ざましい傑作であつたのである。海岸線と國境は歪みなりにも描いてあつたが、べた

べたと縁を塗つた露西亞の平原には、筆太のヴォルガ河が黒みみずとのたくり(まさか黒海には注いで居なかつたやうだ)茶色に塗つて駱駝も通りさうな粗い柵を描きまはしたのがアルプス山麓で、英吉利は佛蘭西の上にあぶなく尻餅を春き、伊太利の長靴は長い水浸しの結果だらう、阿弗利加目がけてぶら下り……要するに先生がこれは批評の外だと折紙をつけた程の傑作で、約十分間程も教室一同を興がらせた點から云へば、確に大成功だつたのである。

今朝私は“私の所望”を書きつつ、右の出來事を不圖思ひ出して笑坪に入つた。三ツ兒の魂百まで、とは全然である。あの地圖を描いた兒が、此“所望”を書いて居るのだ。嗚皆が笑つてくれることであらう。

唯一つここに私を慰むるものがある。豫言者イザヤが新世界の豫言に“狼は小羊と共に宿り、豹は小山羊と共に臥し、犢牡獅子肥えたる家畜儕に居りて小さき童子にみちびかれ”と言ふて居る。昔の私は童であつた。五十二の私は、大人の容貌をして居るが、實は矢張り昔ながらの童である。恐らく永久に童であらう。えらい學者、えらい政治家、えらい宗教家、えらい軍人、えらい藝術家、えらい記者、えらい實業家、それらの人人は世にいくらも居る。それらの人人にはそれ等の真人の賦命がある。童には童らしい仕事即ち遊戯があらう。金時の如く熊と相撲をとつたり、狼の耳を引張つたりする事も、其一つであらう。若し童が犢と共に平氣に牡獅子をみちびくならば、それは彼がえらいからでなく、彼が童であるからである。

所 望

一、現在の講和會議を進めて世界的家族會議とし

全世界の各國民各種族の男女代表者を會して、人類の福祉を増進すべく、意志の疏通と感情の融和を圖る。

(人類總會議は、時折開かんことを望む)

二、新紀元の創始

世界の人心を一新し、人類の歴史を更始せんが爲、本年を以て世界共通新紀元の第一年とす。

東洋は其大正、中華民國年號、回教曆等を捨て、西洋は耶蘇紀元を捨て、總て同一紀元を探る。

三、陸海軍全廢

人類再び相殺さずの決意を以て、一切無條件に陸軍及海軍を全廢す。

四、税關撤廢

日の遍ねく照らし風の思ふままに吹く如く、世界の物貨を自由に流通せしめ、需要と供給と自然の調節をなさしめん爲に、一切國際の人爲的關門を撤去す。

五、國際貨幣の制定

萬國共通貨幣は、形容、質、重量を統一し、其他の意匠を各國

の自由とす。

六、還元

自然は支配すべし。地上何ものも無理さることある可からず。土地の領有支配は、自然の位置に因る權利、即ち其土に生れ其土に生活する者に屬するを當然とす。長短期間占領若くは支配されたる遠隔の土地は、土人の意志に反しては占領支配を繼續さるべからず。

即ち其土人が望むに於ては、亞細亞は歐羅巴、阿米利加、阿弗利加より撤退すべく、歐羅巴、亞米利加は亞細亞、阿弗利加より撤退すべく、阿弗利加は亞米利加、歐羅巴、亞細亞より撤退すべし。

(この法則は、大小何れの場合にも應用さるべし)

七、天赦の年

斯年を以て世界の恩怨一掃、舊約聖書に所謂“天赦の年”たらしめんが爲に、一切の負債は宥され、一切の讓與は贈物たるべく、賠償の要求、投資の計算、は一切之れを打切る事。

新紀元元年四月二十一日朝

エルサレムに於て

徳富健次郎

愛

(三)

西園寺侯

閣下

五十餘年前、青春の貴公子として、日本の維新に參與したる閣下が、五十餘年後の今日、白頭猶老書生の意氣を以て、日本を代表して、世界の維新に參與せらるるを慶賀し、閣下の健康を祈る。閣下の知悉せらるる如く、講和會議は徒に對獨戦後の按排補綴を以て終るべきものならず、百尺竿頭一步を進めて、人類の歴史に新紀元を劃すべき曠古の大盛事と信ずるを以て、自然の恩恵により比較的利害の障礙少なく公明正大の立場にある日本の代表者たる閣下が、此上ながら高處大處より着眼し、或は當局の按排に踟躕するの虞ある講和會議を提擧して、それをして眞に人類福祉の爲に大英斷大飛躍を爲さしめん事を切望す。それに就て、一二鄙見のあるあり。ここに録して、閣下に致す。清鑒を得ば幸甚。

新紀元元年四月廿一日朝

ニダヤ民族の古都

エルサレムに於て

徳富健次郎

所望 (略)

(四)

Jerusalem,

Easter Monday,

The first year of New Era.

Mr. Lloyd George:

I am a Nihonese man of letter by the name of Tokutomi Kenjiroh enjoying sojourn here at Jerusalem for past three weeks under British protection. As an Easter gift, I write you this letter in which you will find a few suggestions for the future welfare of Mankind. Without doubt you have something quite similar in your own mind, while in other respects you may perhaps consider them as a fine chimera—fine but not practicable. No, Mr. George, they are not impracticable. It is not the question of "Could," but "Would." We have to do. We must do. I have spent the half of last March at Cairo waiting for the permission to come here. I have witnessed the Egyptians' procession of demonstration marching past before the hotel. Many deplorable acts of them in the provinces I have heard of. Nay, it was their rash act of cutting off the means of communications that detained us so long at Cairo. Now here at Jerusalem I hear of the serious situation in Egypt. Rumors tell

me of the bloods already shed and going to be still more shed. It pains me much that Egyptians should spill away their strength in vain, for a rash appeal to force would never secure them their independence. I am also much sorry for you English, that after five long years of great trial you should have still no time to rest. I have seen at Cairo many Charlie and Johnnie in khaki with their boyish, innocent, sunburnt faces, standing bayonets in hand guarding the entrances of public buildings or the bridges, and my heart ached to think that they should at the command have to fire or stab at the foolish Egyptians! How much better if they were allowed to go home! Why not leave Egypt for Egyptians? Ye Britons who are so jealous and proud of your freedom should sympathize with the Egyptians. No, Mr. George. Peace would never come if force would have its way. There is only one centre in the universe to which all may come together—God or Heavenly Father as Christ used to call Him. There is but one way to the complete peace—that of love, pointed out so vividly by Jesus. To God, our father in heaven we must look up. To Jesus Christ we must turn. You conquered Germans. Now it is your turn to conquer yourself.

To you one of the chosen servants of humanity at this momentous period, to you I appeal to consider seriously what

I propose in the letter. You who are so wide awake and so sagacious should not be ashamed of forgetting yourself for a moment of inspired ecstasy of disinterestedness. Indeed, it is sometimes so necessary and good to be beside oneself, and this is the very time. Don't you think so?

Tokutomi Kenjiroh

I Propose

I. That the present peace Conference be transformed into the household meeting of the whole world to which male and female representatives of all the nations and tribes should assemble to effect the thorough understanding and complete fusion of feelings, so as to enable them to concur for the welfare of the each and all of the members of human family.

(It is advisable to have occasionally such general assembly of whole human race.)

II. Inauguration of the New Era.

To freshen up the human mind and to begin the history of mankind anew, this year should be inaugurated as the first year of New Era for all the world.

(The West shall cease the use of A. D., while The East shall renounce its Taishō, Hegira, etc., thus adopting universal calendar for all.)

III. Total disarmament on land and on sea.

(Resolving that mankind will nevermore kill one another abolish the Armies and the Navies, entirely and unconditionally.)

IV. Abolishment of all Custom Houses.

(As the sun shines all over the world, as the wind blows

at his own will, so as to let the goods and commodities of the world circulate freely, thus ensuring the natural harmony of demands and supplies, abolish all the artificial barriers among the nations.)

V. Establishment of International currency.

(International money should be uniform in size, quality and weight, leaving the design and such to each nation's choice.)

VI. Each to his own place.

Nature shall reign. Nothing shall be forced. On the Earth, possession and dominion of land shall be based on the natural right of position; I. E., the fact of his or her being born and living there. All the land distant, occupied or ruled for periods long or short, should not be continued of its occupation and dominion against the will of the natives.

(So it follows that in case of the expressed will of the natives be such, Asia shall withdraw from Europe, America, and Africa; Europe and America from Asia and Africa; and Africa from America, Europe, and Asia.

This rule shall be applied to every similar case, however large however small be the scale.)

VII. The Year of Release.

Let this be "The Year of Lord's Release" mentioned in

The old Testament. Let this be the year of complete indulgence and free gifts. All feuds must cease. All transgressions shall be pardoned. All debts forgiven. No demand of indemnity. All the invested interests shall be cut short of their accounts. Whatever is given should be free gift.

Amen.

Tokutomi Kenjiroh

Ai

Jerusalem,

Easter Monday,

The first year of New Era.

Mr. Wilson:

Thank you for what you have done and are doing for the cause of humanity. Indeed, it would be pity if this peace Conference would end in mere patch work-doing assembly after the recent rending up of the map of the powers. New start must be given to the history of mankind at large.

I, Tokutomi Kenjiroh, Nihonese by birth, literary man by profession, Christian by faith, musing here at Jerusalem on the future of mankind have come to think of a few things which I feel the necessity of writing to you. Something of which you have already expressed yourself, and some are doubtless in your mind. Would to God that these words of mine which are not mine find response in your heart and bear the fruit.

Tokutomi Kenjiroh

"I Propose."

Jerusalem,

Easter Monday,

The first year of New Era.

To the Editor of "The Times."

Sir.,

In relation to the present peace conference, I have come to think of a few things which I venture to write you. It would be a great pity if this golden chance be missed of making a new and decisive start in the course of human race. I am a Nihonese subject enjoying sojourn here at Jerusalem. I wonder how ye men of Christendom could make Versailles the site for Peace Conference. It is here at Jerusalem that you should have opened it.

Tokutomi Kenjiroh

"I Propose"

Jerusalem.

Easter Monday,

The first year of New Era.

Major Radcliffe

After all I have written a thing intended for the press. Enclosed you will find a letter to "The Times" and another for Nihonese Newspaper Jijishimpō. They are as you will see no correspondence of things seen or heard by myself, but a scheme for general welfare of whole mankind. I believe you would be so kind as to let them pass as speedily as possible.

Rumours reach here of the exceptionally serious situation in Egypt. I pray for Egyptians and English that they may come to understanding without spilling even a drop of their precious blood.

Tokutomi Kenjiroh.

第三 ヨルダン

(一)

書く可き手紙を書き、出す可き手紙を出したので身軽になつた私共は、先日橄欖山頂のベルエデエル塔の上から遠見に眺めたヨルダンの谷、エリコ、死海を訪ふ可く、四月廿四日の朝六時にホテルを馬車で出る。

色々世話が面倒なので、つい近くに店を出して居るクック会社の支店に一切を頼んだ。エリコの宿料を除いて、一切の費用邦貨の約九十圓。馬車は三頭挽。鼠毛の二頭は眼かくしをして頭に小さな鈴をかけ、栗毛の駒は青玉の頭飾りをかけて居る。馭者一人案内者が一人。案内者は土人で、名を Haddad と云ひ、十三年前私がHさんの甥の Robert 私の案内でベテレヘム見物に往つた時、私に會ふたと云ふて、私の顔を見覚えて居た。戦争中は二千圓出して土耳其軍の服役を免れたが、ひどい目に會ふた、とこぼして居た。

馬蹄憂々、鈴音琳々、朝涼のエルサレム城外をケデロンの谷に下り、橄欖山に上り、やがてベタニヤを過ぎる。下の丘腹ではもう麥苜りをはじめて居る者もある。下り阪にかかると、馭者は馬を駐めて 道に落ちて居るタイヤのこわれである大きな護謨の斷片を拾

つた。七時には橄欖山を向ふに下りて、“使徒の泉”に來た。亞刺比亞名では“日の泉”と云ふ。然し飲まれる水ではない、と案内者は云ふ。此處は昔の王ダビデが己が子アブサロムに攻め立てられて逃げる時、石をぶちつけられた處である。

矢車草に似て短く硬い莖に碧色の花をつけたのが、道側に咲いて居る。灰色をした小さな鬍の様な蜥蜴がチョコチョコ奔る。カアツウム籠城の少し前にパレスチナに長逗留した時、蜥蜴の尾をいたづらに鞭で打切つて、それからそれが何時までも頭に引かかつたゴールドンが頭に浮ぶ。

不發の砲彈が草にころげて居る。此處其處には兵帽の破れ、靴の底、鐵片、瓶のこわれなど散亂し、空瓶や罐詰のからが澤山に積んである。山腹に石積み上げた一時的堡壘がある。一昨年十二月エルサレムを落した英吉利軍が、昨年二月土耳其、獨逸軍を追ふて此道をヨルダンの谷に進んだ其跡である。

道に傍ふて、一本の銅線が奔つて居る。エルサレムからエリコを経てダマスコに通ずる電線で、即ち英軍の架設である。それに角鴉がとまつて居る。

昔ながらに淋しい道である。

馬車が此淋しい山の上の谷の道に輾轉の音を立てて駛る内、道の左手に木標の一群が露はれた。墓だ、英吉利人の。小さな十字架のは、兵士か。大きな十字架は、將校のであらう。十九ばかりもある。英吉利からはるばる此様な淋しい處に死にに來たのか。私共の曾か

重くなつた。案内者の言によれば、土耳其方は埋葬する者もなく、犬が喰ひに来るので、英兵の手で一つの大穴にまとめて埋めたさうな。折から二三人をのせた自動車が一臺、私共の馬車を乗り越してエリコの方へ往つた。

八時十五分に Good Samaritan's Inn に來た。エルサレムとエリコの半途である。土耳其兵が據つて居たので、Inn は大破して居る。然し土人が住んで居る。向ふの山の黄なるを黄金山と云ひ、赤いを血の山と云ふさうな。

馭者は車輪の泥よけに先刻拾つた護謨の斷片を打つけて居る。下りになる時、摩れぬ爲に。

日が熱して來たので、私共は先日ホテル近くの店で買つた、白絹の亞刺比亞風の被りものを出して、帽の上からかぶつた。私の中には白、妻の中には黄ろいしめ緒がついて居る。ふわりと軽く、好い氣もちである。

三十分の休憩の後、馬車は再び動きはじめた。

山と山の開いた所から、死海が少し見えて來た。

左手の方は、深い谿になつて居る。谿北は古のベニアミンの地で、南がユダと案内者が教へる。谷向ふの山から、布を垂れたやうに白い水が落ちて居る。エリコ駐屯兵士の用に英吉利人が造つた水道であるさうな。何時もながら英吉利人の落ちついた生活ぶりには感服する。彼は自重する。決して好い加減の間に合はせをしない。道路も英吉利人の支配になつてから改修され、或部分は特に自動車用に

直くて平坦な別路を造つて居る。軍隊用に造つたのであらうが、通る皆が其慶に頼る。洵に“英吉利人は現代の羅馬人”だ。“道づくり”はお手のものだ。如何な渾沌にも秩序を建て、如何な凸凹にも道をつける。“主の爲に道を直くせよ”と云ふイザヤの言を、福音書の記者はバプテスマのヨハネに宛て、耶穌の先驅者をヨハネとしたが、本當の事を云へば“道づくり”の羅馬人こそ平和の君耶穌の爲の先驅者で道づくりだ。羅馬人が政治的に統一する、其あとを平和の君が悠悠と知ろし召すのだ。“道づくり”が道づくりである事を自覺して、平和の君を迎ふれば立派なものだ。造つた道に居据わつたり、關所を設けて往來を止めたりすれば、道づくりの本分を忘れるのだ。平和の君が先驅の道作りに“御苦勞”の一語もかけず、去れがしに邪魔にしてのみかかるなら、それは平和の君が鄙吝なのだ。

此様な事を考へて居る間に、馬車は山の上の道をがたごとと奔つて、エリコの谷を見下ろす阪の上に来た。

十三年前に來た時はもつと深いものに思ふたヨルダンの谷、エリコの平原は案外淺く、今日は思はれた。然し美しい。縁に包まるエリコ。其向ふのヨルダンの流れは見えぬが、深緑の植物帯が、長く延いて川の所在を語つて居る。

馬車は徐々に阪を下りた。阪を下つた處に、また英吉利軍人の墓がある。此處は大分多い。

兵士の天幕を右に見て、橋を渡つて、午前十時、私共の馬車はエリコに來た。

(二)

莢竹桃が満開して居る。棕桐が茂つて居る。柑橘の花が香る。無花果や葡萄が緑の葉と共に緑の實を見せて居る。林檎がもうかなり大きくなつて居る。森の生籬には、無数の實が焦れかけて居る。日の熱と満眼の緑、すべてが私共に熱帯を思はせる。新嘉坡や古倫母が記憶から蘇る。案内者はカイロのやうだと云ふ。

私共の馬車は其中を駛せて、エリシヤの泉池に來た。此は此前の行に見なかつたものの一つである。泉池は深六呎、二段になつて、上には芭蕉の花が浮き、下には小魚が遊ぶて居る。一臺の軍用自動車、水汲みに來て居る。

私共は馬車を下りて、案内者の後から程近いエリコの古城跡を見に往く。十三年前私がエリコに來だ後で、獨逸人が發掘し始めたものである。煉瓦壁や、石垣の跡が、勞弊と残つて居る。穀倉などの跡がある。私共は油瓶の破片や破甕の斷片など拾つた。

案内者は西に高い禿山を指して、あれが“誘惑の山”だと云ふ。耶蘇が四十日四十夜斷食して幻を見た山と謂ふのだ。頂上には圍壁が見え、懷には寺が見えて居る。隱者の洞穴も數多く見える。四旬齋中には、其處に籠つて四十日四十夜の斷食をする修道僧があるさうだ。誘惑の山は少しエリコに近過ぎる。それはもつと奥深く、而してエルサレムが遠望せらるる處であつたらう、と私には思はれる。

山の麓にはまた多くの洞がある。羅馬時代にはエリコ平原に甘

蔗が栽培された。彼處の洞が砂糖 mill 跡である、と案内者が語る。

馬車を待たして置いたエリシヤの泉池に歸る。若い英兵士が二尺餘りもある大蜥蜴やうのものをぶら下げて居る。それは死んで居た。カメレオンではないか、と思ふ。兵士は知らない。案内者も名を知らぬが、蛇を食ふと云ふ。

私共はまた、馬車に乗り、緑の中を村の方に歸つた。十三年前私が泊つた Jordan Hotel は獨逸人の經營で、今は閉されて居る。馬車の往復に私は其二階の窓を仰ぎつつ、私が昔し眠らずに一夜を明かした其窓は何の窓であつたらう、と思ふ。

午前十一時、Hotel Bellevue の門前に馬車を下る。

ホテルは随分荒れて居る。二階の一番西の室を私共は擇むだ。室に入ると、雀が二三羽窓から逃げ出した。洗面の水には子子が遊いで居る。白い蚊帳に拳大の孔が開いて、寢臺は人を弾き飛ばす様にばねが凸く突張つて居る。然し窓の外には大きな莢竹桃の株と、大きな金雀花の叢と、大きなアベンゲリアの花の眞盛りで、紅と黄と紫紅の叢が青空に色比べをして居る。素馨の棚には白い花が一つ二つ。雀が夥しく轉る。

大なる 莢竹桃 と 金雀花 と

窓を覗ふ エリコの ホテル

寒暖計は八十度、可なり暑い、死海の方角から時々風が音づ

れる。此前五月末に來た時より餘程涼ぎよい。

午餐に下りる。食堂は莢 桃金雀花などの咲いて居る其中庭を通つて行くやうになつて居る。シリア風のパン、胡瓜とトマトのサラダもうまい。英吉利の士官が一人、土耳其帽の老紳士と若いのと、食卓を共にする。今朝程途中で私共の馬車を追ひ越して往つた自動車連中だ。士官は倫敦で日本人のYといふ人を識つて居たが、その人を私は知らなかつた。死海ヨルダンを見物した歸りであつた。若いのは死海に泳いだ、と云ふて居た。

(四)

午後一時、私共はホテルの門から馬車に乗る。英の駐屯兵を別にして、今のエリコは住民七百に上らぬさうである。汚ない土小舎、赤いトマトなど店先に並べた小店、傳説ザアカイの家址に建てられた希臘派の Hospice。そんなものの寄りこぞるエリコの里をぬけて、矮い灌木の叢などの疎らに生えた寂しい原を南に駛る。べつとりした沙地の處となすつたやうに白いは、天日で出來た鹽であらう。雁の短かい鶴が飛ぶ。東の方には希臘派の僧院が見える。エリコから一時間半ばかり駛つて、馬車は死海の濱に來た、煙突つきの小舎が幾棟も建つて、渚近くボオトが浮いたり、黒と赤と蝶鱗の色をした汽船が繋がれたりして、死海も大分生々して來た。日ざかりの日に水の面は白つぽく、東西に聳り立つ山山もいかつい顔を和らげ、南

方は茫として山青み、水は空に消えて居る。

案内者は北東の緒禿げた高い山脈の駱駝の背の様になつた二つの峰を指して、北のがネボ、南がビスガと教へる。ネボ山は地中海抜2643呎、絶頂からは死海ヨルダンの谷一帯、南はヘブロンから北ガリラヤをかけて、地中海岸のカルメル山、ダマスコに近いシリア第一の高峰ヘルモン山まで、一望の中に収めるさうな。モオゼが死ぬ前に其處からカナンの全土を眺めた處だ。其緒禿げた駱駝の瘤の様な一塊を死海の濱から眺めて、私はモオゼを初めとし契約のカナンを眼望む事をゆるされて足踏む事をゆるされなかつた古來無数の名ある名無いモオゼ達を思ふて、涙ぐましい心地になつた。皆が御苦勞のお蔭で、我我人類は兎も角も二十世紀の此新しい迦南までやつて來たのだ。

渚の丸太に腰かけて、妻は寫生道具を取り出した。私は着て居る限りを脱いで、大膽に歩いて水に入る。そんなに冷たくない。二三歩行くと直ぐ深くなつた。私は抜手を切つて少し泳いだ。鹽分が多いので、躰がよく浮く。水が重く、少しべとつく氣もちはあるが、それでも好い氣もちになつてしばらく泳いだ。而して渚に上ると、ヘルメット帽を赤裸にかぶつて、小石など拾ふ。

小舎に憩ふてゐた案内者が、“もう晩くなるから”と聲をかけた。妻は寫生を中止し、私は疊いで服を着て、三時三十分また馬車に乗つてヨルダル川に向ふ。

“敬禮山！”

案内者が突然叫んだ。

指さす西の方を見ると、山又山のあなたに橄欖山の頂が出て、其處に見まがふべくもあらぬ露西亞のベルゴデエル塔と獨逸の高塔が立つて居る。エルサレムは橄欖山の蔭になつて見えない。先日はあの露西亞の塔の上から此死海ヨルダンの谷を眺めたが、今は其ヨルダンの谷から橄欖山を見て居るのだ。エルサレムから見ると、露西亞の塔が高い様に見えたが、此方から見ると、北に寄つた獨逸の塔の方が著しく高い。

歩けば足がべとつきさうな然し馬車の轍もそんなに沈まぬ濕平地を、少し北東に往つて、追々緑の領分に入る。檉柳の矮生が多い。植木屋が刈り込んだやうな圓つこい灌木叢がぼつりぼつり。雁の短かい鶴が何羽となく空を舞ふたり、悠悠と草地に立つたりして居る。妻は十九羽を数へた。黄ろい花の咲いたは、何の草か知らぬ。

緑の間から忽然ヨルダン川が鉛色に光つて露はれた。忽ちまた隠れた。眼に満つるは深い緑の高からぬ林。其梢から白つぽい丘がちらちら覗き、丘の背にヨルダン東の山山が、緒禿げた頭を高く、午後の空に聳り立てて居る。

馬車は路の無い林を勝手に進む。さやさやと灌木を分けて馬車が駛ると、緑の木の枝が時々私共の帽や服の Sleeve を刎ねる。

やがて川岸に来て駐まる。犬が吠える。天幕がある。それは漁師の天幕で、希臘人であつた。

私共は馬車を下りて、川岸に立つた。此前も来た彼場所である。

十五六間の川幅一ぱいに、濁つた川水が溢るる様に、随分急に流れて居る。深さ十六呎と案内者は云ふて、水面の小さな渦を指した。

一隻の小舟が、檉柳の蔭に繋がれて居る。

急に乘つて見たくなつた。案内者が土耳其帽の希臘人に話すと、早速承知して、小さなトダンの金盃で、舟のアカをかひ出し、それから檉柳の小枝を折つて、岸のぬかるみに敷いてくれた。妻が先づ乗り、私もついて乗つた。案内者が岸から聲をかけ、片寄らぬやうに注意する。舟が脆さうで、少し險存に思ふ。

土耳其帽の漁師は Oar を両手にとり、前の方に俛みながら力漕しはじめた。兩舷から少し水が漏る。少々不安だ。然し水の上は面白い。

舟は徐徐にヨルダン川を廻りはじめた。流れは中々急である。雨季を過ぎたばかりで、水量が多いのだ。兩岸は恐ろしく丈高い葎や、檉柳や、木藪の隙な花をつけた木や、色色の緑が茂り合ふて居る。林中には Hyæna や山狗が居るさうだ。木の株などが川中に横たはつて居る。川の流れと共に舟が一廻りして上る。林中にキンキリンと一聲鶯が鳴いた。私共の粕谷の夏が其一聲に呼び起されて、たまらなく日本戀しくなる。

晩いので、尙廻ることを見合はず。漁師が Oar を收めると、流れのままに舟は獨で下る。妻はさし覆ふ木の小枝をちぎらうとしたが、流れの速い爲に出来なかつた。水がずんずん漏り出したので、私は小さな金盃でせつせとかひ出す。

やがて舟はもとの岸にとまつた。妻が滑つて、舟底のアカに靴を濡らしただけで、私共はヨルダン川の浸禮を受けることなしに岸に上つた。

ヨルダン川の漁は網です。家族の祖父らしい爺さんが、木の枝からかけて網をすいて居る。案内者は取り立ての鮮魚を一尾私共に見せた。それは私共の玉川でとれるマルタの様な魚だつた。マリナではなかつた。此等は取れ次第夜をこめてエルサレムに送られるのだが、私共のホテルでは羊肉、牛肉、犢肉、胡瓜、朝鮮蓴、人蔘、馬鈴薯などの外、殆んど魚と云ふものを見ない。

漁師のかみさんが、私共の爲に珈琲をつくる。眼のくるくるした六つと四つばかりの男の子が、はだして遊ぶて居る。妻が持参の落花生と有平糖をやると、顔を崩して早速喰べる。先刻吠えた黒斑の大きな犬が尾を振り振り愛想する。夜は天幕を護り、晝は子供の伴をして、水に落ちても脚はへ上げるに違ひない。此四足の忠僕の頭を撫でてやる。

小舎がけの下に、小舟が造りかけてある。天幕の一方は、紅白さまさまつぎあはしてある。天幕から少しはなれて、地上に小高い棚床をかいて、Bed を一つ置いてあるのは、老人の居所であらう。

亞米利加の Pioneer 生活を描いた Fenimore Cooper の小説の一章でも讀むやうな、ヨルダン河畔の此天幕生活は、私共を羨ませた。詩的であり、畫的である。妻は鉛筆寫生をはじめたが、それが半分も出来ない内に、かみさんが珈琲と水とを持って来た。案内

者と駁者は已に済まして居たので、私共は白木の腰掛で珈琲と水とを飲んだ。

珈琲がうまい。水はヨルダンを汲んだのらしく、生温い。

ヨルダンの 川そひ柳 テントして

日ぐらしの 夏を 君と住まばや

あ い

私共に代つてヨルダン川邊に天幕住居する希臘漁師の一家に禮をして、午後五時私共は馬車に乗つた。

林をぬけ、矮い刈込叢の散在した庭の様な砂地を西に駛る。白い花に包まれた灌木の簇が遠近に見える。丁度日はエリコ向ふの山に落ちかけて、ヨルダンの谷に落日の光が溢れて居る。エリコの碧い夕煙が立上る。原に散ばつた灌木叢も、私共の馬や馬車、いや私共自身の影までも、長長と地上に曳いて居る。私は十三年前の五月の末方、矢張夕日に此處をエリコへ馬車で通つた昔を思ふ。

我馬車の 影長く曳き ヨルダンの

谷は 夕日の 光に満ちぬ

ヨルダンの 川ゆ 歸れば 夕日影

エリコの 盤 青く 上るも

馬車の上から北の方を望むと、東西の山開けて、ヨルダンの谷は末遠く空に接して居る。此谷を何處までも上つて行くと、ガリヤ湖に出るのだ。往つて見たいが、また来る時にしやう、と私が云ふ。妻が私の氣永を笑ふ。私は曰ふた。此前來たのが十三年前だ。十三年経て三度目に來るとして、私は六十五、脚は五十九。六十五と云へば四年土耳其の俘虜になつて、病氣して、それでまだあの位しやんとして居る Hensman さんよりも若い。何の氣永があるものか。

白いものがちらと私共の馬車を掠めて飛ぶ。蝶々——と思ふたら柳絮だ。妻は馬車の上から野麻の葉を摘むだ。佳い香。十三年前死海からヨルダン川に行く途中で、矢張馬車の上から私が摘んだも其葉である。あの時の同行者であつた英吉利の若い宣教師 Mackay 君や、ヨルダン川を泳ぎ渡つた亞弗利加ザンジバルの土人、眞黒で英語の上手の Abdullah 君は、如何したであらう？ 右手に希臘派の修道院が見える。前の時、夕日の原を後手組んでぶらぶら歩いて居た僧は、あの院のであつたに違ひない。生きて居るか、如何か。

馬車は、しばらく馳せては段を上り、またしばらく駛せては、段を上り、段段とエリコの方へ上つて行く。私共の馬車が上る程日は下り、影は彌長くなつて行く。

“蛇！”

案内者が叫ぶ。驚として見ると、二尺ばかりの白つぽいのが遠て左へのたくつた。毒蛇さうな。今度の旅行で初めて見た蛇。

野藪の叢を過ぐる。實が生つて居る。急に馬車を止めさせ、案内者に云ふて、ちぎつてもらふ。馭者も下りて行く。高い枝を引寄すべく私の曲柄細巻の蝙蝠を貸した。二人が採つて來たのを見れば、小さな圓つこい囊で、褐色に熟したのは椶の實の甘さがした。

駱蛇の群がエリコの方へ行く。何か積んで五六頭次から次とつながらつて、がつくりがつくり歩いて行く。ヨルダンの向ふのアムマンからエルサレムに行く貨物運送である。アムマンは、ダマスコから亞刺比亞のメツカに通ふ回教徒の參宮鐵道の一驛である。エリコから一日路に遠い、と案内者が云ふ。と聞いて、また其アムマンの方へ往つて見たくなつた。

夕六時ホテルに歸る。夕日なほ残るホテルの庭、莢竹桃の紅が燃えるやう。

雀噪ぐ。エリコの宿は 夕日して

紅燃ゆる 莢竹桃の叢

素足のシリア女が持つて來てくれた水で汗の顔や體を拭いて、私共はバルコイの藤椅子にかける。案内者が馭者かと思ふ土耳其帽の男が來て、バルコイのアマリリスや朝顔の鉢に如露の水をやる。それはホテルの主人であつた。

今日エルサレムから驢馬で來たと云ふ。エリシアの泉池から水道を引く計畫をして居るが、免許の手續が面倒だし、それに鐵管が

馬廄に高くて、とこぼして居た。

主人は灌水を終つて去つた。

人げのないホテルのバルコニーに籐の樂椅子を相對して私共は疲れを休める。エリコの夕は好い。日の熱過ぎて、死海の方からそよ吹く風が夕涼と花の香と鳥の歌を持つて来る。バルコニーの外には、大きな梅檀の木や Pepper tree が、綠葉の間に紫や朱の花を擁して居る。死海向ふの山は今紫になつた。星がちらちら覗き出し、蛙が咽を鳴らす。松虫のやうな虫の音がする。十三年前蚯蚓と間違へた地虫の蟻螻が聞こえる。甘い哀愁が鴉片のやうにうつとりさせる。

バルコニーに 夕居をすれば 蛙鳴き
虫鳴くなへに 故郷 おもほゆ
健

バルコニーに 風さと吹きて 虫の音の
千尺地下に ふと消え去りぬ
あ い

(五)

四月廿五日。時計を見誤まり、夜の二時半に起きて了ふた。バルコニーに出れば、缺月茫として、夜氣は熱帯の海のやうに温かだ

る。エルサレムから3700呎低く、地中海面から1200呎低いだけの事はある。

四時頃に、雀が囀り出した。

五時に食堂に下りて、朝食。

馬車の用意を待つて、庭を歩いて居ると、私共の窓の闕下に雀が一羽はさまれて死んで居るのを、妻が見つけた。他の同類が、何羽となく、來ては突つくので、雀は同類相食むのか、と妻は淺ましがらる。私は室に上つて、硝子窓を開け、闕下のはざまから、雀の死體を引き出した。寢ぼけ雀め、無鐵砲に飛んで來て、板のはざまに頭を突込み、而して絶息したのであらう。それを友雀が啣へて引出さうとして、かはるがはるつついたのに違ひない。

私共の案内者が、枝に飛びついて、莢竹桃の小枝を折つてくれた。眼がさむる様な鮮紅の八重で、花は椿程の大きなものであつた。

五時半、馬車に上る。

阪下で、馬車を軽くする爲に、男三人は下りる。此邊の Bedouin 即ち浮浪アラブは危険なので、十三年前來た時は、屈強の男が長劍を佩び長い鎗を持ち、騎馬で馬車を護衛した。其様な話をする。今は英軍が駐屯して居るので其様な心配はない、加之萬一の時は此様なものを持つて居ます、と上衣を掀げるを見れば、右脇に小形のピストルを挿して居た。人の悪くない案内者だが、ちよといやな氣もちがする。

阪の上から、私共はふりかへつてエリコの谷を眺め、更に身を

轉じて、直ぐ下の深い窟を見下ろす。窟向ふの削り立てた標な山の側面に、細い徑がついて居る。修道院に行く路である。馭者が石を投げる。空を切つて、遙か下の窟に落ちる。素より音が聞えやうもない。眼が舞ふやうだが、若い馭者は、土耳其帽の下から白い手巾かぶつて、斷崖の端の石に腰うちかけて、平氣に卷煙を煙らして居る。窟の奥に、白い瀧が見える。五人ばかり、蟻のやうに其瀑を志して遙か下の徑を歩いて居る、と妻は云ふが、私の眼には見えない。向ふの絶壁には、隠者の洞穴が數々見える。落ちさうな危岩を白い建物で支へて居る。籠る隠者も、度々の食物も、綱でつり下ろされて其洞には入る、と云ふ事である。

馬車に上り、少し往つて、私共はまた窟向ふの希臘修道院を遠望す可く、馬車を下りて絶壁の端に立つた。昔豫言者エリヤが王者の怒を避けて無人の山洞に隠れた時、鳥來つて之を養ふたと傳へられる其洞は、院内に取りこめられて居るさうだ。院と窟を隔てて此方の崖腹掌大の地にこんもりした一簇の緑は、彼修道院の園で、其處には柑橘、バナナ、何でも出来る、と案内者は云ふ。

七時半頃馬車は善サマリア人亭に來た。三頭の馬は飲み且食ふ。馬車の上の私共も、エリコのホテルから持參のパン、全熟の卵、Orangeを出して食ひ、魔法瓶の水を飲む。

一時間の休憩の後、馬車はまた動き出した。薔薇色の美しい野花の一株を見て、案内者に折つてもらふ。莖はアカネエシヨンに似て、花は畫鏡の容色をして居る。亞刺比亞名でマントレルバルと云

ふさうな。全く枯死したやうな容をして居て、水にさへ會へば忽ち若やぎ、生生となるといはれて居る所謂エリコの薔薇は、今はエリコには無いさうだ。後で、ホテル近くの店で、買物の折に、主人がエリコの薔薇だと呉れたものは、一塊の海綿の様に乾燥したもので、水に漬けたら可なり膨んだが、勿論縁に復活する程度のものではなかつた。それは兎に角、パレスチナの花の強いには驚く。それはユダヤ人のやうに強い。先日ベテレヘムから採つて來た野芥子や薔のぐつたりして居たのが、一夜の中に水を上げて生生として居たのに妻は驚いて居た。堅忍、頑強、活力、ユダヤの特色がユダヤの土から生れる。植物に咲けば花、人に現はるればユダヤ人になるのだ。Palestinaの花の香が高かつたり、總じて中央亞細亞から西亞細亞の乾燥地の果物が殊に甘く水氣が多いのも、沙漠を渉る駱駝の胃袋に水が多く貯へられると同じく、あくまで生きやうとする自然の生命が自づからなる努力の結果に外ならぬのであらう。パレスチナには薔の種類が多く、色も紅、白、黄、淡紅、紫がかつた碧色のすらある。薔に限らず、花は美しく、恐しくトゲトゲしい植物が多い。如何にも我強い、自愛的な、戦闘的な、人好きのせぬ、世界の憎惡を集むる猶太人を野に見る心地がする。

馬車に驚いて蜥蜴が、ひよい、ひよこ、びらりと小鳥の様に飛ぶ。而して道側に突出た岩の上などに行儀よく手をついて、小さい鰭の嘴を上向け、下顎を見せて居る。濃い灰色をして、がざがざした肌が、滑つこい、ちよろちよろする日本の蜥蜴とは、全く別な感を與

へる。馴れては却て此方がよいが、初めて見れば薄氣味が悪い。

橄欖山の東腹につけられた電光形の阪を上りながら、後を見ると、善サマリヤ人亭が遙に小さく見えて居る。それは其邊の赤い岩、即ち血の丘の色が著しい爲によく見える。それから此方の山頂の處處白つ禿げた箇所一斑斑として居るのは、今度の戦争で砲弾がつけた山の傷痕である。

午前十一時、私共はホテルに歸つた。案内者と馭者に祝儀をやり、馬を轎ひ、室に歸り、それから顔を洗ひ、服をあらためて、午餐に下りる。唯一夜の外泊でも、やはり歸つた感がある。

第四 エルサレム (續)

(一)

四月廿五日。ヨルダンから歸つて、午餐後、Blindをしめて一睡。エリコの我強い Bed のあとに、従順な Bed の寝心地がよい。

さめて綠茶。

ほし物を取り入れにバルコニイに出た妻が、隣の室のバルコニイに出たFさんの女中と話して居る。Fさん達はいよいよ今夜の汽車で埃及に行き、カイロに少し居て、來月は英吉利に歸るさうだ。妻も、女中も、名残が惜しいと云ふやうな言を云ひかはして居る。

夕食の時、F夫人は花餅を私共の食卓に持つて來たが、食終ると、Fさん夫妻は再會を約しつつ握手して去つた。故菊さんの仲立ちで、旅先きながら懇意になり、ダマスコ歸りの後も、ダマスコの話をしたり、買つて來たダマスコ絹、銀造りの短劍など見せてもらつたり、唯一度私が共通貨幣を言ひ出して、Fさんにそれは駄目と頭を掉られたきり、別に深い話はしなかつたが、垢ぬけのした人達だけに、隔意はなかつた。Fさん組が去つたので、私共も少し淋しくなつた。

Fさん達に限らず、ホテルに見馴れた顔、大分見えなくなつた。

ホテルの食堂で、言葉は通せず、互に笑顔でのみ親しみ會ふた軀が、知らぬ間に立つたので

食堂に見馴れし 笑顔 ふつに 消え
旅の あはれの いやまさり 行く

見るたびに 笑みかはしつる 異國の
軀は 見えず けふは淋しき

あ い

(二)

四月二十六日。Fさん達は去つた。私共のエルサレムでの仕事も終つた。私共も少し動かねばならぬ。私共は約一ヶ月の豫定で、ナザレ、テベリア湖、ダマスコを歩いて來やうときめた。そこで今日は旅券の事で知事官廳に出かける。

知事の室前に待つて居ると、H夫人にそつくりの婆さんが來た。H夫人が着いた様にも聞かなかつた。念の爲聞いて見ると、H夫人ではなく、ラムレエに働いて居る宣教師で、今Sさん宅に居るさう

だ。

知事が來た。用を聞いて、私共を副官大尉に引合はせる。先刻の老婦人が私共に先を譲つてくれたので、大尉に用向を話す。英吉利人の中でもこれはまた圓ぬけた尖高い若い大尉さんである。早速私共を二階に連れ行き、旅券係の禿げた大尉に引合はしてくれた。出立の朝お出でなさい、と云はれて早々に歸る。此處でも、要處はすべて英吉利人だが、下まはりは大抵シリア人を使ひ、若いシリア娘などが嬉しがつてタイプライタアをたたいて居る。

私共の來たてに私共の世話をしてくれた室の給仕の老 Anton は、ある日、蒼い顔せいせい息をして、體が悪いから醫師へ往くと云ふて居たきり、久しく顔を見せなかつたが、今日午餐に下りる時土耳其帽の其姿を久しぶりに見かけ、死んだものの生き歸つて來かやうに悦んで、握手する。

午後一睡。

四時頃書き物をして居ると、突然空が眞闇になつて來た。颯と一陣猛風が吹いて來る。カランと響して、下の鋪石に硝子が落ちて碎ける。バルコイの洗濯物を取り入れる間も窓をしめる間もなかつた。Note book の上が一面の沙塵になつた。馬鹿に暑いと思ふと、寒暖計が83度に上つて居る。例の沙漠から來る Sirocco が吹いて來たのだ。沙漠の息だ。私は硝子窓からエルサレムの城上、空も地も眞暗になつて居る所謂天地晦冥の狀を見て、耶蘇が十字架に上つた日の“時およそ十二時頃より三時に至るまで、通ねく地の上黑暗と

なれり、日光くらみ殿の内の幔帳より裂けたり”とあるも、此様な光景であつたらう、と思ふ。

六時頃屋上にのぼる。風は止むだが、空は一面雲をかぶつて、エルサレムは黯澹として居る。それで寺々鐘が鳴つて居る。而してお墓の寺の頂には、またもや十字の燈明が輝やいて居る。今頃何の燈明だらう？ 後で聞けば、今日が耶蘇の所謂昇天日であつたのだつた。

復活節が過ぎて、其爲に群がつか客は追々に去り、今は私共が故參の一組である。私共の外には、始終闊魔顔をして居るあの亞米利加の雑誌記者と、足の悪いシリア紳士位なものだ。

(三)

四月廿七日。エルサレムで五度目の日曜。例によつて、午食には米がある。埃及米だ。相應に食へる。

午後私は疲れ、妻は齒痛が可なりひどいが、努めて服を換へ、徒歩で汽車の時間開き合はせに停車場に往つた。軍用自動車、自轉車、馬などの往つたり來たりする白塵立つ大道の日熱して、徒歩の人は疲れること甚しい。停車場は閉ざれて居たが、カアキイの英吉利兵士が時間を教へてくれた。エルサレムからヤツファへは午後一時半と午後八時半の二回。ラッドからハイファへは、朝の七時二十分が急行で、ハイファに午前十時廿三分に着く。午後八時發のは、各驛

に停車する。そこで私共もエルサレムを夜汽車、ラッドを朝汽車で立つときめる。土人の子供が他の一人の英兵を捉へて、指環を戻してください、指環をとぼろぼろ涙をこぼして居る。兵隊さんたちも、土人の子供でも鬨らねば、退屈で詮方がないのだ。

大道を少し歩いて、西にきれ込み、木蔭涼しい郊外宅地を歩く。ある官邸の門前の掲示板に、タイプで書いた最近報が出て居る。英吉利が埃及に増兵する。米國が英吉利の埃及保護を承認する云云。先日着いた日本の新聞に、朝鮮のごたごたが出て居た事を思ひ合はせて、考へ考へ私共は歩いてホテルに歸つた。

(四)

四月廿八日。昨日は八十度からあつたが、今日は六十度を少し越えただけだ。毛のシャツさへ着て居れば、發汗しても風ひかぬと云ふHさんの注意で、私共は風をひかずに居る。一つには氣温の狂ひがひどくても、乾燥のお蔭だ。

Credit Lyonnais に往つて、香港上海銀行の信用狀で、200磅引出す。丁寧に客間に請じ、埃及紙幣で19296½Pくれた。十三年前は勿論土耳其貨で、それについては佛貨が流通して居た。今は英吉利が埃及をパレスチナ、シリアまで引張つて來て居る。

日本の新聞を見る。朝鮮がますます面倒だ。蒙古種族がキルソソ大統領に打電して、講和會議に出席の要求をして居る。新聞が人

種差別撤廃を論じて、ナポレオン敗亡後維納會議で英吉利が奴隷廢止の提議をした事實を引いて居る。

四月廿九日。出發を五月一日の夜汽車ときめて、そろそろ荷づくりをはじめ。

四月三十日。午後Hさんを赤十字病院に訪ふ。三日前退院して、誰も其所在を知らぬ。方々尋ね廻つて後、郵便局に往き、其私書面に置手紙して歸る。

歸つて一時間立たず、扉を敲く者がある。開けば、Hさん。今局の置手紙を見て來たのだ。Hさんは郊外の學校側のある知人の家に居るさうだ。H夫人はのびのびになつたが、それでも一ヶ月内には來るだらうと云ふ。英文不如歸の禮などHさんは云ふて居た。赤十字病院は無料のやうであつたが、何角と不自由らしく見えるので、私共は美しい水仙模様の熨斗袋に埃及の磅紙幣五枚入れ、あなたの無事なお歸りのお祝ひの印ですと云ふてHさんに贈つた。Hさんは喜んで、子供の如く“ありがたう”と云ひつつそれを收めた。

茶菓を喫して、Hさんは歸つた。

今日ヤツファア門外で、果物賣の盤臺に紅の牡丹の蕾を二つ見た。最早船谷の牡丹も咲かう。筈が毎日出て居やう。Hさんが茶の話をしたので、最早十日すると茶摘みの季節、と私共は答へて、恒春園なつかしくなつた。

(五)

五月一日。朝、知事官廳に往つて、旅行免狀をもらう。

歸るとやがてHさんが新着の日本の新聞と手紙を持つて來て、しみじみ昨日の贈物の禮を云ふた。

ハイファ近くに居る拘留仲間の基督者の猶太人に、紹介の名刺をくれた。Hさんは病院に居る中は、鏡もないので、私共のホテルに來ての歸るさは、きまりが悪る氣に笑ひながら、客間の鏡で古いネクタイなど直して居たが、退院後は知人の家で少しはくつろいで見える。それにしてもH夫人が早く來ればよい。然し何も知事が引受けて居るさうで、いまに着くだらう。

宿料を拂ふ。一ヶ月で邦貨約四百圓。埃及磅紙幣を三枚心附に置いたら、帳場の土耳其帽が一寸其意を得なかつた。先日 Cook の支店で聞き合はすと、船便は至つて稀で、當にならず、城西土に行くには矢張汽車でカンタラに出るが好都合である。そこで私共もナザレ、ダマスコの小旅行を終へたら、一旦エルサレムに歸る事にきめ、荷物の一部はホテルに残す事にした。

午後一睡。

それから例の屋上に上る。美しい日である。而してエルサレムは矢張美しい。

拂ふべきを拂ひ、與ふべきを與へ、早めに夕食を終へて、夕七時帳場や給仕に見送られて、旅の中の旅に出づべく、私共は荷物とホテルの裏口から馬車に乗る。

第五 HAIFA

其 一 天幕の一夜

(一)

五月一日の黄昏、エルサレムの停車場は、發車前非常の混雑の中を、辛うじてカアキイの兵士驛夫を要して、ハイファ行き
の切符を買ひ、車室に乗込む。眞暗く、小田原提灯ともす。大分たつて、カアキイ驛夫が来て、瓦斯をつけた。それでも薄暗い。土人の中供、小供が、大勢で手荷物を持ち込み、果ては一旦貨物車に積んだ筈の Portmanteau まで、車室に持ち込んで、彌が上に金をせびる。

不圖西の窓から覗くと、黄金の角を月は掛け、宵の明星はびつくりする程大きく光つて居る。虫の音が降るやう。

弦月 と 光争ふ 明星の

歌や こぼるる 虫の音 あふる

八時半發車。車内は、頭に繻帶したダマスコの若い赤帽、今宵私共のラッドで泊る宿の主と云ふ若い土人と、私がエルサレムは二度目と聞いて、“ごは、君は、旅行會社の Agent ですね。”と云ふた他の若い男と。

黒闇を、轟轟と、汽車は駛る。

薄暗い車室に、其響を聞き聞き、私共はうとうとする。

其内、灯がちらちらして、汽車が止まつた。最早ラッドに着いたのであつた。時計を見れば、十一時前。エルサレムからは、下りで、汽車が速いのだ。

(二)

私共は、汽車を下りた。カアキイに問へば、荷物は汽車に置いて大丈夫と云ふ。私共は、各自小さな Case を提げて、今宵の宿に往く。ハイファ行きの汽車は、明朝なので、是非一泊せねばならぬ。構内の燈火は暗し、睡くはあり、仕切りのはりがねや、天幕の綱に、危く躓きながら、大きな天幕に來た。大勢の男女が、眠つて居る。ある者は、Bed の上に。或ものは、沙の上に。借切りのはないか、と問ふたら、案内者は、私共を其裏のやや小さな天幕に導いた。此處は、婦人の天幕で、上からつるした石油ランプの光で見れば、ベッドの多くはふさがつて居る。

妻を婦人の天幕に残して、私は案内者のあとから程近い男の天

幕に往つた。約二十のベッドが、あるものは高く、あるものは低く、縦に二列に列べられ、さまざまの寢像がランプの明りに照らされて居る。ズツクを張つた高いぐらつく Bed を、私は宛てがはれた。私共の荷物が、運び込んである。数へて見ると、数が一つ足らぬ。餘程考へて見て、Suit Case が不足して居る事を、やつと思ひ出した。居合はず土人の若者を連れて、列車に往く。何で、無断で、天幕内に運んだのか。汽車係の兵士が、車内の荷物を皆出して了ふた、と彼は云ふ。

汽車係の若い兵士は、腹立聲で、荷物なんか一つも残つて居ない、と云ふ。兎や角言ひ宥めて、私共のであつた車室の扉を、あけてもらう。果して、Seat の下に、Suit Case は入つて居た。兵士に禮を言ひ、若者にかつがせて、天幕に歸る。先刻荷物を運んだのも來て、私に三志くれと云ふ。10P 札二枚やると、大喜して、兩人は去つた。

私は着のみ着のまま Bed の上に横になつたが、寢心地が悪い事、夥しい。

其處に、先刻汽車で同乗した、あの土耳其帽が、宿帳をつけに來た。私は鉛筆で、彼か出す紙片に、姓名、國籍、宗教、職業など書いた。妻は、別に書くのだ、さうな。

彼に言ふて、私は低い Bed に移つた。

それは、やはりズツク張りの假寢臺だか、先の高いのよりは、寢心地がよい。仰に寢て、両手で砂が爬ける。時計を見ると、直ぐ

十二時と云ふ處。外套を膝にかけ、眼鏡をはづして、ランプの光を避くべく、鐵色のハンカチで、顔を掩ふた。

鼾の聲。驟く聲。

犬が吠える。

私は何時しか眠つた。

* * *

眼がさめた。

時計を見れば、三時。

窈と Bed を下り、手を淨むべく、天幕を出た。

恐ろしい星の夜だ。仰げば、頭上、眼を下ろせば、つひ向ふの黒い杜の上まで、何方を如何向いても、星でない處はない。而してそれは、日本で、遠いものに見馴れた、あのただの星ではない。單に美しいと云ふには、それはあまり大きく、あまり近く、あまり強く、光つて居る。全く人を光り倒す光りやう。私は呆氣にとられて、空を見上げつつ、そこに立竦んだ。此夜天の榮光に、人は得耐へず、眠つて居る。天幕をめぐつて、雨が降るやうに鳴く虫の音ばかりが、星と天地の夜曲を合奏して居る。星も降るやう。蟲の音も降るやう。私は、降ると云ふ外に、形容も出來ぬ、此光と音の合唱の中に、身震ひしてやや久しく立ち盡した。

天幕を 出れば 星の夜なりけり

願きて 立つ 人の子 われは